

農地整備事業（通作条件整備）松山南部3期地区農道工事に伴う埋蔵文化財調査報告書

恵原新張遺跡

- 1次・2次・3次調査 -

2018

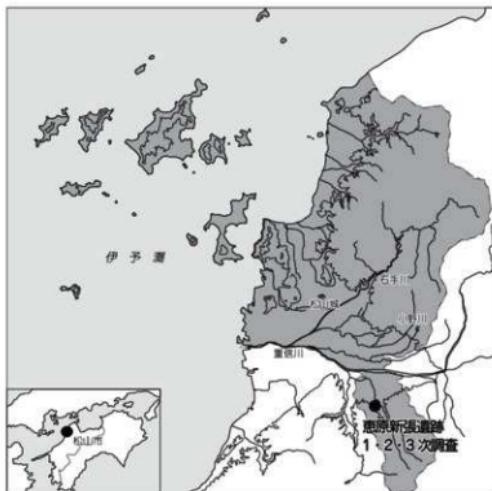
公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団
埋蔵文化財センター

農地整備事業（通作条件整備）松山南部3期地区農道工事に伴う埋蔵文化財調査報告書

え　ば　ら　に　ば　り　い　せ　き

恵原新張遺跡

- 1次・2次・3次調査 -



2018

公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団
埋蔵文化財センター

卷頭図版1 調査地全景①（南上り）



卷頭図版2. 調査地全景②(東より)



序　言

本書は、愛媛県中予地方局による松山南部3期地区農道工事に伴い実施した埋蔵文化財発掘調査の成果をまとめた調査報告書です。調査地が所在する松山市恵原地区は松山平野南部に位置し、中世の城郭である荏原城跡や八ツ塚群集古墳などの県指定史跡をはじめ、縄文時代から中世に至る遺跡が数多く発見されています。

今回の調査では、弥生時代から古墳時代の遺構・遺物を発見しました。弥生時代では中期後半や後期末の竪穴建物が検出され、古墳時代では竪穴建物や掘立柱建物のほかに古墳に伴う石室2基が見つかりました。とりわけ、古墳時代では厨房施設であるカマドが検出され、当時の建物構造や建物廃棄時の様子が知れる貴重な資料を得ることができました。また、調査では古墳時代を通して集落が継続して営まれ、その後、7世紀には古墳が築造されるようになり、居住域から墓域へと移り変わる様子も明らかになりました。

このような成果をあげることができましたのも、埋蔵文化財に対する関係各位の深いご理解とご協力の賜物であり、心より感謝申し上げます。

また、本書が埋蔵文化財の普及啓発や調査研究に活用していただければ幸いに存じます。

平成30年11月

公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団
理事長　本田　元広

例　言

1. 本書は公益財團法人松山市文化・スポーツ振興財團埋蔵文化財センターが、平成27年5月から平成28年6月までの間に松山市恵原町内において、愛媛県中予地方局産業経済部農村整備第二課による農地整備事業（通作条件整備）松山南部3期地区農道工事に伴い実施した埋蔵文化財発掘調査の成果をまとめた調査報告書である。
2. 遺構は、呼称名を略号で記述した。
竪穴建物：SB、掘立柱建物：掘立、溝：SD、土坑：SK、柱穴：SP
3. 本書で使用した標高値は海拔標高を示し、方位は国土座標を基準とした真北で世界測地系に準拠している。
4. 本書で報告した遺構埋土及び土層の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』（2006）に準拠した。
5. 本書掲載の遺構図や遺物実測図の縮分は、縮分値をスケール下に記した。
6. 報告書作成に伴う遺物の復元・実測・製図及び遺構の製図は、担当職員である水本完児の指示のもと、松本 美代子、越智田 美紀、坂本 久美子が行った。
7. 本書掲載の遺構写真は水本が撮影し、遺物写真の撮影は作田 一耕が行った。なお、写真団版の作成は水本が行った。
8. 発掘調査における基準点・水準点の設置は、株式会社真鍋設計事務所（1・3次調査）とセントラルエンジニアリング株式会社（2次調査）に業務を委託した。また、航空写真撮影は南海放送サービス株式会社に業務を委託した。
9. 本書の執筆と編集は水本が担当し、浄書は平岡 直美が行った。
10. 本書で作成した図面・記録類及び出土品は、松山市立埋蔵文化財センターで保管している。
11. 報告書抄録は、巻末に掲載している。

本文目次

第1章 はじめに.....	1
第1節 調査に至る経緯.....	1
第2節 調査・整理・刊行組織.....	1
第3節 遺跡の立地と歴史的環境.....	4
第2章 調査の概要.....	7
第1節 調査の経緯.....	7
第2節 層位.....	8
第3節 遺構・遺物.....	9
第3章 恵原新張遺跡1次調査.....	13
第1節 調査の経緯.....	13
第2節 層位.....	14
第3節 遺構と遺物.....	22
第4節 小結.....	62
第4章 恵原新張遺跡2次調査.....	75
第1節 調査の経緯.....	75
第2節 層位.....	76
第3節 遺構と遺物.....	79
第4節 小結.....	97
第5章 恵原新張遺跡3次調査.....	105
第1節 調査の経緯.....	105
第2節 層位.....	105
第3節 遺構と遺物.....	109
第4節 小結.....	120
第6章 調査の成果と課題.....	125

挿図目次

第1章 はじめに			
第1図 松山平野の主要遺跡分布図	2	第3図 周辺遺跡分布図	6
第2図 松山平野の地形概要図	4		
第2章 調査の概要			
第4図 調査地位置図	7	第6図 調査地測量図・土層柱状図	11
第5図 調査地区割図	9		
第3章 恵原新張遺跡1次調査			
第7図 土層柱状図	14	第28図 SB301測量図	39
第8図 1区南壁土層図	15	第29図 SB301カマド測量図	40
第9図 2区北壁土層図(1)	16	第30図 SB301出土遺物実測図(1)	42
第10図 2区北壁土層図(2)	17	第31図 SB301出土遺物実測図(2)	43
第11図 3区北壁土層図(1)	18	第32図 SB302測量図	44
第12図 3区北壁土層図(2)	19	第33図 SB302出土遺物実測図	45
第13図 4・8区北壁土層図(1)	20	第34図 掘立301測量図	46
第14図 4・8区北壁土層図(2)	21	第35図 掘立302測量図	47
第15図 1区遺構配置図	22	第36図 SD301断面図・出土遺物実測図	48
第16図 SB101測量図	23	第37図 SK302測量図・出土遺物実測図	49
第17図 SB101カマド測量図	24	第38図 SK304測量図・出土遺物実測図	50
第18図 SB101出土遺物実測図	25	第39図 SK308測量図・出土遺物実測図	51
第19図 SD101測量図・出土遺物実測図	26	第40図 3区柱穴出土遺物実測図	54
第20図 SK103測量図・出土遺物実測図	27	第41図 3区第IV層出土遺物実測図	
第21図 1区第IV層出土遺物実測図	29	第42図 3区第V層出土遺物実測図	55
第22図 SB201測量図	30	第43図 4区遺構配置図	57
第23図 2区遺構配置図	31	第44図 1号墳測量図・出土遺物実測図	58
第24図 SB201出土遺物実測図	32	第45図 SD401断面図・出土遺物実測図	60
第25図 2区第II層出土遺物実測図	36	第46図 SD402断面図・出土遺物実測図	
第26図 2区第IV層出土遺物実測図	37	第47図 4区第III・IV・V層出土遺物実測図	61
第27図 3区遺構配置図	38		
第4章 恵原新張遺跡2次調査			
第48図 調査区位置図	75	第58図 SB603測量図・出土遺物実測図	84
第49図 土層柱状図	76	第59図 掘立601測量図	85
第50図 6区北壁土層図	77	第60図 SD603断面図・出土遺物実測図	86
第51図 7区北壁土層図	78	第61図 SD601・602断面図・ 出土遺物実測図	87
第52図 6区遺構配置図	79	第62図 SK601測量図・出土遺物実測図	88
第53図 SB601測量図	80	第63図 SK602測量図	
第54図 SB601出土遺物実測図	81	第64図 6区第IV層出土遺物実測図	89
第55図 SB602・604測量図	82	第65図 7区遺構配置図	91
第56図 SB602出土遺物実測図	83	第66図 2号墳測量図	92
第57図 SB604出土遺物実測図	84		

第 67 図	7 区第IV層出土遺物実測図	93	第 69 図	SB801 測量図	95
第 68 図	8 区遺構配置図	94	第 70 図	8 区第III・V層出土遺物実測図	97

第 5 章 恵原新張遺跡 3 次調査

第 71 図	調査区位置図	105	第 79 図	SB502 測量図	113
第 72 図	5 区遺構配置図	106	第 80 図	SB502 出土遺物実測図 (1)	114
第 73 図	5 区西壁土層図 (1)	107	第 81 図	SB502 出土遺物実測図 (2)	115
第 74 図	5 区西壁土層図 (2)	108	第 82 図	SK502 測量図・出土遺物実測図	117
第 75 図	SB501 測量図	109	第 83 図	SK503 測量図・出土遺物実測図	
第 76 図	SB501 出土遺物実測図	111	第 84 図	SK505 測量図・出土遺物実測図	118
第 77 図	SB501 カマド出土遺物実測図 (1)		第 85 図	SP505 出土遺物実測図	119
第 78 図	SB501 カマド出土遺物実測図 (2)	112	第 86 図	5 区第IV層出土遺物実測図	

表 目 次

第 2 章 調査の概要

表 1	恵原新張遺跡一覧	8	表 2	検出遺構一覧	10
-----	----------	---	-----	--------	----

第 3 章 恵原新張遺跡 1 次調査

表 3	恵原新張遺跡 1 次調査一覧	13	表 20	SB301 出土遺物観察表 (土製品)	71
表 4	恵原新張遺跡 1 次調査検出遺構一覧	63	表 21	SB301 出土遺物観察表 (石製品)	
表 5	竪穴建物一覧	65	表 22	SB302 出土遺物観察表 (土製品)	72
表 6	掘立柱建物一覧		表 23	SB302 出土遺物観察表 (石製品)	
表 7	溝一覧		表 24	SD301 出土遺物観察表 (土製品)	
表 8	土坑一覧		表 25	SK302 出土遺物観察表 (土製品)	
表 9	柱穴一覧	66	表 26	SK304 出土遺物観察表 (土製品)	
表 10	SB101 出土遺物観察表 (土製品)	69	表 27	SK308 出土遺物観察表 (土製品)	
表 11	SD101 出土遺物観察表 (土製品)		表 28	3 区柱穴出土遺物観察表 (土製品)	
表 12	SK103 出土遺物観察表 (土製品)		表 29	3 区包含層出土遺物観察表 (土製品)	73
表 13	1 区包含層出土遺物観察表 (土製品)		表 30	3 区包含層出土遺物観察表 (石製品)	
表 14	1 区包含層出土遺物観察表 (石製品)	70	表 31	1 号墳出土遺物観察表 (土製品)	
表 15	SB201 出土遺物観察表 (土製品)		表 32	SD401 出土遺物観察表 (土製品)	74
表 16	SB201 出土遺物観察表 (石製品)		表 33	SD402 出土遺物観察表 (土製品)	
表 17	2 区包含層出土遺物観察表 (土製品)		表 34	4 区包含層出土遺物観察表 (土製品)	
表 18	2 区包含層出土遺物観察表 (石製品)	71	表 35	4 区包含層出土遺物観察表 (石製品)	
表 19	2 区包含層出土遺物観察表 (玉類)				

第 4 章 恵原新張遺跡 2 次調査

表 36	恵原新張遺跡 2 次調査一覧	75	表 42	柱穴一覧	100
表 37	恵原新張遺跡 2 次調査検出遺構一覧	99	表 43	SB601 出土遺物観察表 (土製品)	101
表 38	竪穴建物一覧	100	表 44	SB601 出土遺物観察表 (石製品)	
表 39	掘立柱建物一覧		表 45	SB602 出土遺物観察表 (土製品)	
表 40	溝一覧		表 46	SB602 出土遺物観察表 (石製品)	102
表 41	土坑一覧		表 47	SB604 出土遺物観察表 (土製品)	

表48	SB603 出土遺物観察表（土製品）	102	表52	6区第IV層出土遺物観察表（土製品）	103
表49	SD603 出土遺物観察表（土製品）		表53	7区第IV層出土遺物観察表（土製品）	
表50	SD601 出土遺物観察表（石製品）	103	表54	7区第IV層出土遺物観察表（石製品）	
表51	SK601 出土遺物観察表（土製品）		表55	8区包含層出土遺物観察表（土製品）	
第5章 恵原新張遺跡3次調査					
表56	竪穴建物一覧	121	表62	SK502 出土遺物観察表（土製品）	123
表57	土坑一覧		表63	SK503 出土遺物観察表（土製品）	
表58	柱穴一覧		表64	SK505 出土遺物観察表（土製品）	124
表59	SB501 出土遺物観察表（土製品）	122	表65	5区柱穴出土遺物観察表（土製品）	
表60	SB502 出土遺物観察表（土製品）		表66	5区第IV層出土遺物観察表（土製品）	
表61	SB502 出土遺物観察表（石製品）	123	表67	5区第IV層出土遺物観察表（石製品）	

写真図版目次

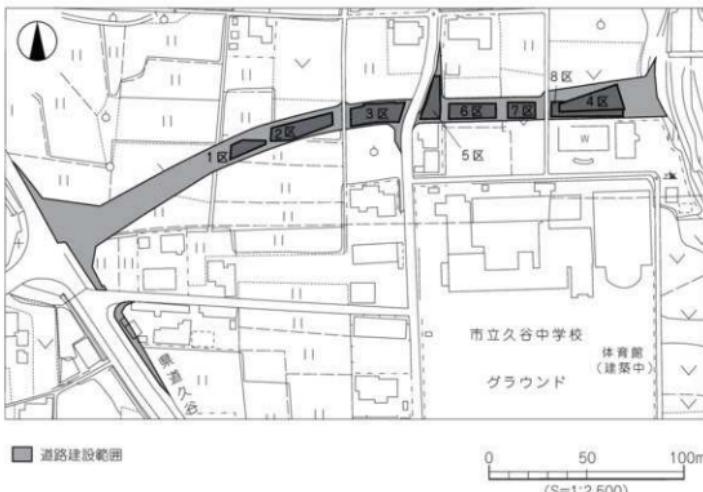
卷頭図版	1. 調査地全景①（南より）		図版 10	1. SB501 カマド検出状況（東より） 2. SB502 完掘状況（北より） 3. SB502 遺物出土状況（北より）	
卷頭図版	2. 調査地全景②（東より）		図版 11	1. 出土遺物（SB101：1・4・6～8・11、 SD101：13、1区第IV層：20～22）	
図版 1	1. 1区完掘状況（南より） 2. SB101 検出状況（西より） 3. SB101 遺物出土状況（西より）		図版 12	1. 出土遺物（SB201：23～33、2区第 II層：34・35・38）	
図版 2	1. 2区完掘状況（南東より） 2. SB201 完掘状況（北より） 3. 3区完掘状況（南東より）		図版 13	1. 2区第IV層出土遺物 2. SB301 出土遺物①	
図版 3	1. SB301・302 完掘状況（南東より） 2. 掘立 301 検出状況（北東より） 3. 掘立 301(SP319) 検出状況（南東より）		図版 14	1. 出土遺物（SB301②：61～64、SB302： 65・66・68～71・73）	
図版 4	1. 掘立 302 検出状況（北東より） 2. 3区作業風景（西より） 3. 4区完掘状況（北より）		図版 15	1. 出土遺物（3区第IV層：89・90・92・93、 3区第V層：99・100） 2. 出土遺物（1号墳：105、SD402：107、 4区第III層：108・109）	
図版 5	1. 1号墳検出状況（南より） 2. SD402 検出状況（南より） 3. 1次調査現地説明会風景（西より）		図版 16	1. 4区第IV層出土遺物 2. SB602 出土遺物	
図版 6	1. 6区遺構完掘状況（西より） 2. SB601 完掘状況（北より） 3. SB602・604 完掘状況（西より）		図版 17	1. 出土遺物（SB603：145、SD601：151、 6区第IV層：157・160） 2. 出土遺物（7区第IV層：161・163・166、 8区第III層：170・171・173・174）	
図版 7	1. SB603 完掘状況（北東より） 2. 7区遺構完掘状況（西より） 3. 2号墳石室完掘状況（南東より）		図版 18	1. 8区第V層出土遺物 2. 出土遺物（SB501：179・185、SB501 カマド：189・190）	
図版 8	1. 8区遺構検出状況（西より） 2. 8区遺構完掘状況（北より） 3. SB801 完掘状況（西より）		図版 19	1. 出土遺物（SB502：195・198・200・ 203～205・211・214・215、SK502： 217・218）	
図版 9	1. 5区遺構完掘状況①（南東より） 2. 5区遺構完掘状況②（北東より） 3. SB501 完掘状況（南東より）		図版 20	1. 出土遺物（SK503：219、SK505：220、 5区第IV層：224・227・229）	

第2章 調査の概要

第1節 調査の経緯

発掘調査は農道工事の進行上、調査対象地を8つの地区（1区～8区）に分けて実施した（第4図）。平成27年度は1区から4区を調査対象とする恵原新張遺跡1次調査を行い、併行して6区から8区を調査対象とする2次調査を行った。さらに、平成28年度には5区を調査対象とした3次調査を実施した。各調査の経緯については、第3・4・5章の冒頭にて説明する。なお、各調査の期間や面積等は表1に記す。

発掘調査は重機を使用して表土層を掘削後、作業員による遺構検出や掘削作業及び測量作業を実施した。調査にあたり、調査地内に国土座標となる4級基準点を設置した。設置業務は埋蔵文化財センターが測量業者と委託契約を結び、調査毎に実施した。設置された基準点をもとに、調査地内に10m四方のグリッドを設定した。グリッドは調査地北側から南側へ向けてA・B・C・D・E、西側から東側へ1・2・3………21とし、A1・A2・A3………E21区といったグリッド名を付した（第5図）。グリッドは、遺構の位置表示や遺物の取り上げ等に利用した。また、遺構の検出状況及び完掘状況等の写真是高所作業車を使って撮影を行ったほかに、ドローンを使用して上空からの写真撮影も実施した。撮影業務は撮影業者と委託契約を結び、調査毎に実施した。



第4図 調査地位置図

表1 恵原新張遺跡一覧

調査名	調査区	調査場所	調査面積	調査期間
恵原新張遺跡（1次）	1～4区	恵原町甲 1460-4外5筆	1,361	H 27.5.11～9.18
恵原新張遺跡（2次）	6～8区	恵原町甲 1432-2外3筆	826	H 27.8.10～10.9
恵原新張遺跡（3次）	5区	恵原町甲 1454-3	207	H 28.5.9～6.3

第2節 層位

調査地は、調査以前には水田や畠及び雑種地であった。現況の標高は、70.50～70.80 mである。調査地の基本層位は、以下の7層である（第6図）。第I層は近現代の農耕及び造成等に伴う客土であるが、各地区で土色・土質が異なっており、各章で説明する第I層については調査区ごとに枝番号（第I①層、第I②層）を付けて説明している。

第I層：近現代の農耕及び造成等に伴う客土で、地表下20～30cmまで開発が行われている。

第II層：灰白色を呈する粘質土（2.5Y 7/1）で、2・3区及び8区で検出され、層厚は3～10cmである。

本層中からは、鎌倉時代の遺物が出土した。

第III層：褐灰色土（10YR 5/1）で調査地東側4区・8区のみで検出され、層厚は3～10cmである。

本層中からは、平安時代に時期比定される遺物が出土している。

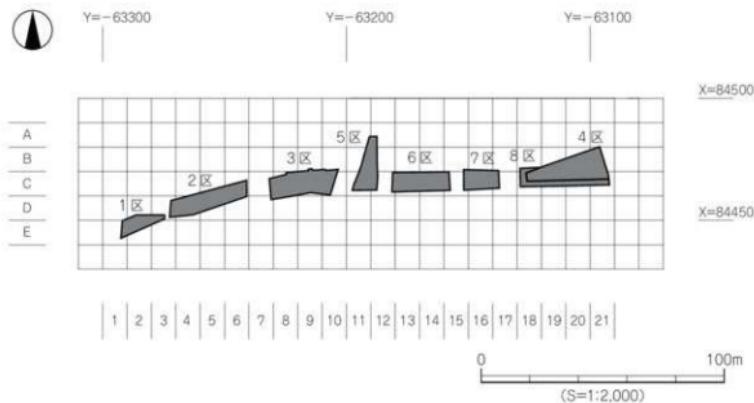
第IV層：黒色土（7.5YR 2/1）で調査地全域にみられ、層厚は3～18cmである。本層中からは、主に古墳時代に時期比定される遺物が出土している。

第V層：黒褐色土（10YR 3/1）で4区・8区にみられ、層厚は5～15cmである。本層中からは弥生土器や土師器、須恵器、石器が出土している。

第VI層：にぶい褐色（7.5YR 5/3）を呈する粘性土で、2区～4区及び8区にみられ、層厚は5～10cmである。本層中からは、遺物の出土はない。

第VII層：黄褐色土（10YR 5/8）で、本層上面は調査における最終の遺構検出面である。本層上面の標高を測量すると起伏がみられ、調査地西方1区では標高70.40 mであるが、2区から3区にかけて徐々に標高は低くなり、3区では70.20 mとなる。ただし、調査地中央部5区では標高が高くなり70.40 m、6区では70.50 mと最も高い数値を示す。なお、7区から4区・8区に向けて徐々に低くなり、調査地東方の4・8区では70.00 mとなる。

検出遺構や出土遺物より、第V層は弥生時代、第IV層は古墳時代、第III層は古代、第II層は中世までに堆積した土層と考えられる。



第5図 調査地区割図

第3節 遺構・遺物

恵原新張遺跡からは、縄文時代から近現代までの遺構や遺物を確認した（表2）。検出した遺構は竪穴建物11棟、掘立柱建物3棟、溝11条、土坑41基、柱穴119基、古墳2基のほかに倒木址2基である。遺物は縄文土器（早期）、弥生土器（前期～後期）、土師器（古墳～中世）、須恵器（古墳～古代）のほかに石器（石鏃・石庖丁・石斧・砥石・台石・剥片）や白玉が出土した。遺物の出土量は、遺物収納箱（22×60×44mm）約28箱分である。

【検出遺構】

弥生時代	竪穴建物	: 2棟	(中期後葉・末)
	溝	: 3条	(中期後葉)
	土 坑	: 12基	(中期中葉:8基、中期後葉:2基、中期:2基)
古墳時代	竪穴建物	: 9棟	(5世紀後葉:1棟、6世紀前葉:1棟、6世紀中葉:3棟、6世紀後葉:2棟、7世紀前葉:2棟)
	掘立柱建物	: 3棟	(6世紀中葉以降)
	古 墳	: 2基	(7世紀中葉)
	溝	: 5条	(6世紀前葉:2条、6世紀:1条、7世紀前葉:2条)
	土 坑	: 15基	(5世紀後葉:3基、6世紀:12基)
近 現 代	溝	: 3条	
	土 坑	: 14基	

表2 検出遺構一覧

	縄文時代	弥生時代	古墳時代	古代	中世	近現代
1区		第IV層遺物	竪穴：1棟 溝：1条 土坑：4基			土坑：3基
2区		竪穴：1棟 土坑：2基	第IV層遺物		第II層遺物	溝：3条 土坑：10基
3区		土坑：4基	竪穴：2棟 掘立：2棟 溝：2条 土坑：7基			土坑：1基
4区		竪穴：1棟	石室：1基 溝：2条 土坑：2基	第III層遺物		
5区		土坑：5基	竪穴：2棟 土坑：1基			
6区		溝：3条 土坑：1基	竪穴：4棟 掘立：1棟 土坑：1基			
7区		第IV層遺物	石室：1基			
8区	第V層遺物	竪穴：1棟 (SB401と同一)	溝：1条 (SD402と同一)	第III層遺物		

【参考文献】

- 愛媛県 1986 「上野遺跡（谷田Ⅱ遺跡）」『愛媛県史 資料編 考古』愛媛県史編纂委員会
 1986 「土壇原遺跡群」『愛媛県史 資料編 考古』愛媛県史編纂委員会
 1991 「愛媛県内古墳－分布調査報告書」愛媛県教育委員会
- 阪本 安光 1991 「大下田古墳群・枳迎面山遺跡群・谷田V・VI遺跡」『愛媛県総合運動公園関係埋蔵文化財調査報告書Ⅲ』
- 西川 真美 1988 「西野春日谷遺跡 通谷池2号墳」「えひめふるの城建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」(財)愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 岡田 俊彦 1979 『愛媛県総合運動公園関係埋蔵文化財調査報告書Ⅰ』愛媛県教育委員会
- 河野 史知 2003 『松ヶ谷遺跡』松山市文化財調査報告書 第89集

第3章 恵原新張遺跡1次調査

第1節 調査の経緯

恵原新張遺跡1次調査は、2015（平成27）年5月11日より開始し、同年9月18日に終了した。調査対象区は、調査地西側の1区から3区と調査地東側の4区であり、調査面積は1,361m²である（表3）。まず、調査対象面積の最も広い3区の調査に着手する。5月11日より重機（バックホー0.25m³・3t不整地運搬車）を使用して表土の掘削・運搬を行い、その後、壁面精査と遺構検出作業を実施する。5月20日からは、3区の調査と併行して2区の調査を開始する。3区と同様、重機を使用して表土の掘削・運搬を行い、壁面精査や遺構検出作業を進める。5月21日、3区の遺構検出作業を終了し、堅穴建物や溝、土坑、柱穴を検出す。遺構の掘削は堅穴建物から着手し、その後、土坑や柱穴の半截と断面測量及び溝の掘り下げ等を行った。遺構測量図や遺構完掘平面図、及び調査壁の土層図は縮分1/20で作成した。なお、検出した堅穴建物にはカマドが付設されるものがあり、カマドの測量図は縮分1/10で作成した。

5月26日からは、1区の調査に取り掛かる。2区・3区と同様、重機を使用して表土の掘削・運搬を行う。5月27日、2区の遺構検出作業が終了し、5月29日には1区の遺構検出作業を終了する。1区と2区からは堅穴建物や溝、土坑、柱穴を検出す。とりわけ、1区検出の堅穴建物は炭化物や焼土が建物上面付近に散在しており、焼失住居と推測された。

6月2日からは、4区の調査に着手する。重機を使用して表土の掘削・運搬を行う。6月3日より2区と3区の遺構掘削作業を開始し、およそ1ヶ月を費やす。7月7日、3区の遺構掘削作業が終了し、写真撮影や測量作業を行う。7月16日には2区の遺構掘削作業を終了する。7月26日、一般市民を対象とした現地説明会を開催し、120名の参加者を得る。8月4日、2区と3区の調査が終了し、8月5日にはドローンを使用して上空より遺構完掘状況写真を撮影する。8月6日より、1区の遺構掘削作業を開始する。8月21日、1区の調査が終了する。同日、4区の遺構検出作業が終了し、堅穴建物や溝のはかに石室を検出す。8月21日にはドローンを使用して1区の遺構完掘状況と4区の遺構検出状況写真を撮影する。9月10日にはドローンにより4区の遺構完掘状況写真を撮影する。9月18日、4区の調査を終了し、本日にて屋外調査を終了する。

表3 恵原新張遺跡1次調査一覧

地 区	調査面積 (m ²)	調 査 期 間
1区	254	2015（平成27）年5月26日～同年8月21日
2区	349	2015（平成27）年5月20日～同年8月4日
3区	406	2015（平成27）年5月11日～同年8月4日
4区	352	2015（平成27）年6月2日～同年9月18日

第2節 層位

調査地は、調査以前には水田や畠として利用されていた。現況の標高は、70.50～70.80 mである。調査地の基本層位は、以下の7層である（第7～14図）。なお、第I層は各調査区にて土色、土質が異なっており、調査区毎に土層番号や土色を掲載している。

第I層：近現代の農耕に伴う客土で、地表下20～30cmまで開発が行われている。土色・土質の違いにより、5種類に分層される（I①～I⑤層）。

第II層：灰白色粘質土（2.5Y 7/1）で2区と3区にみられ、層厚3～7cmである。本層中からは、中世の土器片が出土した。なお、2区の本層中から土師器坏9点がまとまって出土しており、本来は遺構に伴う遺物と推測される。

第III層：褐灰色土（10YR 5/1）で4区にみられ、層厚は3～10cmである。本層中からは、平安時代後期に時期比定される土師器片や須恵器片が出土した。

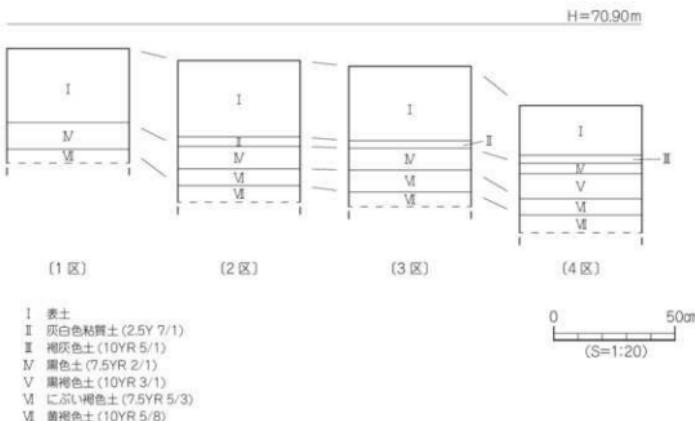
第IV層：黒色土（7.5YR 2/1）で、すべての調査区にみられ、層厚は5～10cmである。本層中からは、弥生土器や土師器、須恵器の破片が数多く出土した。

第V層：黒褐色土（10YR 3/1）で4区にみられ、層厚は5～12cmである。本層中からは、弥生土器や石器が出土した。

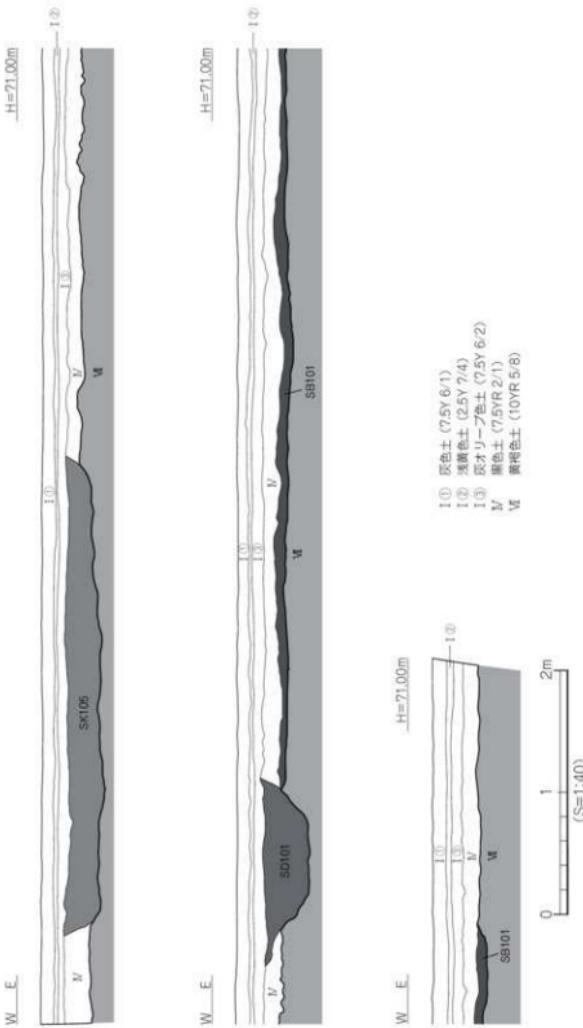
第VI層：にぶい褐色土（7.5YR 5/3）で粘性が強く、2区～4区に部分的にみられ、層厚は6～10cmである。本層中から、遺物の出土はない。

第VII層：黄褐色土（10YR 5/8）で、すべての調査区にみられる。本層上面は、調査における最終遺構検出面である。

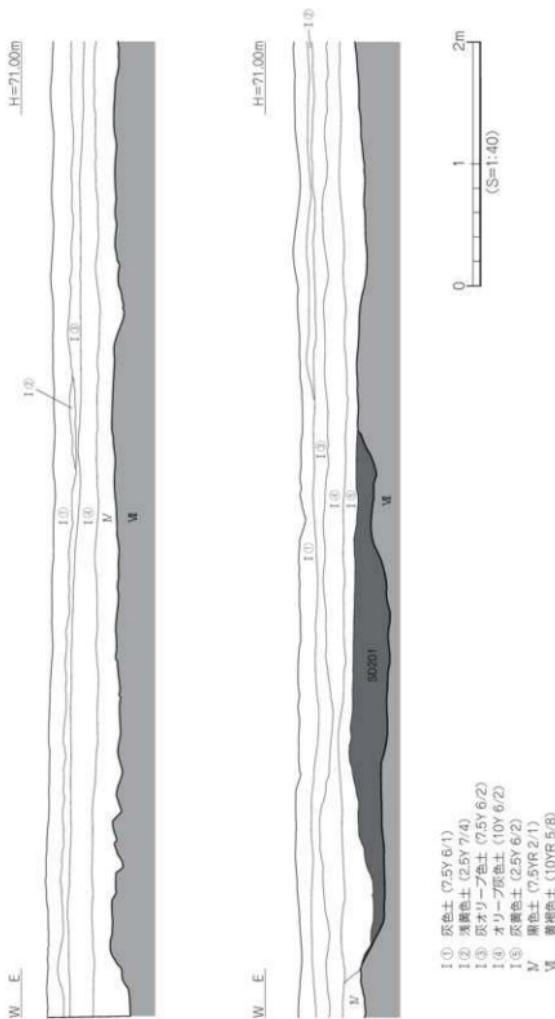
検出遺構や出土遺物より、第V層は弥生時代、第IV層は古墳時代、第III層は古代、第II層は中世までに堆積した土層と推測される。



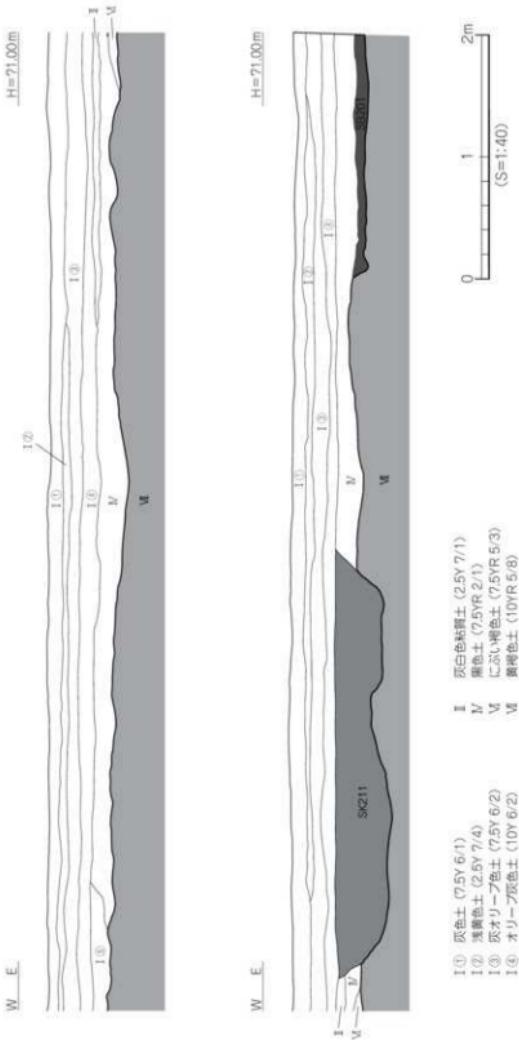
第7図 土層柱状図



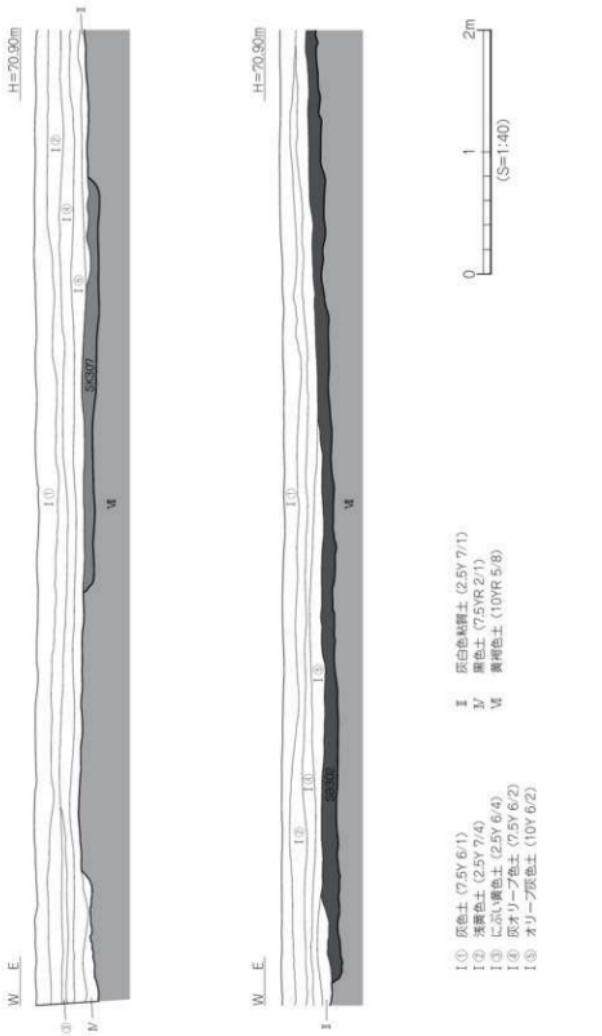
第8図 1区南壁土層図



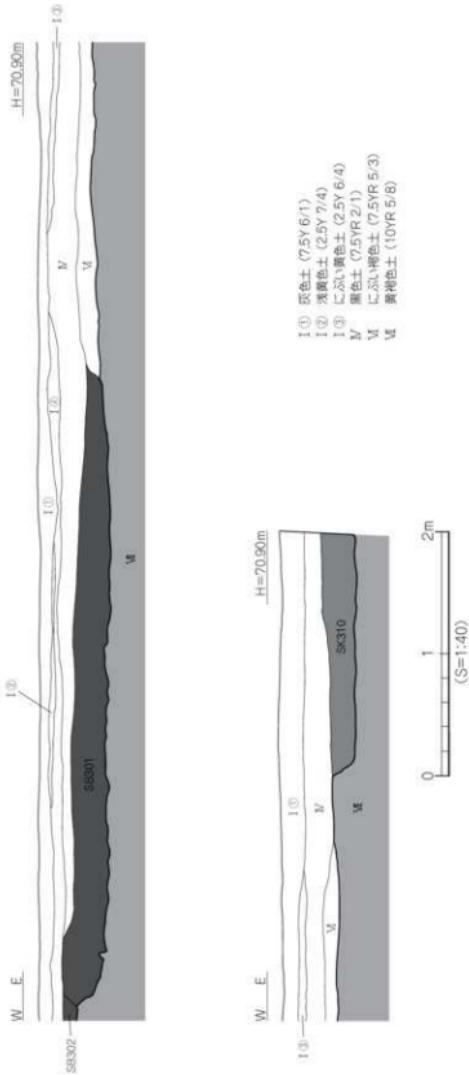
第9図 2区北壁土層図 (1)



第10図 2区北壁土層図 (2)

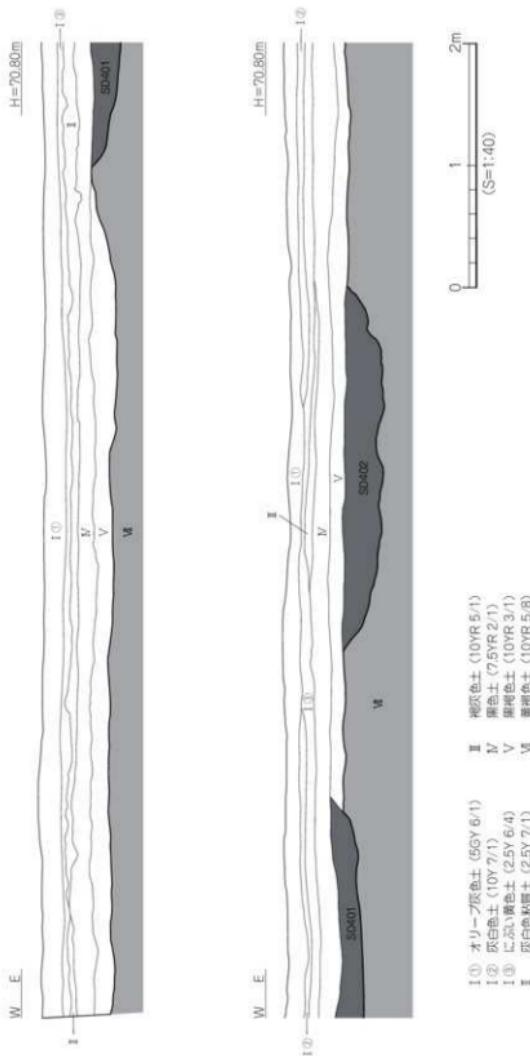


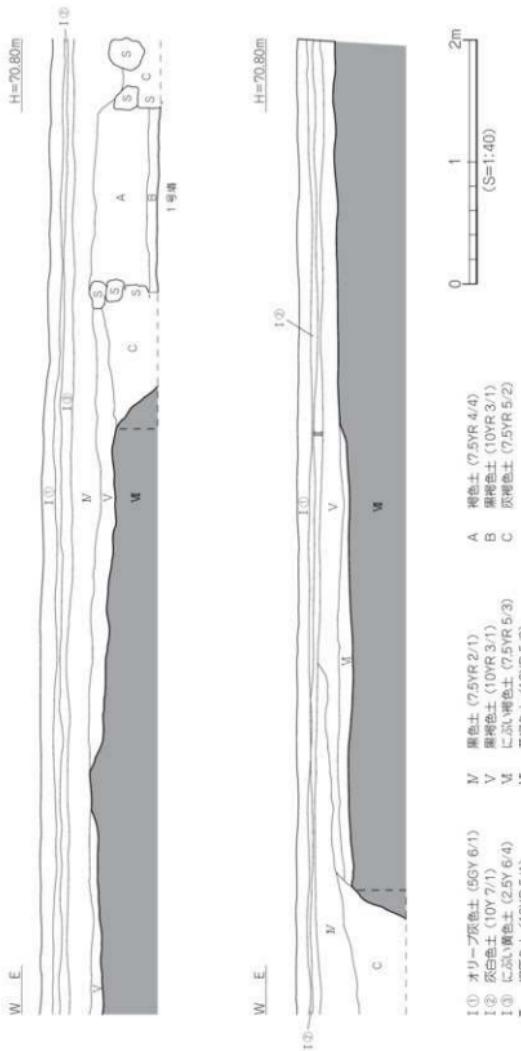
第11図 3区北壁土層図(1)



第12圖 3區北壁土壤圖 (2)

第13図 4・8区北壁土層図(1)





第14図 4・8区北壁土層図 (2)

第3節 遺構と遺物

恵原新張遺跡1次調査では、堅穴建物5棟、掘立柱建物2棟、溝8条、土坑33基、柱穴86基のほか石室1基を検出した。遺物は弥生土器、土師器、須恵器のほか石器（石鏃・石庖丁・石斧）や白玉が出土した。遺物の出土量は、遺物収納箱（ $22 \times 60 \times 44\text{cm}$ ）約11箱分である。ここでは、調査区毎に検出した遺構や遺物を説明する。

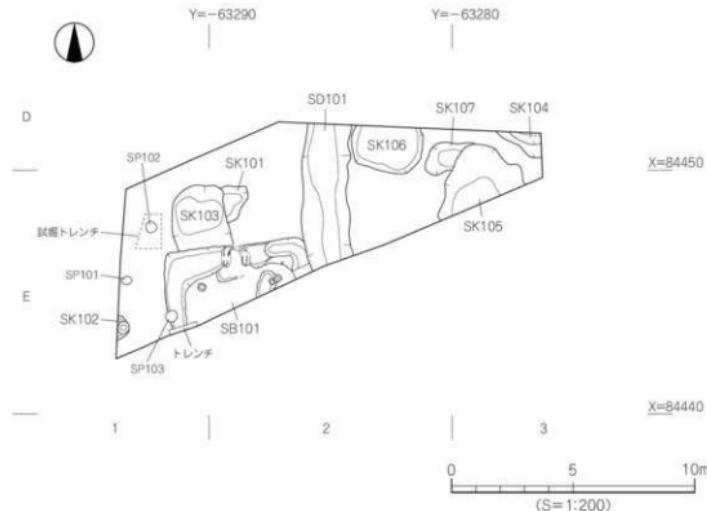
1. 1区の調査

1区では堅穴建物1棟、溝1条、土坑7基、柱穴3基を検出した（第15図、図版1）。

（1）堅穴建物

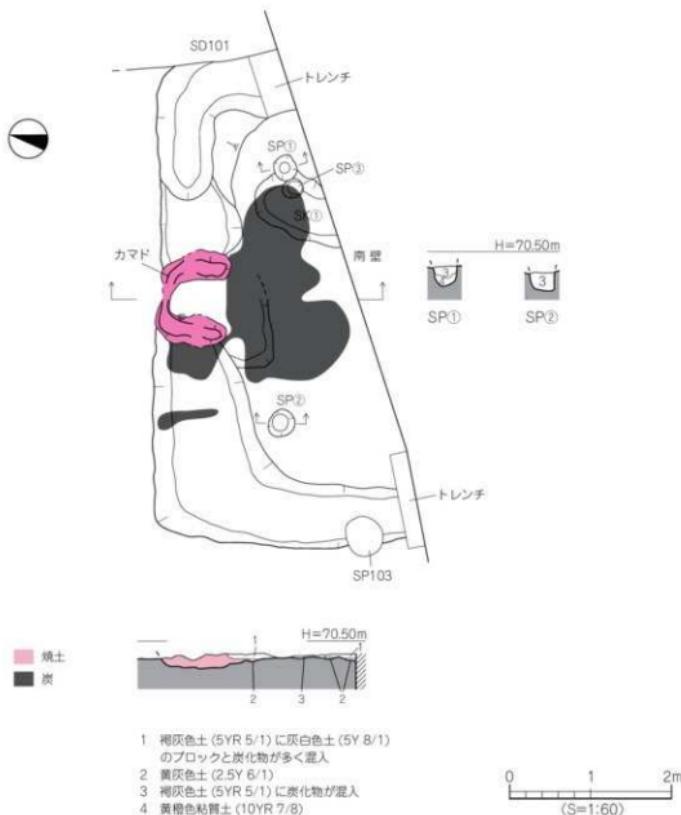
SB101（第16・17図、図版1）

1区南西部E1・2区に位置する建物址で、建物東側は溝SD101に一部削平され、南側は調査区外に続く。平面形態は隅丸方形または長方形をなすものと思われ、規模は東西検出長6.08m、南北検出長3.24m、壁高は24cmである。建物埋土は、褐灰色土（5YR 5/1）に灰白色土（5Y 8/1）がブロック状に混入するものである。内部施設は、カマドと柱穴及び溝を検出した。カマドは建物北側壁体中央部に造り付けられており、平面形態は馬蹄形状をなし、規模は南北長0.9m、東西長1.1m、高さ22cmである。カマドは建物床面を円形状に掘り凹めた後、褐灰色土や黄橙色粘質土などを積み重ねて構築されている。カマド内からは、土師器の甕が押し潰された状態で出土した。建物床面からは、3



第15図 1区遺構配置図

基の柱穴 (SP ①～③) を検出した。柱穴規模は径 0.29～0.34 m、深さ 24～26cmで、柱穴掘り方埋土は褐色灰色土 (5YR 5/1) を基調とし、SP ①下部には黄橙色粘質土 (10YR 7/8) がブロック状に混入している。なお、SP ①と SP ②は配置より、SB101 の主柱穴と考えられる。このほか、建物中央部東寄りには土坑 SK ①を検出した。SK ①は複雑関係より SP ①に先行することから、SB101 構築以前の遺構と考えられる。ただし、SK ①からは遺物の出土ではなく、明確な時期は不明である。また、建物壁体に沿って幅 0.35～0.60 m、深さ 10cm 前後に溝が巡っており、溝埋土は建物埋土と同様である。SB101 は前述したとおり、検出時に焼土や炭化物が建物上面に散在しており、火災等で焼失した可能性の高い建物である。遺物は建物埋土中より、完形品を含む須恵器や土師器が数多く出土した。



第 16 図 SB101 測量図

出土遺物（第18図、図版11）

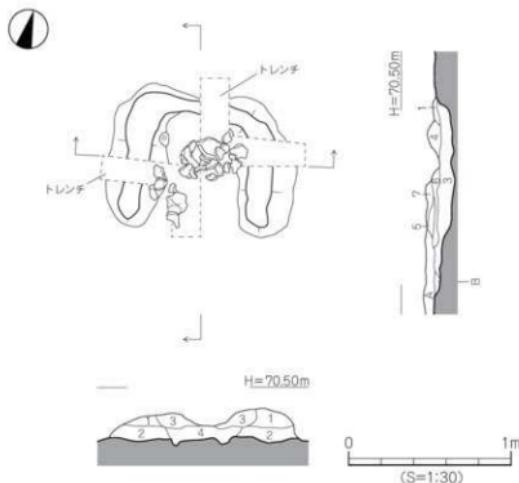
1～10は須恵器。1～3は壺蓋で、断面三角形状の鋭い棱をもつ。口縁端部は内傾し、1の天井部には焼成による焼け歪みが認められる。4・5は壺身。たちあがり端部は内傾し、4の底部外面には火だすきの痕跡が残る。6・7は有蓋高杯の蓋。つまみ上部は凹み、口縁端部は内傾する。7の口縁端部外面には、刻目を施す。8は直口壺の口縁部で、2条の凸線と凸線間に波状文を施す。口縁部外面には、部分的に自然釉が残る。9・10は壺。9の口縁部は肥厚し、頸部外面には回転カキメ調整がみられる。10は胴部片で、外面には平行叩き後、回転カキメ調整、内面は同心円叩きや円弧叩きがみられる。11・12は土師器甕。11の口縁部は僅かに内湾し、12は口縁部が外反する。

時期：出土遺物の特徴より、SB101の廃棄・埋没時期は古墳時代中期、5世紀後葉とする。

(2) 溝

SD101（第19図）

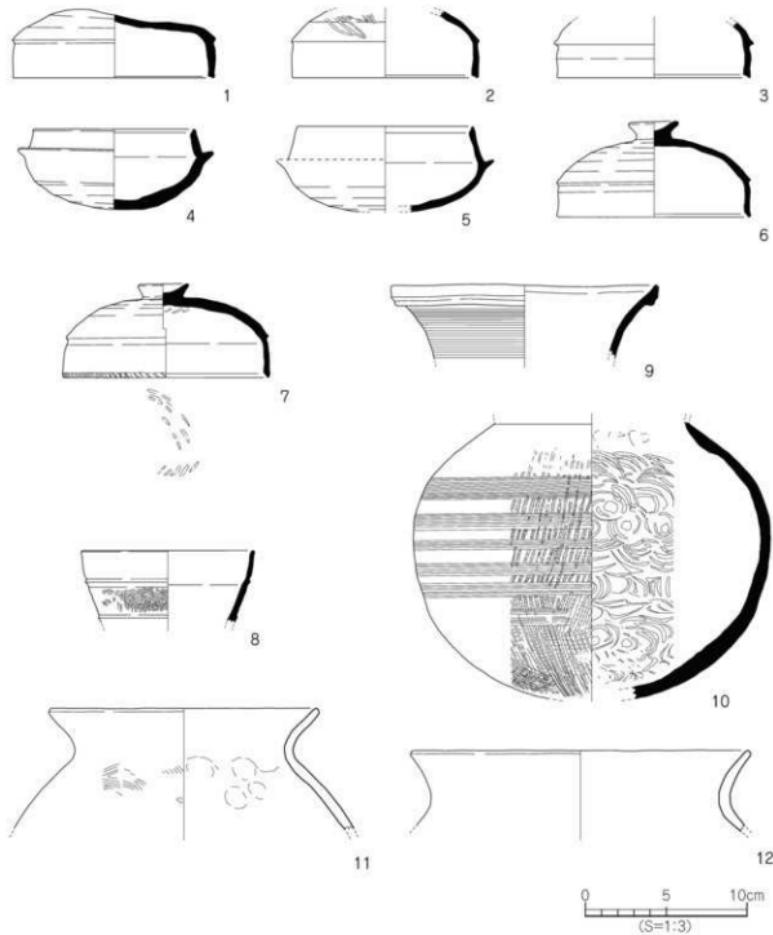
1区中央部D・E2区で検出した南北方向の溝で、溝南側はSB101と重複し、SD101が後出し、溝



- 1 黄褐色粘質土 (10YR 7/8)
- 2 褐灰色土 (10YR 4/1) に明褐褐色土 (10YR 7/6) がブロック状に混入
- 3 褐灰色土 (10YR 4/1) に灰白色土 (5Y 8/1) がブロック状に大量混入
- 4 黄褐色粘質土 (10YR 7/8) と褐灰色土 (10YR 4/1) の混合 (炭泥入り)
- 5 灰白色土 (10YR 7/1)
- 6 明褐灰色土 (7.5YR 7/1) [炭大量混入]
- A 褐灰色土 (5YR 5/1) に灰白色土 (5Y 8/1) がブロック状に混入 (SB101 埋土)
- B 黄灰色土 (2.5Y 6/1) (SB101 埋土)

第17図 SB101 カマド測量図

両端は調査区外に続く。規模は検出長 5.71 m、最大幅 2.00 m、深さ 26cm である。断面形態は舟底状をなし、埋土は灰色土 (5Y 6/1) に黄褐色土 (10YR 5/8) がブロック状に混入するものである。溝基底面には凹凸があり、僅かに北側から南側に向けて緩やかな傾斜をなす (比高差 3cm)。溝内からは、須恵器や土師器の破片が少量出土した。



第 18 図 SB101 出土遺物実測図

出土遺物（図版11）

13～16は須恵器。13～15は壺蓋で、断面三角形状の鋭い棱をもち、口縁端部は内傾する。16は広口壺。口縁部は上下方に肥厚し、頸部外面は平行叩き後に回転カキメ調整を加える。

時期：出土遺物の特徴より、SD101は古墳時代後期、6世紀初頭から前葉とする。

(3) 土坑

SK103（第20図）

1区西側E1・2区で検出した土坑で、土坑南側はSB101に削平され、東側は土坑SK101と重複し、SK103が後出する。平面形態は楕円形をなし、規模は東西長221m、南北検出長2.59m、深さ24cmである。断面形態は逆台形状をなし、埋土は褐灰色土（5YR 5/1）に黄褐色土（10YR 5/8）がブロック状に混入するものである。土坑内からは、土師器や須恵器の破片が少量出土した。そのうち、実測しうる遺物を2点掲載した。

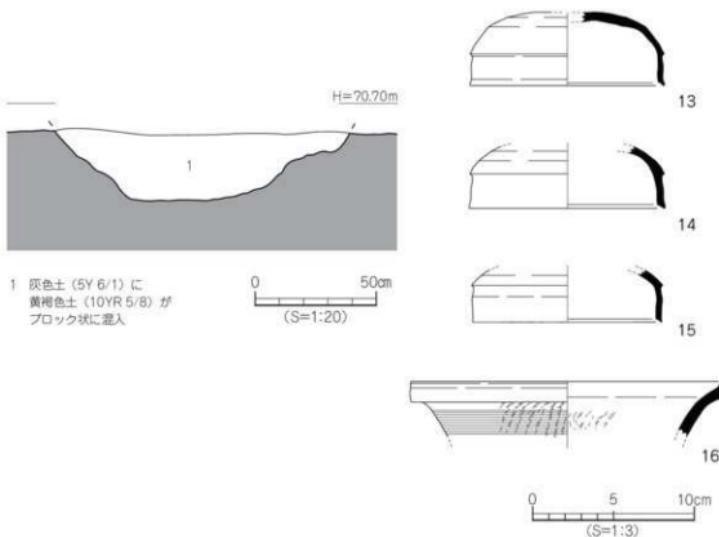
出土遺物

17・18は須恵器壺身。たちあがりは内傾し、端部は内傾斜する。

時期：出土遺物の特徴より、SK103は古墳時代中期、5世紀後葉とする。

SK101

1区中央部西寄り、E2区で検出した土坑で、土坑西側はSK103（古墳時代中期）と重複し、SK101



第19図 SD101測量図・出土遺物実測図

が先行する。平面形態は梢円形をなすものと思われ、規模は東西検出長 1.01 m、南北長 1.49 m、深さは 6cm である。断面形態は浅い逆台形状をなし、埋土は褐灰色土（5YR 5/1）に黄褐色土（10YR 5/8）がブロック状に混入するものである。土坑内からは、遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが、SK103 に先行することから、概ね古墳時代中期後葉以前とする。

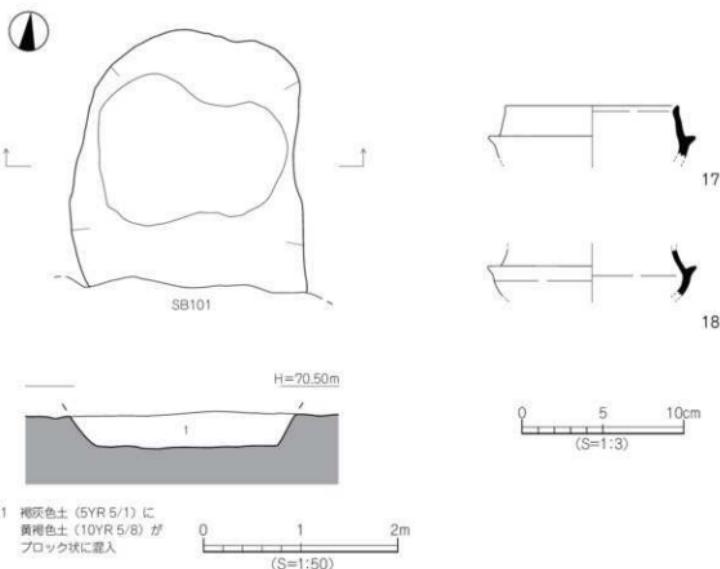
SK102

1 区南西部 E1 で検出した土坑で、土坑西半部は調査区外に続く。壁面の土層観察により、第IV 層が土坑上面を覆う。平面形態は円形をなすものと思われ、規模は南北長 1.01 m、東西検出長 0.54 m、深さは 35cm である。断面形態は逆台形状をなし、埋土は褐灰色土（5YR 5/1）に黄褐色土（10YR 5/8）がブロック状に混入するものである。土坑内からは、遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが、埋土が SK101 と酷似することから、概ね古墳時代中期後葉以前とする。

SK106

1 区北壁中央部付近、D2 区で検出した土坑で、土坑北側は調査区外に続く。平面形態は梢円形をなすものと思われ、規模は東西長 2.94 m、南北検出長 1.84 m、深さは 14cm である。断面形態は浅い



第 20 図 SK103 測量図・出土遺物実測図

逆台形状をなし、埋土は暗褐色土（7.5YR 3/3）に黄褐色土（10YR 5/8）がブロック状に混入するものである。土坑内からは、遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが、後述する3区検出の堅穴建物SB301と埋土が酷似することから、概ね古墳時代後期頃とする。

SK104

1区北東隅D3区で検出した土坑で、土坑北側及び東側は調査区外に続く。壁面の土層観察により、SK104は第I②層中から掘削された遺構である。平面形態は楕円形をなすものと思われ、規模は東西検出長1.09m、南北検出長1.00m、深さは53cmである。断面形態は逆台形状をなし、埋土は明褐色土（7.5YR 5/6）単層である。土坑内からは、遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが、検出層位より近現代の土坑と考えられる。

SK105

1区南東部D3～E3区で検出した土坑で、土坑北側はSK107と重複し、SK105が後出する。壁面の土層観察により、SK105上面は第I③層が覆う。平面形態は楕円形をなすものと思われ、規模は東西長3.81m、南北検出長3.31m、深さは14cmである。断面形態は浅い逆台形状をなし、埋土は灰色粘質土（5Y 6/1）単層である。土坑内からは、遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが、検出層位より近現代の土坑と考えられる。

SK107

1区東側D2・3区で検出した土坑で、土坑東側はSK105と重複し、SK107が先行する。平面形態は不整の楕円形をなすものと思われ、規模は東西検出長2.10m、南北長1.21m、深さは25cmである。断面形態は逆台形状をなし、埋土は灰白色粘質土（5Y 8/1）単層である。土坑内からは、遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが、埋土がSK105と酷似することから近現代の土坑と考えられる。

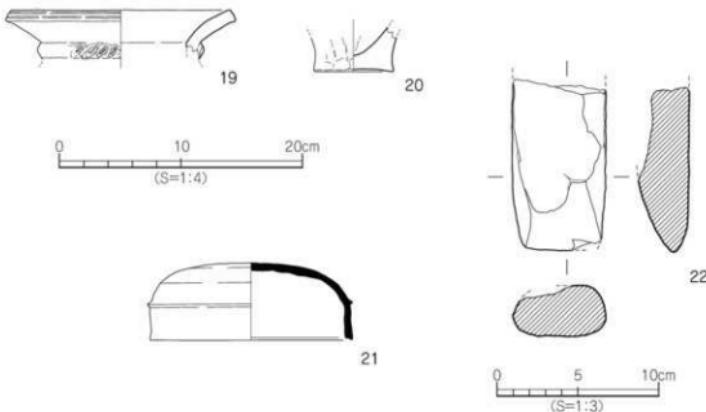
（4）その他の遺構と遺物

1) 柱 穴

1区では、3基の柱穴を検出した。平面形態は円形をなし、規模は径0.34～0.45m、深さ29～48cmである。柱穴掘り方埋土は褐灰色土（5YR 5/1）に黄褐色土（10YR 5/8）がブロック状に混入するものである。各柱穴から遺物の出土はないが、埋土などから概ね古墳時代の遺構と考えられる。

2) 1区包含層出土遺物（第21図、図版11）

19～22は第IV層出土品。19・20は弥生土器。19は広口壺の口縁部片で、口縁端面に凹線文2条を施し、頸部外面には凸帯を貼り付け、凸帯上に押圧を加える。20は壺形土器の底部で、僅かに上げ底をなす。弥生時代中期後葉。21は須恵器坏蓋。天井部は扁平で、口縁端部は内傾する凹面をなす。古墳時代中期後葉。22は伐採斧。扁両刃で、基部は欠損する。結晶片岩製。



第21図 1区 第IV層出土遺物実測図

(5)まとめ

1区では、弥生時代から近現代までの遺構や遺物を確認した。検出した遺構は、古墳時代の竪穴建物1棟、溝1条、土坑4基のほかに、近現代の土坑3基であり、詳細は以下のとおりである。SB101は一辺6m以上の隅丸方形または長方形状の竪穴建物で、廃棄・埋没時期は古墳時代中期後葉、5世紀後葉と考えられる。建物内からは炭化物や焼土が散在して出土したことから、火災等により焼失したものと推測される。なお、3基の土坑(SK101～103)は重複関係や遺構埋土等からSB101廃絶以前に構築されたものと考えられる。一方、SD101はSB101より後出する溝で、出土遺物より6世紀初頭から前葉の遺構と思われる。

弥生時代の遺構は未検出であるが、第IV層中より中期後葉から後期の遺物が出土している。また、第IV層からは石斧や石器剣片などが出土している。

【検出遺構】

- 古墳時代中期後葉 : 竪穴 1棟 (SB101: 焼失家屋)
- 土坑 3基 (SK101～103)
- 古墳時代後期前葉 : 溝 1条 (SD101)
- (後期) : 土坑 1基 (SK106)
- 近 現 代 : 土坑 3基 (SK104・105・107)

2. 2区の調査

2区では竪穴建物1棟、溝3条、土坑12基、柱穴23基を検出した（第23図、図版2）。

(1) 竪穴建物

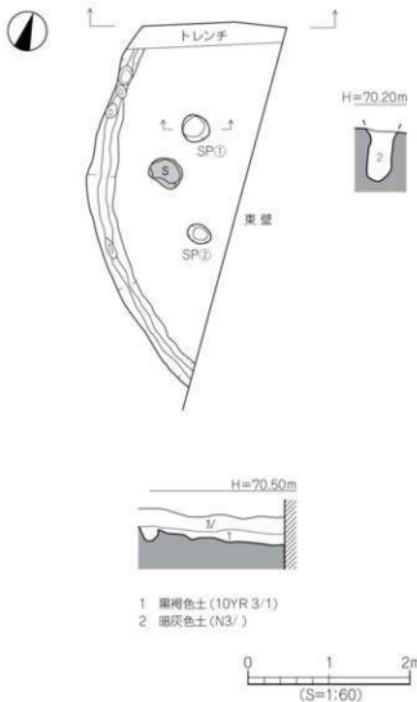
SB201（第22図、図版2）

2区北東隅C6区に位置する建物址で、建物北側及び東側は調査区外へ続く。壁面の土層観察により、SB201上面は第Ⅳ層が覆う。平面形態は円形をなすものと思われ、規模は南北検出長4.58m、東西検出長1.84m、壁高は24cmである。建物埋土は、黒褐色土(10YR 3/1)単層である。建物壁体に沿って、幅10～15cm、深さ4～18cmの周壁溝が巡る。溝埋土は、建物埋土と同様である。建物床面にて、2基の柱穴(SP①・②)を検出した。このうち、SP①は径34cm、深さ61cmを測る柱穴で、柱穴掘り方埋土は暗灰色土(N3-)単層である。検出状況より、SP①はSB201を構成する主柱穴の可能性がある。遺物は建物埋土中より弥生土器片が数多く出土したほか、砥石や石器素材などが出土した。

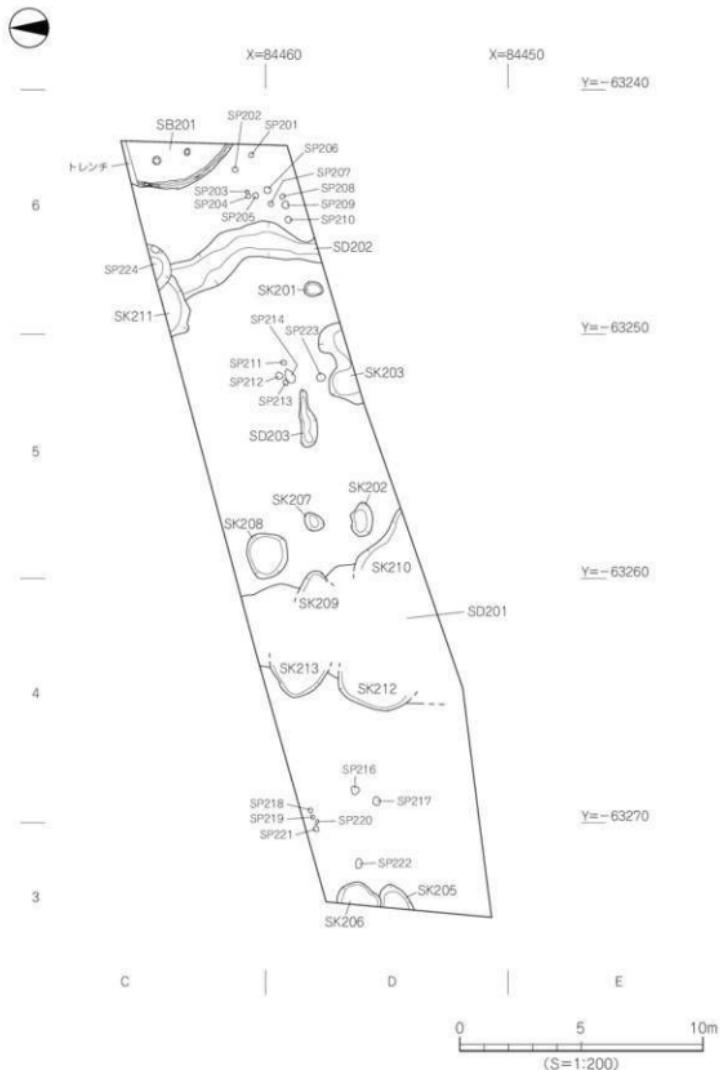
出土遺物（第24図、図版12）

23～31は弥生土器。23・24は壺形土器。23の口縁部は上方に肥厚し、口縁端面に凹線文2条を施す。頭部には凸帯を貼り付け、凸帶上に刻目を施す。24の口縁部は外反し、口縁端面はナデにより凹む。胴部外面には、タテ方向のヘラミガキを施す。25～27は壺形土器。25の口縁部は短く外反し、頭部外面にはヘラミガキ調整がみられる。26は広口壺。口縁部は下外方に垂下し、口縁端面に山形文を施す。27は頭部片で、断面三角形状の凸帯2条を貼り付ける。28は高杯形土器の脚部で、貫通する矢羽根状の透かしを施す。29～31は壺形土器の底部。29はくびれをもつ上げ底、30・31は僅かに上げ底で、外面にはタテ方向のヘラミガキ調整がみられる。32は石棒で、厚さ2cmを測る。結晶片岩製。33は砥石で、3面の砥面をもつ。砂岩製。

時期：出土遺物の特徴より、SB201の廃棄・埋没時期は弥生時代中期後葉とする。



第22図 SB201測量図



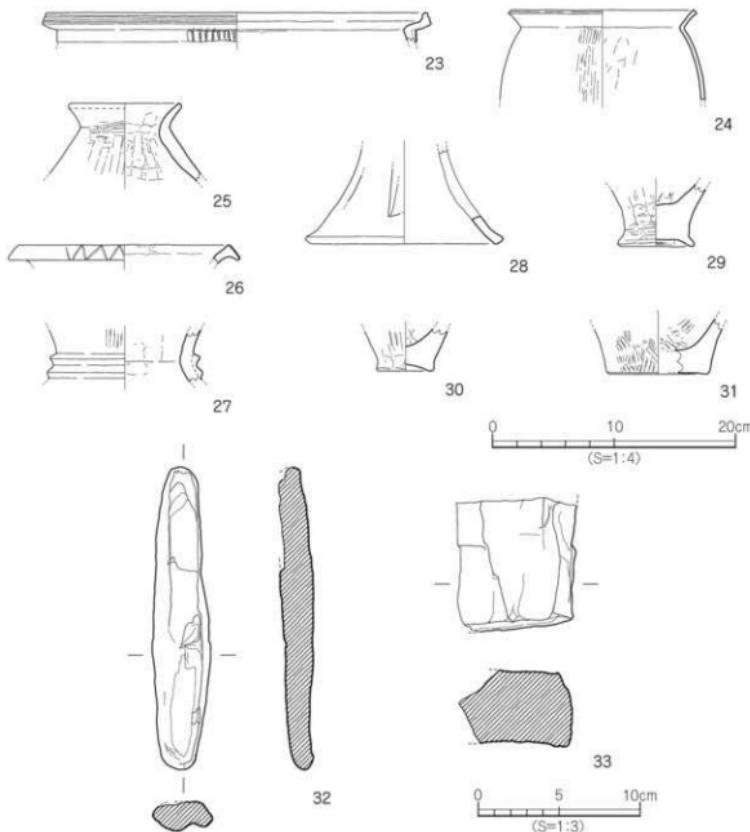
第23図 2区構造配置図

(2) 溝

SD201

2区中央部西寄りC4～D5区で検出した南北方向の溝で、4基の土坑と重複し、溝両端は調査区外に続く。壁面の土層観察により、SD201上面は第I⑤層が覆う。規模は検出長7.61m、最大幅6.00m、深さは20cmである。断面形態は皿状をなし、埋土は明黄褐色土(10YR 7/6)単層である。溝内からは、遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが、検出層位などから概ね近現代の溝とする。



第24図 SB201 出土遺物実測図

SD202

2区東側 C・D6 区で検出した南北方向の溝で、溝北側は土坑 SK211 と重複する。壁面の土層観察により、SD202 上面は第 I ⑤層が覆う。規模は検出長 5.91 m、最大幅 1.56 m、深さは 11cm である。断面形態は浅い皿状をなし、埋土は灰白色土（5Y 8/1）に黄褐色土（10YR 5/8）がブロック状に混入するものである。溝内からは、遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが、検出層位などから概ね近現代の溝とする。

SD203

2区中央部東寄り D5 区で検出した東西方向の短い溝で、溝両端は消失する。規模は検出長 2.38 m、最大幅 0.64 m、深さは 15cm である。断面形態は浅い皿状をなし、埋土は灰黄色土（25Y 6/2）単層である。溝基底面には凹凸が数多くみられたことから、農耕に伴う鋤溝の可能性がある。溝内からは、遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが、検出層位などから概ね近現代の溝とする。

（3）土 坑

SK205

2区西端 D3 区で検出した土坑で、土坑西側は調査区外へ続く。壁面の断面観察により、土坑上面は第IV層が覆う。平面形態は楕円形をなすものと思われ、規模は南北長 1.41 m、東西検出長 1.00 m、深さは 24cm である。断面形態は逆台形状をなし、埋土は暗灰色土（N3/）単層である。土坑内からは、遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが、検出層位や埋土が SB201 床面検出の柱穴掘り方埋土と酷似することから、概ね弥生時代中期後葉頃の遺構と考えられる。

SK206

2区西端 D3 区で検出した土坑で、土坑西側は調査区外へ続く。壁面の断面観察により、土坑上面は第IV層が覆う。平面形態は楕円形をなすものと思われ、規模は南北長 1.74 m、東西検出長 1.04 m、深さは 24cm である。断面形態は逆台形状をなし、埋土は暗灰色土（N3/）単層である。土坑内からは、遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが、検出層位や埋土が SB201 床面検出の柱穴掘り方埋土と酷似することから、概ね弥生時代中期後葉頃の遺構と考えられる。

SK203

2区中央部東寄り D5・6 区で検出した土坑で、土坑南側は調査区外に続く。壁面の土層観察により、第 I ③層が土坑上面を覆う。平面形態は不整の楕円形をなすものと思われ、規模は東西長 3.50 m、南北検出長 1.06 m、深さは 20cm である。断面形態は浅い逆台形状をなし、埋土は暗青灰色土（5BG 4/1）に黄褐色土（10YR 5/8）がブロック状に混入するものである。土坑内から、遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが、SK203 は検出層位から、概ね近現代の土坑と考えられる。

SK211

2区北東部C6区で検出した土坑で、溝SD202と重複する。壁面の土層観察により、第I④層が土坑上面を覆う。平面形態は楕円形をなすものと思われ、規模は東西長391m、南北検出長0.98m、深さは36cmである。断面形態は逆台形状をなし、埋土は暗青灰色土（5BG 4/1）に黄褐色土（10YR 5/8）がブロック状に混入するものである。土坑内から、遺物の出土はない。

時期:出土遺物がなく時期特定は困難であるが、検出層位と埋土がSK203と酷似することなどから、概ね近現代の土坑と考えられる。

SK201

2区東側D6区で検出した土坑で、平面形態は楕円形をなし、規模は長径0.81m、短径0.54m、深さは11cmである。断面形態は浅い逆台形状をなし、埋土は暗青灰色土（5BG 4/1）に黄褐色土（10YR 5/8）がブロック状に混入するものである。土坑内から、遺物の出土はない。

時期:出土遺物がなく時期特定は困難であるが、検出層位と埋土がSK203と酷似することなどから、概ね近現代の土坑と考えられる。

SK202

2区中央部南寄りD5区で検出した土坑で、平面形態は楕円形をなし、規模は長径1.34m、短径0.91m、深さは13cmである。断面形態は浅い逆台形状をなし、埋土は暗青灰色土（5BG 4/1）に黄褐色土（10YR 5/8）がブロック状に混入するものである。土坑内から、遺物の出土はない。

時期:出土遺物がなく時期特定は困難であるが、検出層位と埋土がSK203と酷似することなどから、概ね近現代の土坑と考えられる。

SK207

2区中央部D5区で検出した土坑で、平面形態は楕円形をなし、規模は長径0.84m、短径0.61m、深さは9cmである。断面形態は浅い逆台形状をなし、埋土は暗青灰色土（5BG 4/1）に黄褐色土（10YR 5/8）がブロック状に混入するものである。土坑内から、遺物の出土はない。

時期:出土遺物がなく時期特定は困難であるが、検出層位と埋土がSK203と酷似することなどから、概ね近現代の土坑と考えられる。

SK208

2区中央部北西寄りC・D5区で検出した土坑で、平面形態は楕円形をなし、規模は長径1.71m、短径1.61m、深さは4cmである。断面形態は浅い逆台形状をなし、埋土は暗青灰色土（5BG 4/1）に黄褐色土（10YR 5/8）がブロック状に混入するものである。土坑内から、遺物の出土はない。

時期:出土遺物がなく時期特定は困難であるが、検出層位と埋土がSK203と酷似することなどから、概ね近現代の土坑と考えられる。

SK209

2区中央部西寄りD4・5区で検出した土坑で、土坑西側は溝SD201に削平されている。平面形態

は円形をなすものと思われ、規模は南北長 1.24 m、東西検出長 0.61 m、深さは 18cm である。断面形態は浅い逆台形状をなし、埋土は暗青灰色土（5BG 4/1）に黄褐色土（10YR 5/8）がブロック状に混入するものである。土坑内から、遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが、検出層位と埋土が SK203 と酷似することなどから、概ね近現代の土坑と考えられる。

SK210

2 区中央部南西寄り D5 区で検出した土坑で、土坑西側は溝 SD201 に削平されている。平面形態は梢円形をなすものと思われ、規模は東西検出長 1.69 m、南北長 2.81 m、深さは 31cm である。断面形態は逆台形状をなし、埋土は暗青灰色土（5BG 4/1）に黄褐色土（10YR 5/8）がブロック状に混入するものである。土坑内から、遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが、検出層位と埋土が SK203 と酷似することなどから、概ね近現代の土坑と考えられる。

SK212

2 区中央部西寄り D4 区で検出した土坑で、溝 SD201 と重複する。平面形態は梢円形をなすものと思われ、規模は東西検出長 1.21 m、南北長 3.21 m、深さは 12cm である。断面形態は浅い逆台形状をなし、埋土は暗青灰色土（5BG 4/1）に黄褐色土（10YR 5/8）がブロック状に混入するものである。土坑内から、遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが、検出層位と埋土が SK203 と酷似することなどから、概ね近現代の土坑と考えられる。

SK213

2 区中央部西寄り D4 区で検出した土坑で、溝 SD201 と重複する。平面形態は梢円形をなすものと思われ、規模は東西検出長 1.31 m、南北長 2.21 m、深さは 8cm である。断面形態は浅い逆台形状をなし、埋土は暗青灰色土（5BG 4/1）に黄褐色土（10YR 5/8）がブロック状に混入するものである。土坑内から、遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが、検出層位と埋土が SK203 と酷似することなどから、概ね近現代の土坑と考えられる。

（4）その他の遺構と遺物

1) 柱 穴

2 区では、23 基の柱穴を検出した（SP215 は欠番）。柱穴掘り方埋土は、以下の 2 種類である。

①類－暗灰色土（N3/）：20 基 [SP201 ~ 211・214・216 ~ 222・224]

②類－灰白色土（5Y 8/1）に黄褐色土（10YR 5/8）がブロック状に混入：3 基 [SP212・213・223]

なお、検出した柱穴は埋土や検出層位より、①類は弥生時代中期から後期、②は近現代の遺構と考えられる。

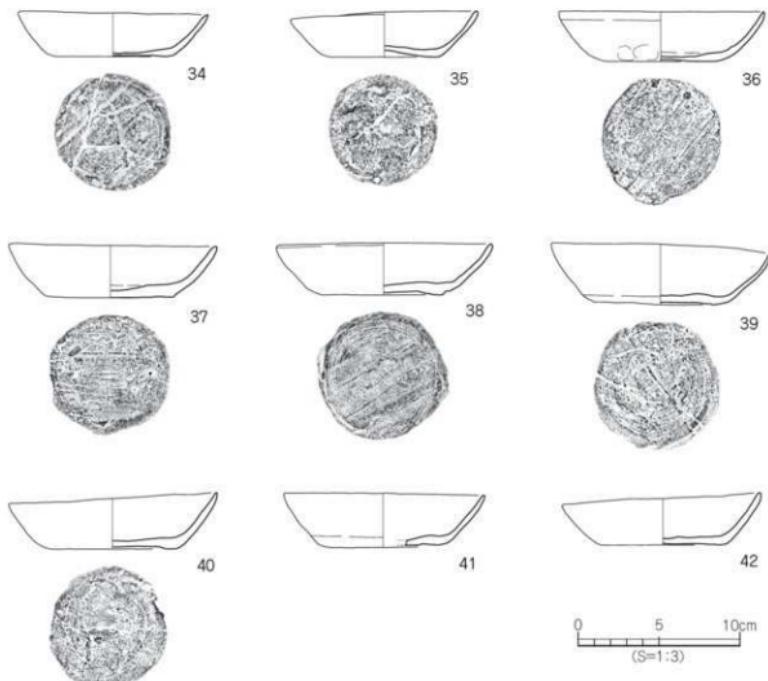
2) 2区包含層出土遺物

① 第II層出土遺物（第25図、図版12）

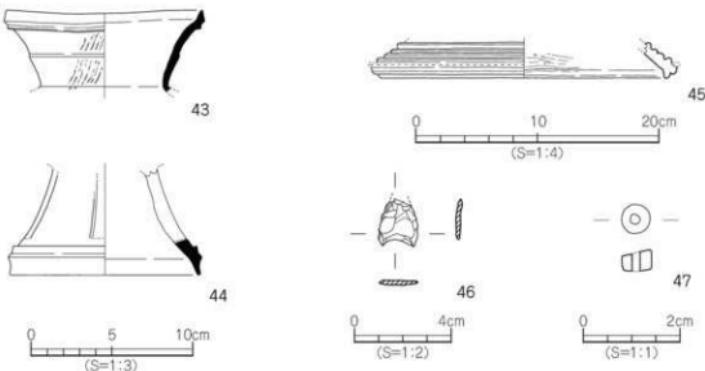
34～42は土師器坏。37・38は完形品。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁端部は尖り気味に仕上げる。法量は、口径11.4～13.5cm、底径6.6～8.0cm、器高2.7～3.7cmである。底部の切り離しは回転糸切り技法によるもので、36～41はスノコの痕跡が残る。なお、35の底部外面には、歪みによる割れが認められる。色調は黄灰色～灰白色で、35～37の胎土中には赤色酸化土粒が少量混入する。

② 第IV層出土遺物（第26図、図版13）

43・44は須恵器。43は広口壺で、口縁部と頸部に凸線1条を施す。44は高坏の脚部片で、脚裾部に凸線が巡り、柱部には長方形状の透かしが2ヶ所認められる。6世紀前葉。45は弥生土器の高坏形土器。脚部片で、脚端部を下方に拡張し、脚裾部と脚端面に凹線文を施す。弥生時代中期後葉。46は凹基無茎式石鏡で、先端部を欠損する。赤色珪質岩製。47は白玉。色調は暗灰色で、口径0.6cm、孔径0.2cm、厚さ0.4cmを測る。滑石製。



第25図 2区 第II層出土遺物実測図



第26図 2区 第IV層出土遺物実測図

(5)まとめ

2区では、弥生時代から近現代までの遺構や遺物を確認した。検出した遺構は弥生時代の竪穴建物1棟と土坑2基、近現代の溝3条及び土坑10基である。竪穴建物SB201と2基の土坑(SK205・206)は、弥生時代中期後葉の遺構である。古墳時代の遺構は未検出であるが、第IV層中からは古墳時代後期に時期比定される土師器や須恵器の破片が少量出土した。なお、第IV層中からは滑石製の白玉1点が出土している。

【検出遺構】

弥生時代中期後葉	：竪穴	1 棟 (SB201)
	土坑	2 基 (SK205・206)
近 現 代	：溝	3 条 (SD201～203)
	土坑	10 基 (SK201～203・207～213)

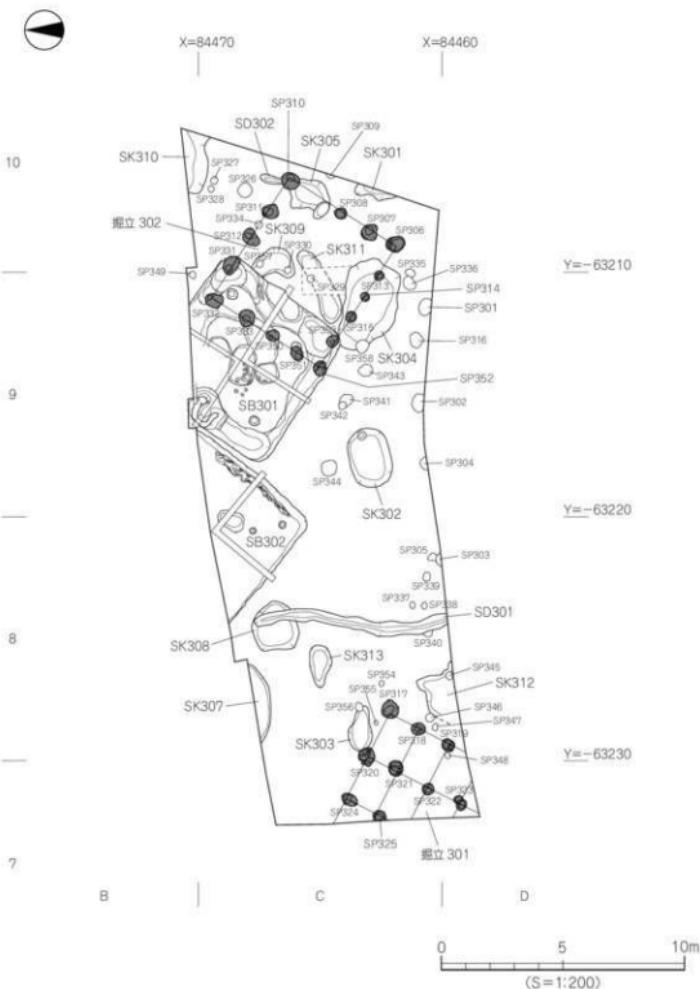
3.3区の調査

3区では竪穴建物2棟、掘立柱建物2棟、溝2条、土坑12基、柱穴58基を検出した(第27図、図版2)。

(1) 竪穴建物

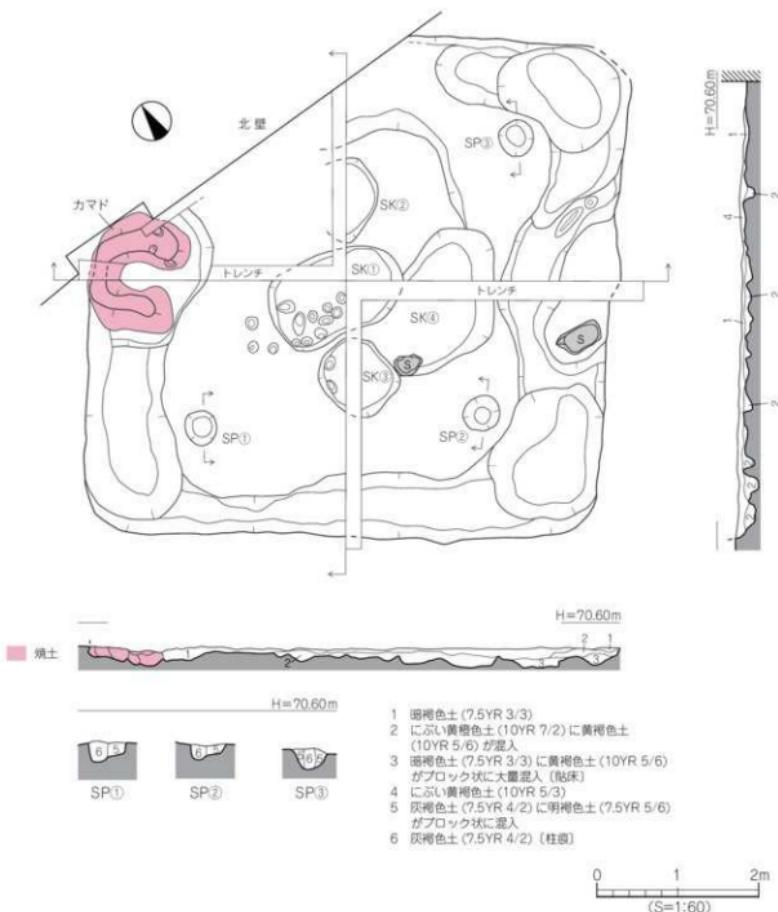
SB301 (第28・29図、図版3)

3区中央部北東寄りB9～C10区に位置する建物址で、建物東側は土坑SK309と重複し、南東隅は土坑SK304と重複し、SB301が後出する。また、建物上面にて掘立302を構成する柱穴7基を検出した。壁面の土層観察により、SB301上面は第IV層が覆う。SB301の平面形態は隅丸方形で、規模は東西長6.36m、南北長6.21m、壁高は26cmである。建物埋土は暗褐色土(7.5YR 3/3)を基調とし、床面付近には、にぶい黃橙色土(10YR 7/2)や黃褐色土(10YR 5/6)が部分的に堆積する。内部施設はカ



第27図 3区遺構配置図

マドや土坑、柱穴のほか溝を検出した。カマドは建物北壁中央部にあり、平面形態は馬蹄形状をなす。規模は東西長1.5m、南北長1.2m、高さ26cmほどが残存している。カマドは黒褐色土(10YR 3/1)に、にぶい黄褐色土(10YR 5/4)が混入するものや、灰白色土(10YR 8/2)と、にぶい黄褐色土(10YR 4/3)が混入する土壤などを積み重ねて構築されている。なお、カマド内部にはカマド上部に構築されていたと思われる灰黄褐色土(10YR 5/2)や灰白色粘土(7.5YR 8/2)が検出された。建物床面からは、3基の柱穴(S P①～③)を検出した。平面形態は円形で、規模は径0.41～0.45m、深さは18



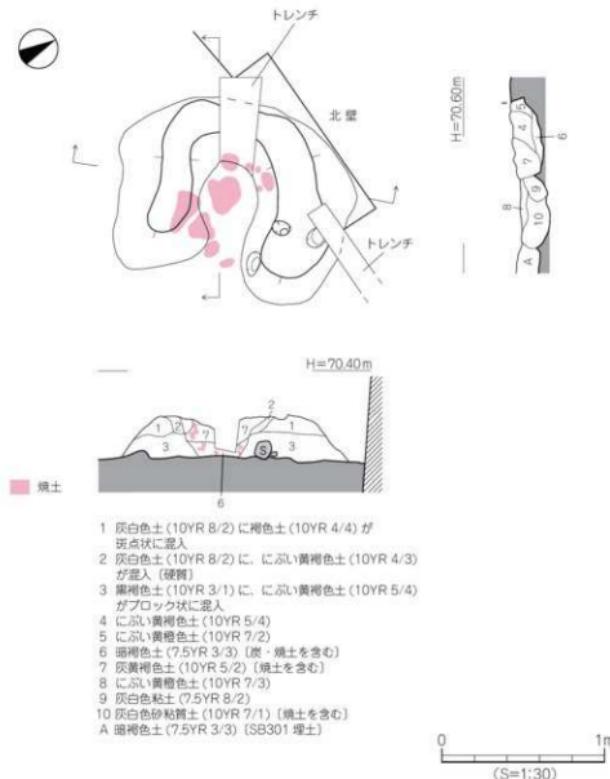
第28図 SB301測量図

~28cmである。柱穴掘り方埋土は灰褐色土(7.5YR 4/2)に明褐色土(7.5YR 5/6)がブロック状に混入するものである。検出状況より、これら3基の柱穴はSB301の主柱穴と考えられる。このほか、建物床面にて4基の土坑(SK①~④)を検出した。また、壁体に沿って幅0.4~1.0m、深さ3~12cmの溝を検出した。これらの遺構はSB301に伴うものと推測されるが、用途や性格は不明である。

遺物は建物埋土中より弥生土器や土師器、須恵器の破片が数多く出土したほか、石庖丁や石鎌の破損品と石器剝片が出土した。また、カマド内からは土師器壺が押し潰された状態で出土している。なお、遺物の出土状況から、SB301は人為的に埋め戻された可能性の高い建物と推測される。

出土遺物 (第30・31図、図版13・14)

48~51は須恵器、48は坏蓋。丸味のある天井部で、口縁端部は内傾する。天井部外面には、線刻が認められる。49は坏身。たちあがり端部は内傾し、受部端には沈線状の凹みが巡る。50は壺の口



第29図 SB301 カマド測量図

縁部片で、珠玉状に肥厚する。51は広口壺で、頸部～胴上半部外面には回転カキメ調整、胴下半部外面には格子目叩きを施す。内面は、胴部下半部に同心円叩きを施す。52～58は土師器。52～54は甌で、口縁部は内湾し、口縁端部は内傾する。53・54の口縁部中位付近には、不明瞭な稜をもつ。なお、胴部外面にはハケメ調整、内面はナデ調整と指頭痕が顕著に残る。55・56は椀。体部は内湾し、55の口縁部は尖り気味に仕上げる。57・58は甌。57は口縁部片で、口縁端部は「コ」の字状をなす。58は把手部で、断面形態は円形である。59・60は弥生土器。59は甌形土器の口縁部片で、胴部に凸帯を貼り付け、凸帯上に押圧を加える。60は高坏形土器の脚部片で、脚裾部と脚端面に凹線文を施す。柱部には矢羽根状の透かしをもつ。61は石庖丁で、研磨段階の未成品である。結晶片岩製。62はサヌカイト製の凹基無茎式石鎌で、先端部を欠損する。サヌカイト製。63・64は剥片で、石材は63がサヌカイト、64は結晶片岩である。

時期：出土した須恵器、土師器の特徴より、SB301の廃棄・埋没時期は古墳時代後期、6世紀中葉とする。

SB302（第32図、図版3）

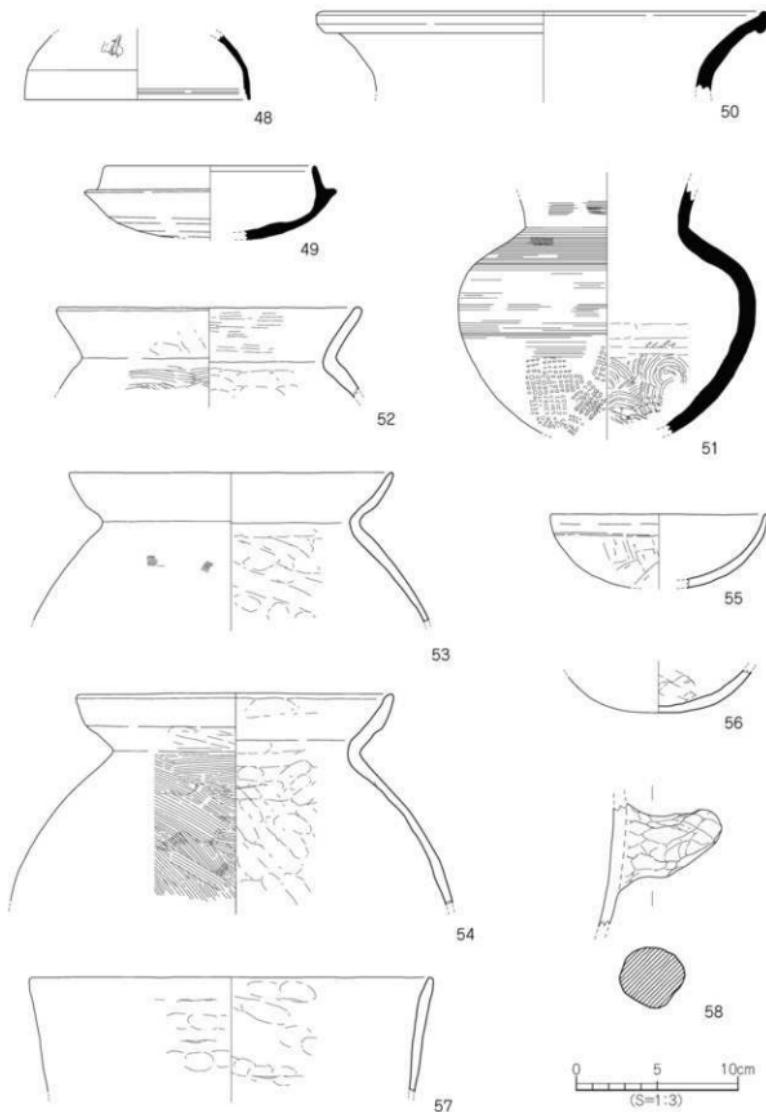
3区中央部北寄りC8・9に位置する建物址で、建物北側は調査区外に続く。壁面の土層観察により、SB302上面は第Ⅱ層が覆う。平面形態は隅丸方形もしくは長方形をなすものと思われ、規模は東西検出長6.11m、南北検出長5.61m、壁高は22cmである。建物埋土は2種類あり、上層は暗褐色土（10YR 3/3）、下層は黒褐色土（10YR 2/3）である。なお、床面付近には黒褐色土（10YR 2/3）に黄褐色土（10YR 5/8）がブロック状に混入する土壤があり、これは床面修復のための貼床土と推測される。内部施設は、柱穴と土坑及び周壁溝を検出した。検出した2基の柱穴（SP①・②）のうち、SP②は径28cm、深さ24cmを測る円形柱穴で、柱穴の配置よりSB302の主柱穴と考えられる。また、土坑SK①は平面形態が梢円形をなし、規模は長径1.4m、短径0.81m、深さ11cmである。土坑埋土は、黒褐色土（10YR 2/3）に黄褐色土（10YR 5/8）がブロック状に混入するものであり、SB302に伴う遺構と思われる。このほか、建物壁体に沿って幅10～30cm、深さ3～10cmの周壁溝を検出した。溝基底面には径3～6cm、深さ3～6cmの小ピットが点在しており、杭が打ちこまれていたものと推測される。なお、SB302検出時には建物西側壁体中央部に焼土塊を検出した。おそらく、カマドの痕跡と思われるが、形状を確認するには至らなかった。

遺物は建物埋土中より、弥生土器や土師器、須恵器のほか石器剥片が少量出土した。SB301と同様、遺物の出土状況からSB302も人為的に埋め戻された可能性が高い建物と考えられる。

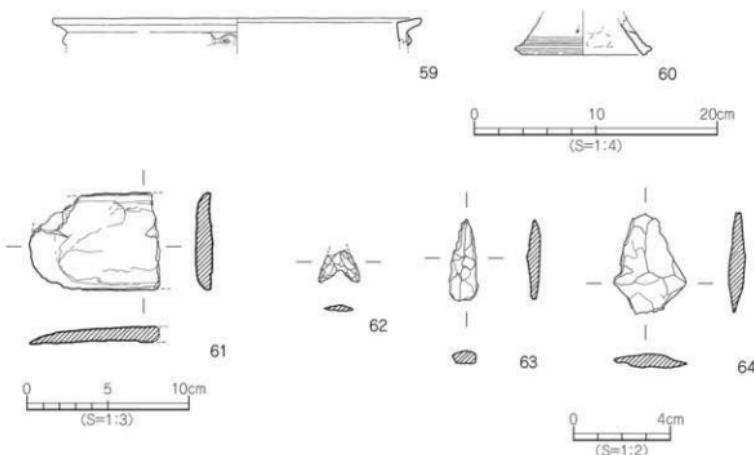
出土遺物（第33図、図版14）

65・66は須恵器。65は壺蓋で、天井部は丸味をもち、口縁端部は内傾する。天井部内面には、円弧叩きがみられる。66は壺身の完形品。たちあがり端部は内傾し、受部端には沈線状の凹みが巡る。67～70は土師器。67は甌で、口縁部は内湾する。68は完形の壺で口縁部は外反し、底部は平底である。69は鉢で、口縁部は直立し、口縁端部は尖り気味に仕上げる。底部は平底で、胴部外面にはタテ方向のヘラミガキを施す。70は甌の胴部片で、外面にはハケメ調整がみられる。71は弥生土器。甌形土器の口縁部片で、頸部には凸帯が貼り付けられ、凸帯上に押圧を加える。胴部外面には、ヨコ方向のヘラミガキを施す。72は石器素材、73は剥片。結晶片岩製。

時期：出土した須恵器、土師器の特徴より、SB302の廃棄・埋没時期は6世紀前葉とする。



第 30 図 SB301 出土遺物実測図 (1)



第31図 SB301出土遺物実測図(2)

(2) 挖立柱建物

掘立301(第34図、図版3)

3区西側C7～D8区に位置する建物址で、土坑SK303と重複し、掘立301が後出す。東西3間以上、南北4間以上の総柱構造の建物址で、建物規模は南北検出長4.27m、東西検出長3.9m、床面積20.85m²である。建物を構成する柱穴の平面形態は円形または梢円形をなし、規模は径0.50～0.70m、深さは12～45cmである。柱穴掘り方埋土は、黒色粘質土(N1.5/)に灰白色粘質土(2.5Y 8/1)と明黄褐色砂(10YR 7/6)が混入するものである。柱痕はSP319で検出され、柱痕径10cm、深さ35cmである。なお、SP319には柱材の一部が残存していた。各柱穴内からは弥生土器や土師器、須恵器の小片が数点出土したが、時期特定しうる遺物はない。

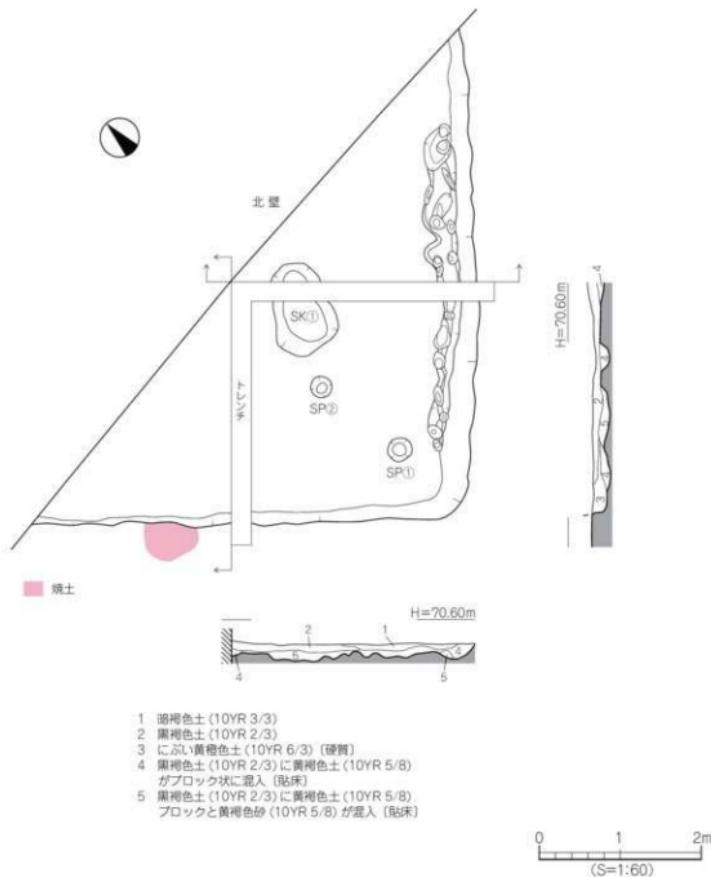
時期：出土遺物が僅少であり時期特定は困難であるが、後述するSK303(古墳時代後期)より後出することから、概ね6世紀中葉以降の建物址とする。

掘立302(第35図、図版4)

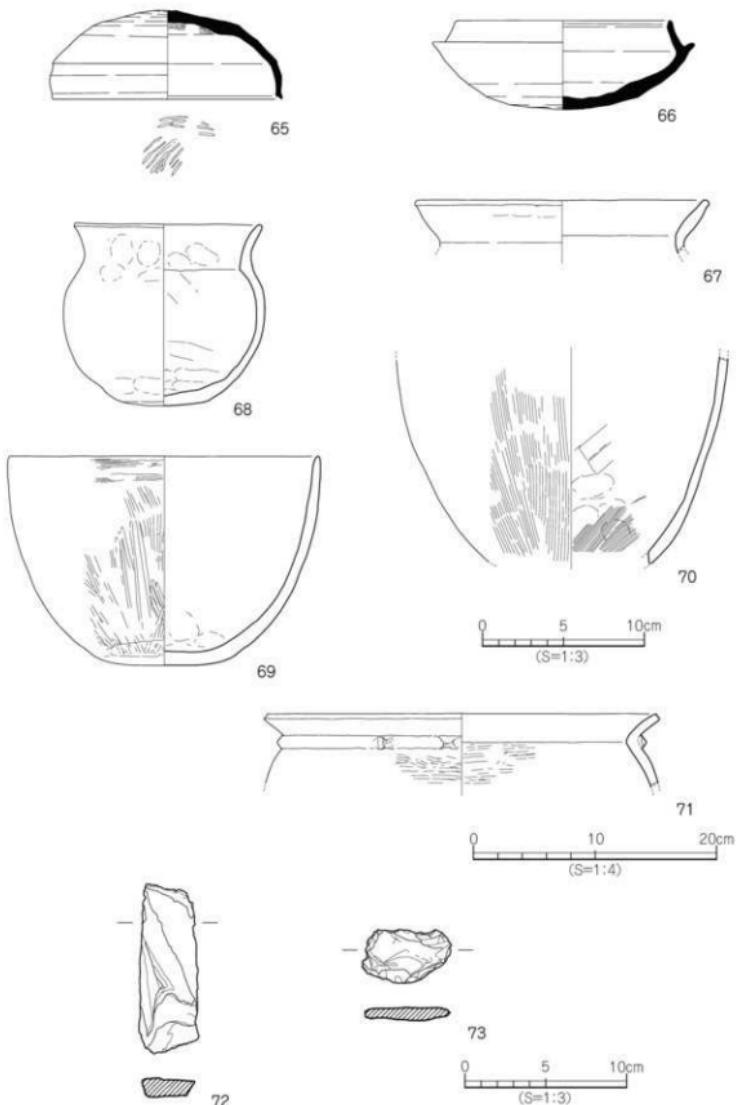
3区東側C9～10区に位置する建物址で、SB301と4基の土坑(SK304～306、309)と重複し、掘立302が後出す。東西5間、南北4間の東西棟で、側柱構造の建物址である。建物規模は桁行長5.89m、梁行長5.22mである。なお、建物方位は掘立301と同じである。建物を構成する柱穴の平面形態は円形または梢円形をなし、規模は径0.40～0.90m、深さは6～40cmである。柱穴掘り方埋土は灰褐色土(7.5YR 4/2)を基調とし、にぶい黄褐色土(10YR 5/4)がブロック状に混入するものである。柱痕は6基の柱穴で検出され、柱痕径15～20cm、柱痕埋土は灰褐色粘土(7.5YR 4/2)である。

検出状況より、掘立302は柱を抜き取った後に廃絶されたと推測される。柱穴内からは弥生土器や土師器、須恵器の小破片が数点出土したが、時期特定しうる遺物はない。

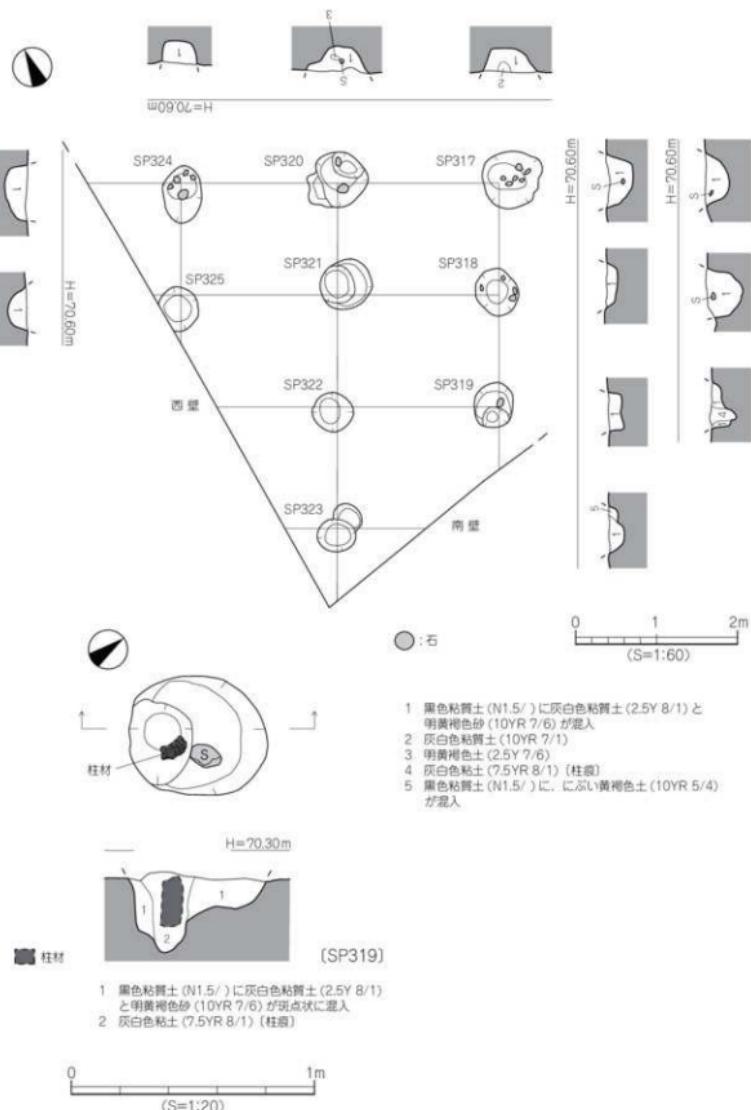
時期：出土遺物が僅少で時期特定は難しいが、柱穴掘り方埋土がSB301検出の主柱穴掘り方埋土と類似することや、SB301より後出することなどから、概ね古墳時代後期、6世紀中葉以降の建物址とする。



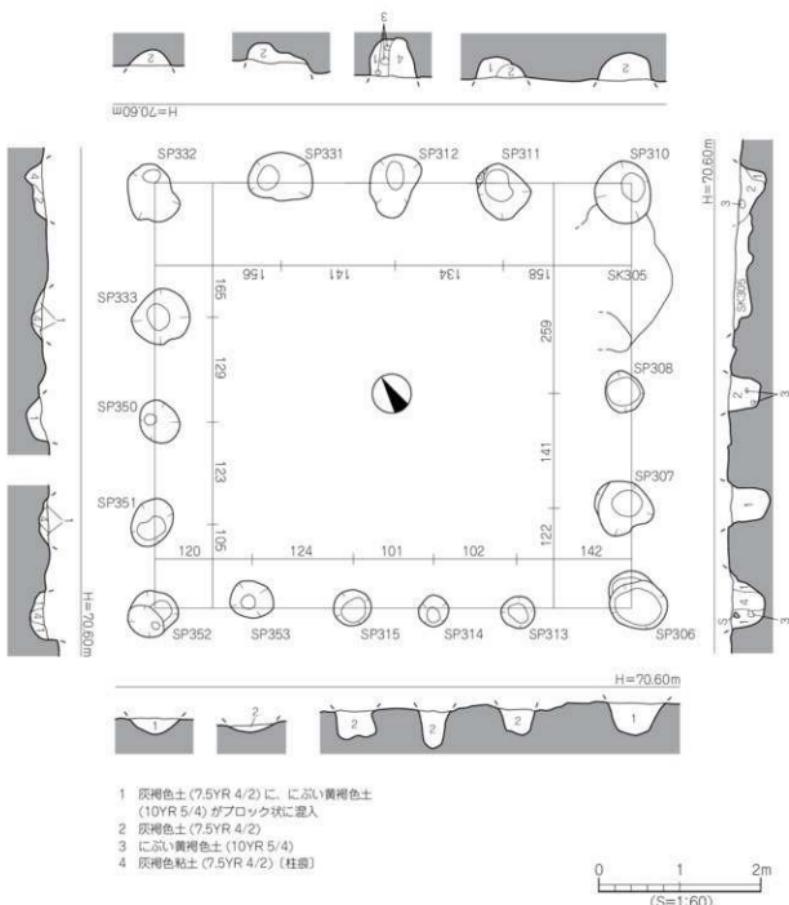
第32図 SB302測量図



第33図 SB302出土遺物実測図



第34図 振立301測量図



(3) 溝

SD301 (第36図)

3区西側C・D8区で検出した南北方向の溝で、溝北側は土坑SK308と重複し、SD301が後出する。壁面の土層観察により、SD301上面は第IV層が覆う。規模は検出長8.04m、最大幅0.6m、深さは6cmである。断面形態は浅い皿状をなし、埋土はオリーブ黒色土(7.5Y 3/1)単層である。溝内からは弥生土器や土師器、須恵器の破片が少量出土した。

出土遺物

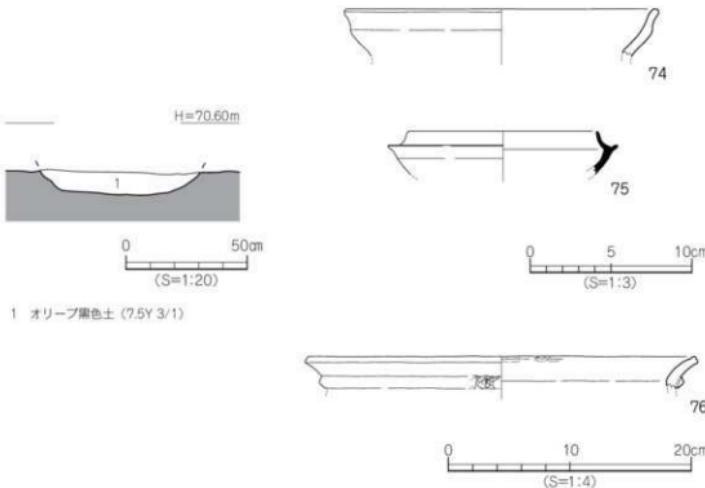
74は土師器甕。口縁部は内湾し、口縁中位に稜をもつ。75は須恵器坏身。たちあがりは低く内傾し、たちあがり端部は尖り気味に仕上げる。76は弥生土器。甕形土器の口縁部片で、頸部に凸帯を貼り付け、凸帯上に布目痕が残る。

時期：出土した須恵器、土師器の特徴より古墳時代後期、6世紀前葉とする。

SD302

3区東側C10区で検出した南北方向の短い溝で、溝南端は掘立302柱穴と重複し、SD302が先行する。規模は検出長1.00m、幅0.29m、深さは3cmである。断面形態は浅い皿状をなし、埋土は暗褐色土(7.5YR 3/3)に明黄褐色土(10YR 7/6)がブロック状に混入するものである。溝内からは、遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は難しいが、埋土がSB301と類似することから、概ね古墳時代後期の溝とする。



第36図 SD301断面図・出土遺物実測図

(4) 土坑

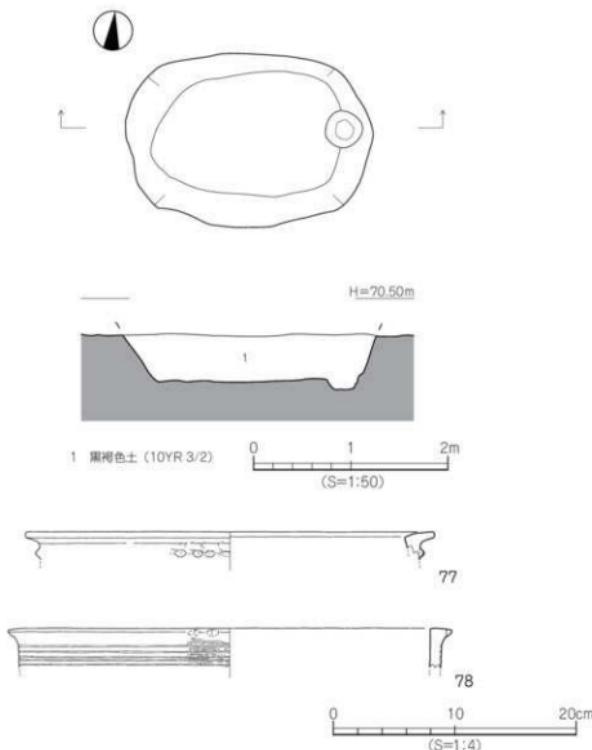
SK302 (第37図)

3区中央部南寄りC9区で検出した土坑で、平面形態は梢円形をなし、規模は長径2.49m、短径1.69m、深さは43cmである。断面形態は逆台形状をなし、埋土は黒褐色土(10YR 3/2)単層である。土坑基底面にて、径40cm、深さ12cmの小ピットを検出した。ピット埋土は、土坑埋土と同様である。遺物は埋土中より、弥生土器片が数点出土した。

出土遺物

77・78は弥生土器の壺形土器。77の口縁部は逆「L」字状をなし、頸部に凸帯を貼り付け、凸带上に押圧を加える。78は貼り付けにより口縁部を形成し、口縁端部に刻目、胴部にはヘラ書き沈線文4条を施す。

時期：出土した弥生土器(77)の特徴より、弥生時代中期中葉とする。



第37図 SK302測量図・出土遺物実測図

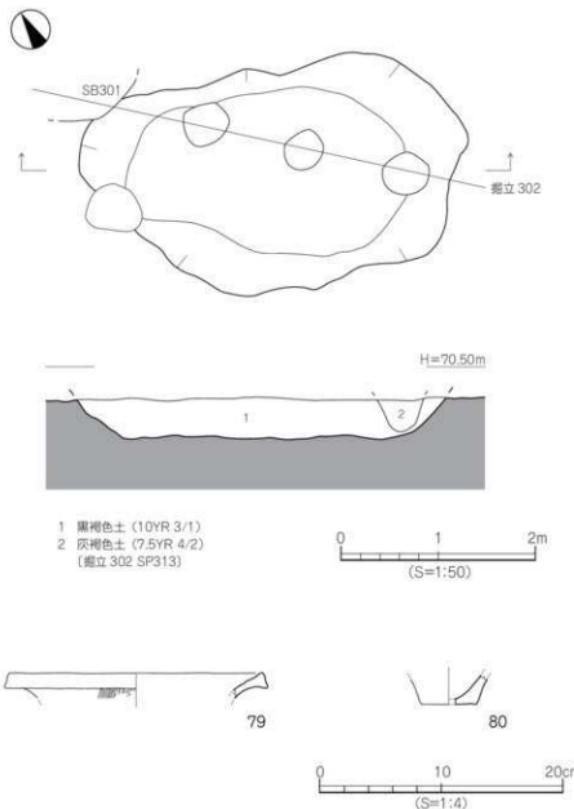
SK304（第38図）

3区南東部C9・10区で検出した土坑で、SB301と掘立302と重複し、SK304が先行する。平面形態は橢円形をなし、規模は長径3.87m、短径2.18m、深さは39cmである。断面形態は逆台形状をなし、埋土は黒褐色土(10YR 3/1)単層である。遺物は、弥生土器片が数点出土した。

出土遺物

79・80は弥生土器。79は広口壺で、口縁部を上下方に拡張し、口縁端面はナデにより凹む。80は變形土器の底部で、僅かに上げ底をなす。

時期：出土遺物の特徴より、弥生時代中期中葉とする。



第38図 SK304測量図・出土遺物実測図

SK308（第39図）

3区中央部北寄りC8区で検出した土坑で、土坑上面にて溝SD301を検出した。平面形態は不整の楕円形をなし、規模は長径201m、短径191m、深さは13cmである。断面形態は逆台形状をなし、埋土は黒褐色土（10YR 3/2）単層である。遺物は、弥生土器片が数点出土した。

出土遺物

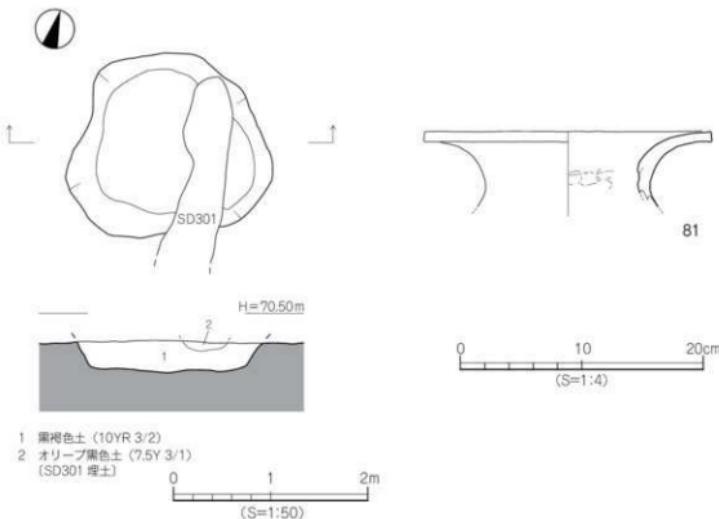
81は弥生土器。広口壺で、口縁部は大きく外反し、口縁端面はナデにより凹む。

時期：出土した弥生土器の特徴より、弥生時代中期中葉とする。

SK307

3区西北部C8区で検出した土坑で、土坑北側は調査区外へ続く。平面形態は楕円形をなすものと思われ、規模は東西検出長331m、南北検出長0.71m、深さは8cmである。断面形態は浅い逆台形状をなし、埋土は黒褐色土（10YR 3/2）単層である。なお、埋土中には径3～5cmの小砾が少量含まれていたが、土器の出土はない。

時期：時期特定しうる遺物の出土はないが、埋土がSK302やSK304と酷似することから、概ね弥生時代中期中葉頃の土坑とする。



第39図 SK308測量図・出土遺物実測図

SK305

3区東側C10区で検出した土坑で、掘立302と重複し、SK305が先行する。平面形態は楕円形をなし、規模は南北検出長1.49m、東西長1.41m、深さは21cmである。断面形態は浅い逆台形状をなし、埋土は灰褐色土(7.5YR 4/2)に、にぶい黄褐色土(10YR 5/4)がブロック状に混入する。土坑内からは、遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は難しいが、掘立302に先行することから、概ね古墳時代後期以前の土坑とする。

SK309

3区東側C9・10区で検出した土坑で、土坑北側はSB301に一部削平されている。平面形態は楕円形をなすものと思われ、規模は南北検出長1.68m、東西長0.98m、深さは9cmである。断面形態は浅い逆台形状をなし、埋土は褐灰色土(7.5YR 4/1)に明黄褐色土(10YR 7/6)がブロック状に混入する。土坑内からは、遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は難しいが、SB301に先行することや、1区検出のSB101と埋土が類似することなどから、概ね古墳時代後期以前の土坑とする。

SK301

3区東壁中央部南寄りC10区で検出した土坑で、土坑東側は調査区外へ続く。壁面の土層観察より、土坑上面は第IV層が覆う。平面形態は楕円形をなすものと思われ、規模は南北検出長1.69m、東西検出長0.49m、深さは24cmである。断面形態は逆台形状をなし、埋土は暗褐色土(7.5YR 3/3)単層である。なお、埋土中には少量の炭化物や焼土が含まれている。土坑内からは、遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが、埋土がSB301と類似することから、概ね古墳時代後期頃とする。

SK303

3区西側C8区で検出した土坑で、土坑南側は掘立301と重複し、SK303が先行する。平面形態は不整の楕円形をなし、規模は東西検出長1.71m、南北長0.94m、深さは14cmである。断面形態は浅い逆台形状をなし、埋土は暗褐色土(7.5YR 3/3)に黄褐色土(10YR 5/8)がブロック状に混入する。土坑内からは、遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は難しいが、埋土がSB302と類似することから、概ね古墳時代後期頃とする。

SK310

3区北東隅B・C10区で検出した土坑で、土坑北側及び東側は調査区外へ続く。平面形態は楕円形をなすものと思われ、規模は東西検出長2.49m、南北検出長1.04m、深さは24cmである。断面形態は逆台形状をなし、埋土は暗褐色土(7.5YR 3/3)単層である。土坑内からは、遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は難しいが、埋土がSB301と類似することから、概ね古墳時代後期頃の土坑とする。

SK312

3区南西部C・D8区で検出した土坑で、土坑南側は調査区外へ続く。平面形態は楕円形をなすものと思われ、規模は東西検出長2.19m、南北検出長1.64m、深さは8cmである。断面形態は浅い逆台形状をなし、埋土は暗褐色土(7.5YR 3/3)単層である。なお、埋土中には少量の炭化物や焼土が含まれている。土坑内からは、遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は難しいが、埋土がSB301と類似することから、概ね古墳時代後期頃とする。

SK313

3区西側C8区で検出した土坑で、平面形態は楕円形をなし、規模は長径1.84m、短径0.84m、深さは29cmである。断面形態は逆台形状をなし、埋土は暗褐色土(7.5YR 3/3)単層である。土坑内からは、遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は難しいが、埋土がSB302と類似することから、概ね古墳時代後期の土坑とする。

SK311

3区東側C9・10区で検出した土坑で、平面形態は楕円形をなし、規模は長径3.29m、短径0.94m、深さは14cmである。断面形態は逆台形状をなし、埋土はぶい黄褐色土(10YR 5/4)単層である。土坑内からは、遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は難しいが、埋土や検出層位より、近現代の土坑とする。

(5) その他の遺構と遺物

1) 柱穴

3区からは、58基の柱穴を検出した。柱穴掘り方埋土で分類すると、以下の3種類となる。

①類－灰褐色土(7.5YR 4/2)：27基

②類－黒色粘質土(N1.5/)：8基

③類－暗褐色土(7.5YR 3/3)に明黄褐色土(10YR 7/6)が混入：23基

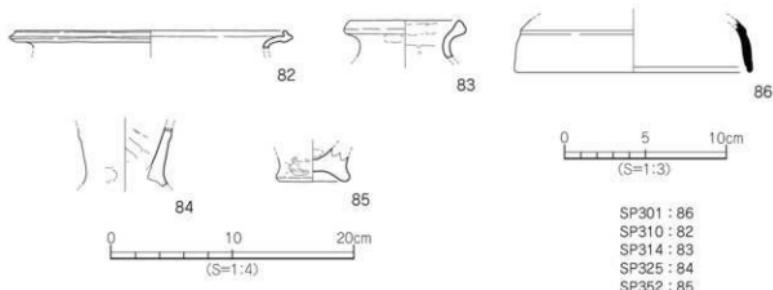
各柱穴内からは弥生土器や土師器、須恵器の小破片が少量出土したが、①類からは弥生土器、②・③類からは土師器や須恵器の破片が出土した。

出土遺物（第40図）

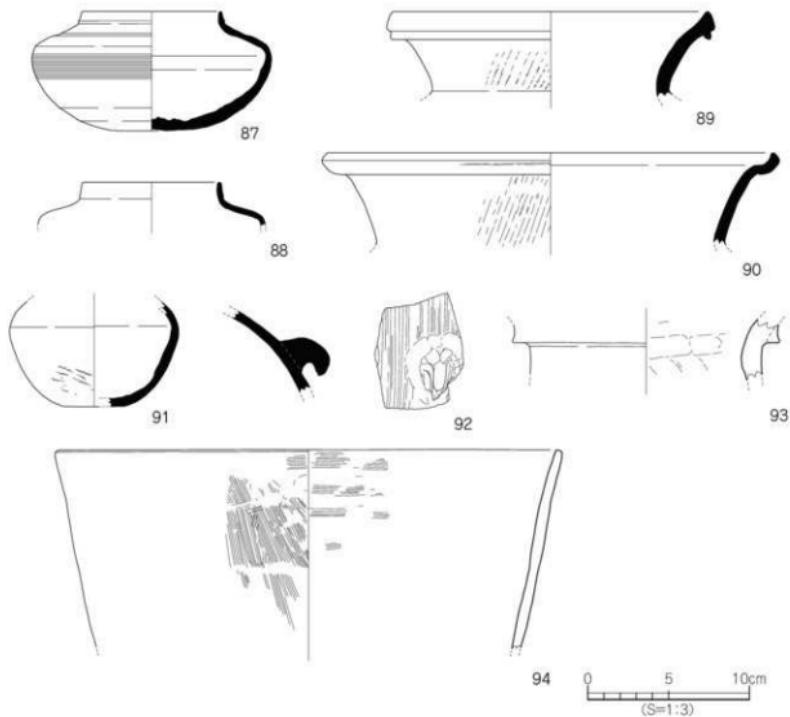
82～85は弥生土器。82はSP310出土の壺形土器で、口縁部を上方に拡張し、口縁端面はナデにより凹む。弥生時代中期後葉。83はSP314出土の壺形土器で、口縁部は肥厚する。弥生時代後期前葉。84はSP325、85はSP352出土品。84は壺形土器の頸部片、85は壺形土器の底部で、85は上げ底をなす。弥生時代中期後葉。86はSP301出土の須恵器壺蓋で、断面三角形状の丸味のある稜をもち、口縁端部は尖り気味に丸い。古墳時代後期中葉。

2) 3区包含層出土遺物

3区では第IV層や第V層中より、弥生土器や土師器、須恵器のほかに石器が出土した。



第 40 図 3 区 柱穴出土遺物実測図



第 41 図 3 区 第IV層出土遺物実測図

① 第Ⅳ層出土遺物（第41図、図版15）

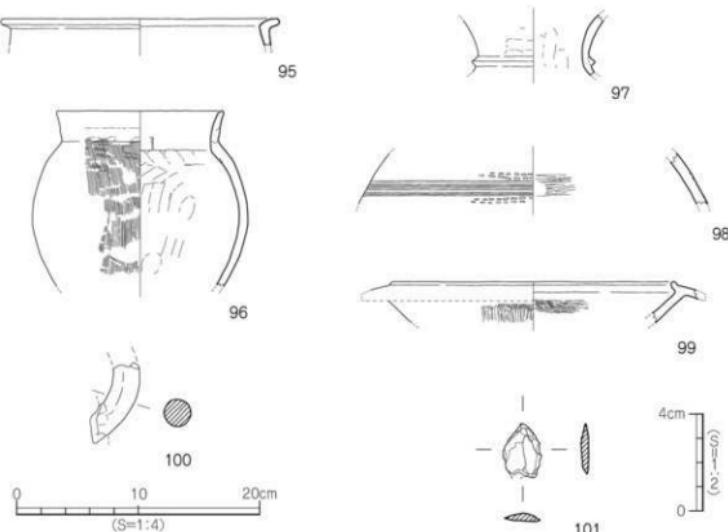
87～92は須恵器。87・88は短頸壺で、87の口縁端部は尖り気味に仕上げる。87の胴上部外面には回転カキメ調整がみられる。5世紀後葉。89は広口壺で、口縁部下に凸線が巡る。6世紀後葉。90は壺で、口縁部を内湾気味に拡張する。7世紀前葉。91は腹で、底部外面には叩きの痕跡が残る。6世紀。92は提瓶で、カギ状の把手をもつ。6世紀後葉。93・94は土師器。93は朝顔形埴輪で、断面三角形状のタガをもつ。6世紀。94は壺で、口縁端部は「コ」字状に仕上げる。6世紀。

② 第V層出土遺物（第42図、図版15）

95～100は弥生土器。95・96は甕形土器で、95は折曲により口縁部を成形する。弥生中期後葉。96は口縁部が僅かに外反し、胴部外面にはタタキ痕が残る。弥生末。97・98は壺形土器。97は頸部に凸帯を貼り付け、98はヘラ描き沈線文6条と、沈線文の上下に刺突文2列を施す。97は弥生時代中期中葉、98は弥生時代前中期。99は高环形土器。口縁部は下外方に開き、口縁端部は内方に肥厚する。内外面共に、丁寧なヘラミガキを施す。弥生時代中期中葉。100はジョッキ形土器の把手部で、断面形態は円形をなす。弥生時代中期中葉。101は平基無茎式石錐で、基部を欠損する。サヌカイト製。

(6)まとめ

3区では、弥生時代から近現代までの遺構や遺物を確認した。検出した遺構は弥生時代と古墳時代及び近現代のものであり、弥生時代では土坑4基（中期中葉）、古墳時代は竪穴建物2棟（後期前葉・中葉）



第42図 3区第V層出土遺物実測図

と掘立柱建物2棟（後期中葉以降）、溝2条（後期前葉）、土坑7基を検出したが、溝SD302と7基の土坑は時期特定しうる遺物の出土がなく、検出層位や埋土等から6世紀代の遺構と考えた。

SB301・302は隅丸方形状の堅穴建物で、SB301の北壁にはカマドが付設されている。カマド内には土器師甕が押し潰された状態で出土しており、建物廃絶に伴う祭祀行為が執り行われたものと推測される。廃絶時期はSB302が後期前葉、SB301は後期中葉である。なお、明確な時期は不明であるが、SB301廃絶後に掘立302が構築されている。また、掘立301も掘立302と同様に時期特定は難しいが、他の遺構との重複より、概ね掘立302と同時期の建物と推測される。そのほかには、近現代の土坑1基を検出している。遺物は遺構や第V層中より、弥生時代前期後半（98）や中期中葉から後期に時期比定される土器のほか、石錐や石器剝片などが出土している。また、第IV層中からは古墳時代中期後葉から後期の土器師や須恵器が数多く出土しており、この中には朝顔形埴輪の破片1点（93）が含まれている。

【検出遺構】

- 弥生時代中期中葉：土坑 4基（SK302・304・307・308）
- 古墳時代後期前葉：堅穴 1棟（SB302）
- 溝 1条（SD301）
- 古墳時代後期中葉：堅穴 1棟（SB301）
- 掘立 2棟（掘立301・302）
- （古墳時代後期）：溝 1条（SD302）
- 土坑 7基（SK301・303・305・309・310・312・313）
- 近 現 代 : 土坑 1基（SK311）

4. 4区の調査

4区では堅穴建物1棟、溝2条、土坑2基、柱穴2基のほか、石室1基を検出した（第43図、図版4）。

(1) 堅穴建物

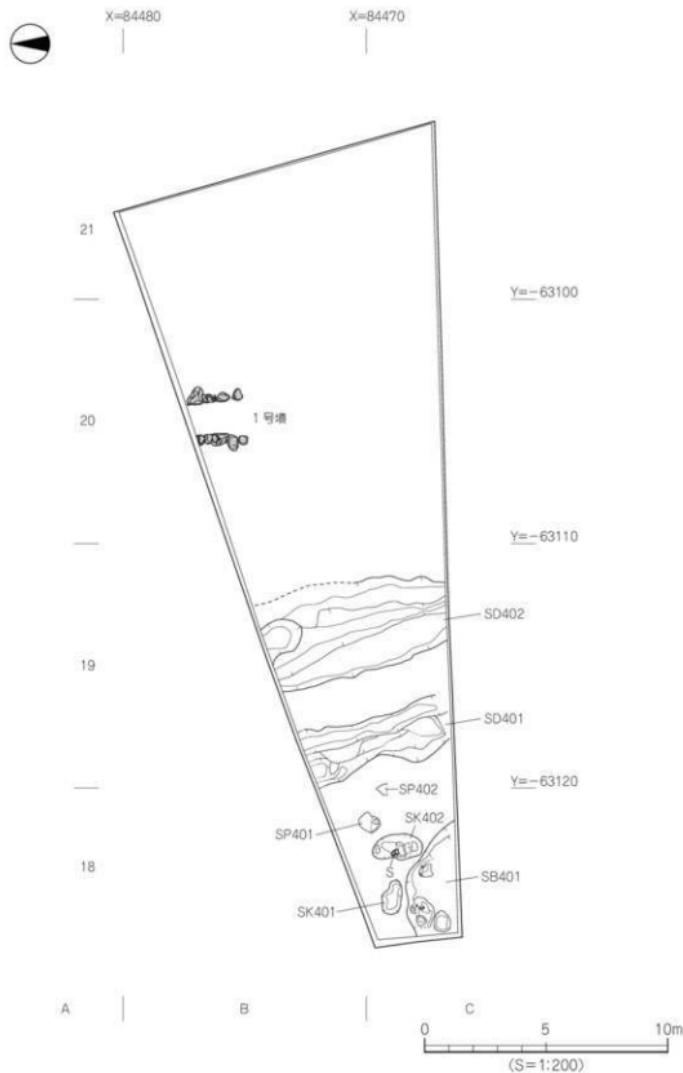
SB401

4区南西隅C18区に位置する堅穴建物で、南側及び東側は調査区外へ続く。SB401は第4章に掲載する8区検出の堅穴建物SB801と同一建物であり、詳細は第4章にて説明する。なお、建物埋土中からは弥生土器の小破片が少量出土したが、図化しうるものはない。ただし、外面に叩き調整がみられる破片が数点あり、SB401の廃棄・埋没時期は弥生時代末と考えられる。

(2) 古 墳

1号墳（第44図、図版5）

4区北壁中央部東寄りB20区で検出した古墳で、石室1基を検出した。石室北側は調査区北側へ続き、南側は後世の開発等により削平されている。なお、墳丘は遺存しておらず、僅かに盛土と思われる土壤が部分的に検出された。1号墳は横穴式の石室を主体部にもち、石室規模は現存長2.0m、幅1.2mである。両側壁には4個の基底石が残存しており、西側壁には2段の積石が残っている。石室には径

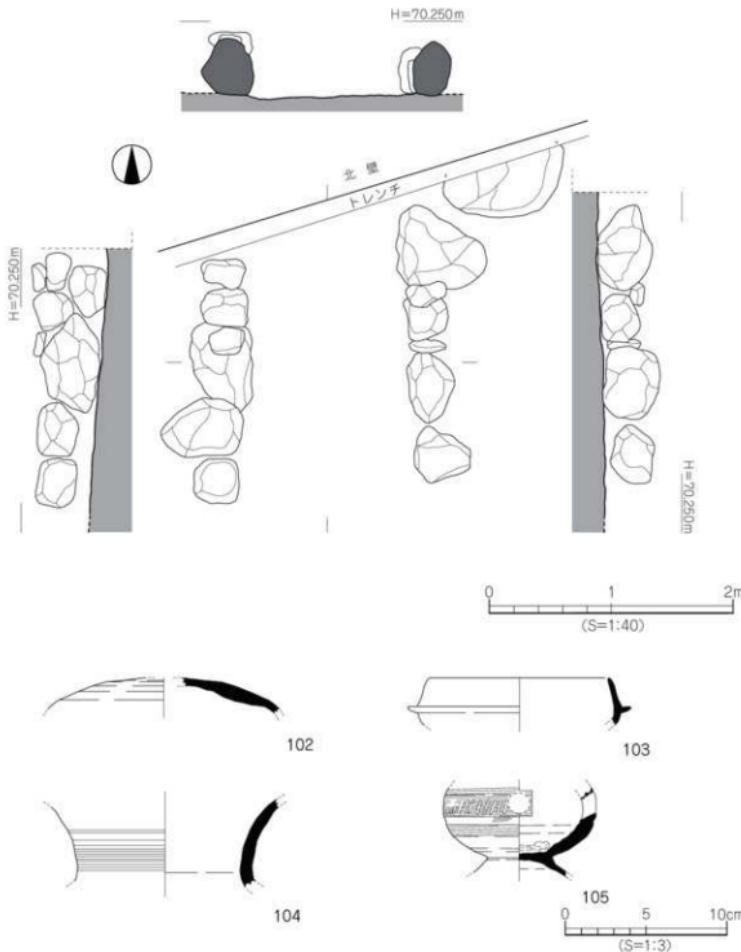


第43図 4区遺構配置図

20～80cm大の花崗岩が使用されており、石室内は上部からの崩落土と思われる褐色土で埋まっており、当時の状況を留めていない。石室内からは遺物の出土はないが、盛土内からは須恵器や土師器片が出土した。

出土遺物（図版15）

102～105は須恵器。102は坏蓋、103は坏身の破片で、103のたちあがり端部は尖り気味に丸く仕



第44図 1号墳測量図・出土遺物実測図

上げる。104は壺の頸部片で、回転カキメ調整がみられる。105は脚付きの壺で、胴部に沈線と刺突列点文を施す。

時期：出土遺物の特徴より、古墳の造営時期は古墳時代後期、7世紀中葉頃と考えられる。

(3) 溝

SD401（第45図）

4区中央部B・C19区で検出した南北方向の溝で、溝両端は調査区外へ続く。壁面の土層観察により、溝上面は第IV層が覆う。規模は検出長6.00m、最大幅2.40m、深さは10～30cmである。断面形態はレンズ状をなし、埋土はオリーブ黒色土（7Y 3/2）である。溝基底面には凹凸があり、南側から北側へ傾斜をなす（比高差12cm）。溝内からは土師器や須恵器の破片や径10～30cmの河原石が数点出土した。なお、検出層位や検出状況から、SD401は1号墳に伴う周溝の可能性がある。

出土遺物

106は須恵器の壺身。底部片で、外面に線刻（ヘラ記号）を施す。内面には、同心円叩きが残る。

時期：出土遺物が僅少で時期特定は難しいが、概ね古墳時代後期、7世紀代とする。

SD402（第46図、図版5）

4区中央部B・C19区で検出した南北方向の溝で、壁面の土層観察によりSD402は第V層上面から掘削された遺構である。規模は検出長7.60m、幅2.50～3.80m、深さは10～35cmである。断面形態はレンズ状をなし、埋土は灰黄褐色土（10YR 5/2）である。溝基底面には凹凸が著しく、數か所で凹みがみられる。溝内からは土師器や須恵器の破片が少量出土したほか、径10～20cm大の河原石が散在して出土した。

出土遺物（図版15）

107は須恵器の提瓶で、口縁端部は長方形状に肥厚する。

時期：出土遺物が僅少で時期特定は難しいが、概ね古墳時代後期、7世紀前葉とする。

(4) 土坑

SK401

4区西端C18区で検出した土坑で、平面形態は楕円形をなし、規模は長径1.40m、短径0.80m、深さは36cmである。断面形態は逆台形状をなし、埋土は黒褐色土（10YR 2/3）単層である。土坑内からは、遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は難しいが、埋土が3区で検出した古墳時代後期の遺構と類似することから、概ね古墳時代後期の土坑と考えられる。

SK402

4区西端C18区で検出した土坑で、平面形態は不整の楕円形をなし、規模は長径2.08m、短径1.00m、深さは38cmである。断面形態は逆台形状をなし、埋土は黒褐色粘質土（10YR 2/3）単層である。土坑内からは、遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は難しいが、SK401と同様、埋土が3区で検出した古墳時代の遺

構と類似することから、概ね古墳時代後期の土坑と考えられる。

(5) その他の遺構と遺物

1) 柱穴

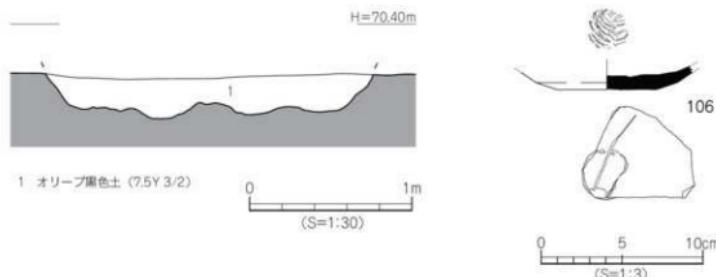
4区では、2基の柱穴を検出した。SP401・402の掘り方埋土は黒褐色土(10YR 3/1) 単層である。柱穴内からは遺物の出土がなく時期特定は難しいが、埋土がSD401・402と酷似することから、概ね古墳時代の遺構とする。

2) 4区包含層出土遺物

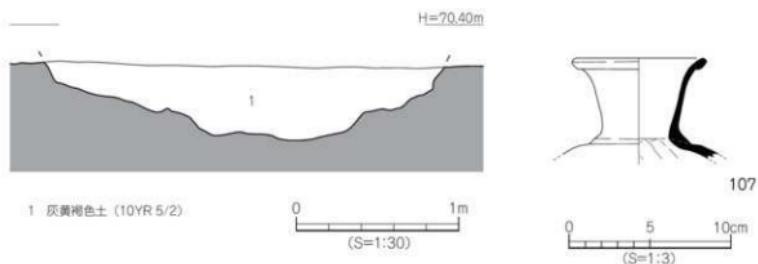
4区では第Ⅲ層や第V層中より弥生土器や土師器、須恵器などの破片が出土したほか、石器が数点出土した。

① 第Ⅲ層出土遺物（第47図、図版15）

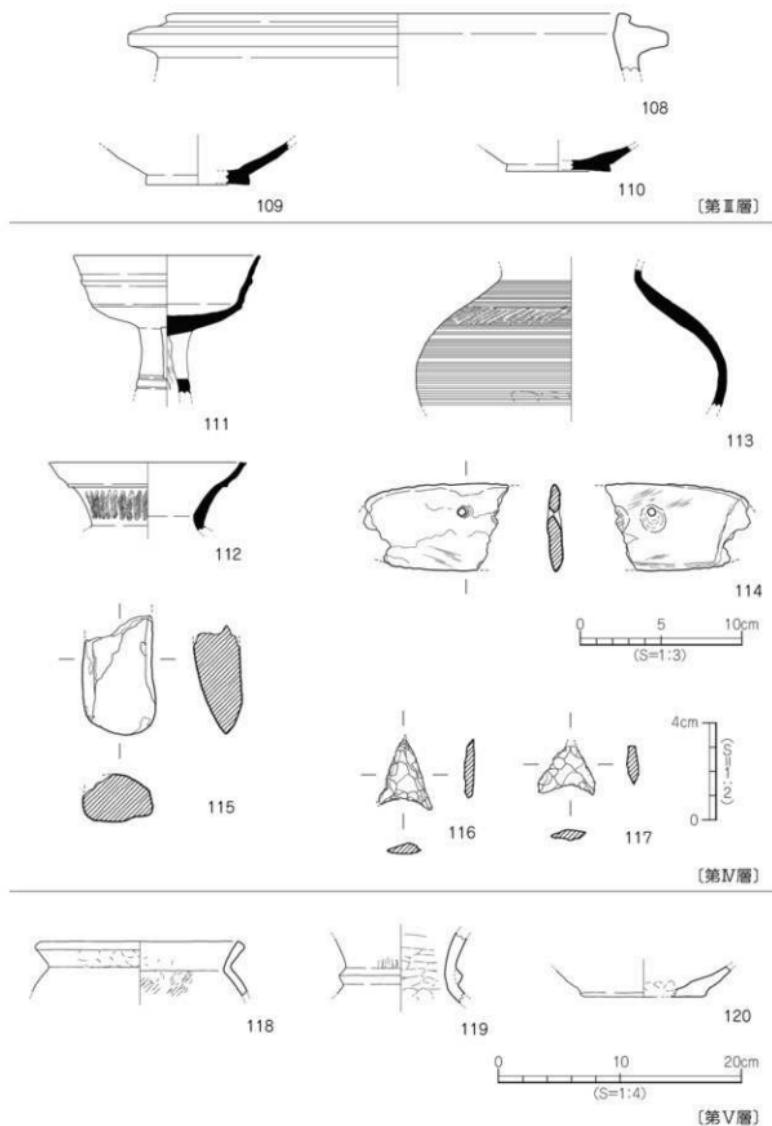
108は土師器の土釜で、断面方形状の太い鉢を貼り付ける。109・110は須恵器の壺。円盤高台状の底部で、底部外面には回転糸切り痕が顕著に残る。平安時代後期。



第45図 SD401 断面図・出土遺物実測図



第46図 SD402 断面図・出土遺物実測図



第47図 4区 第III・IV・V層出土遺物実測図

(2) 第IV層出土遺物（第47図、図版16）

111～113は須恵器。111は無蓋高坏で、坏部に凸線1条が巡り、脚部中位には2条の沈線が巡る。なお、長方形状の透かしが2方向にみられる。6世紀後葉。112は甕。口縁端部は内傾する面をもち、頸部には波状文を施す。5世紀後葉。113は短頸壺。肩部に沈線と刺突列点文を施し、胴部中位には回転カキメ調整がみられる。6世紀後葉。114は石庖丁で、両面から穿孔である。結晶片岩製。115は伐採斧で、基部を欠損する。結晶片岩製。114・115共に破損品。116・117は凹基無茎式石鎌で、石材は116が赤色珪質岩、117はサヌカイトである。

(3) 第V層出土遺物（第47図）

118・119は弥生土器。118は壺形土器で、口縁部は外反し、口縁端部は「コ」の字状に仕上げる。弥生時代後期前半。119は壺形土器で、頸部に凸帶を貼り付ける。弥生時代中期中葉。120は土師器の坏で、円盤高台状の底部をもつ。平安時代後期。

(6)まとめ

4区では、弥生時代から古代までの遺構や遺物を確認した。検出した遺構は、弥生時代の竪穴建物1棟と古墳時代の溝2条、土坑2基のほかに古墳1基である。弥生時代では、第IV層や第V層中より弥生時代中期後葉から後期の土器が出土した。古墳時代は6世紀代と思われる土坑2基と、7世紀代の溝2条が検出されている。さらに、4区からは古墳1基を確認した。1号墳は横穴式石室を埋葬施設に持つ後期古墳であるが、遺存状態が良好でなく、墳形や規模は不明である。石室内からは遺物の出土がなく、正確な造営時期は不明であるが、石室周囲からは6世紀後葉から7世紀中葉の土器片が出土した。このことから、1号墳の造営時期は概ね7世紀中頃と考えられる。遺物では第IV層中からは石庖丁や石鎌、石斧など完形品や破損品が数点出土している。また、古代の遺構は未検出であるが、第III層中より平安時代に時期比定される土師器や須恵器が少量出土している。

【検出遺構】

弥生時代末：竪穴 1棟 (SB401…SB801と同一の建物)

古墳時代末：古墳 1基 (1号墳)

溝 2条 (SD401・402)

土坑 2基 (SK401・402)

第4節 小 結

恵原新張遺跡1次調査では、弥生時代から近現代までの遺構や遺物を確認した。時代別に概要をまとめる（表4）。

1. 弥生時代

弥生時代の遺構は、2・3・4区にて竪穴建物2棟と土坑6基を検出した。2区検出のSB201は推定直径6mの円形竪穴建物で、建物内からは弥生時代中期後葉に時期比定される土器が出土している。4区ではSB401を検出しているが、建物の大半は調査区外に統いており、形態や規模は定かではない

が、後述する8区検出のSB801と同一建物であり、詳細は第4章にて説明する。なお、建物廃絶時期は、弥生時代後葉から末である。このほか、3区からは4基の土坑を検出した。このうち、3基の土坑(SK302・304・308)からは弥生時代中期中葉に時期比定される土器片が出土した。このことから、調査地内における集落の出現期は弥生時代中期中葉である。これら遺構以外には、第V層中より弥生時代前期後葉から末、及び中期中葉から後期前葉に時期比定される土器が出土している。

2. 古墳時代

古墳時代の遺構は、1・3・4区より竪穴建物3棟、掘立柱建物2棟、溝5条、土坑13基のほか古墳1基が検出されている。竪穴建物は1区と3区で検出した。SB101は一辺6mの隅丸方形建物で、建物内からは古墳時代中期後葉、5世紀後葉の須恵器や土師器が数多く出土した。なお、SB101からは大量の炭化物や焼土が検出されており、火災による焼失建物と考えられる。また、3区からは2棟の竪穴建物が検出された。SB301は一辺6.3mの隅丸方形建物で、古墳時代後期中葉に時期比定される土器が出土した。一方、SB301に隣接してSB302が検出された。SB302は建物全体の約8割が検出されており、一辺6.1mの隅丸方形建物である。出土遺物より、6世紀前葉の建物である。SB101とSB301からは、造り付けのカマドを確認した。両者共に建物北壁中央部にカマドが付設されており、SB301のカマド内には土師器壺が押し潰された状態で埋まっていた。おそらく、建物廃絶に伴う祭祀儀礼が執り行われたものと推測される。カマドの検出は当時の厨房施設が知れる貴重な資料であり、さらに建物廃絶の方法を解明するうえでも重要な成果を得ることができた。なお、SB301廃絶後には、掘立柱建物(掘立302)が構築される。明確な時期は不明であるが、概ね6世紀中葉以降に建てられた建物である。掘立302は桁行5間、梁行4間規模の側柱構造の建物である。一方、掘立301は3間×4間以上の総柱構造の建物であり、高床部をもつものである。なお、建物には、柱材が一部残存す

表4 恵原新張遺跡1次調査 検出遺構一覧

時代	1区	2区	3区	4区
弥生時代	前期末		(第V層)	
	中期中葉		土坑:4基	
	中期後葉	(第IV層)	竪穴:1棟 土坑:2基	(第V層)
	末			竪穴:1棟
古墳時代	中期後葉	竪穴:1棟 土坑:3基	(第IV層)	(第IV層)
	後期前葉	溝:1条	(第IV層)	竪穴:1棟 溝:1条
	後期中葉			竪穴:1棟 掘立:2棟
	後期末			(第IV層) 石室:1基 溝:2条
	〔後期〕	土坑:1基		溝:1条 土坑:7基 土坑:2基
	古代			(第III層)
中世		(第II層)		
近現代	土坑:3基	溝:3条 土坑:10基	土坑:1基	

る柱穴が1基認められた。構築時期は定かではないが、柱穴掘り方埋土や検出状況などから、概ね掘立302と同時期の建物と推測される。建物の推移をみると、古墳時代後期中葉を前後して、住居形態が堅穴建物から掘立柱建物へ移行した可能性がある。

このほか、4区からは古墳1基を検出した。1号墳の遺存状態は良好でなく、墳形や規模は不明であるが、横穴式石室を主体部にもつ古墳である。調査では玄室の一部を検出したが、石室内からは遺物の出土はなく正確な構築時期は分からぬが、周辺の存在する盛土と思われる土壤からは古墳時代後期末、7世紀前葉から中葉の須恵器片が出土しており、概ね7世紀中葉頃の築造と推測される。

3. 古代

古代の遺構は未検出であるが、4区検出の第Ⅲ層中からは平安時代後期の土器片が出土した。この中には土師器や須恵器の壺と土師器の羽釜などがあり、これらの遺物は調査地近隣地域に古代集落が存在することを示す資料といえよう。

4. 中世

中世の遺構は古代と同様に検出されなかつたが、2区検出の第Ⅱ層中からは鎌倉時代に時期比定される土師器壺9点がまとめて出土した。明確な掘り方は検出されなかつたが、本来は遺構に伴う可能性の高い遺物である。古代同様、調査地近隣には中世集落の存在が伺われる。

5. 近現代

4区を除き、近現代に構築されたと思われる溝や土坑が検出されている。これらは検出状況から、水田耕作や畠耕作に伴う遺構の可能性がある。

遺構一覧・遺物観察表 - 凡例 -

以下の表は、本調査地検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。

(1) 遺構一覧表

地区欄：グリッド名を記載。

規模欄：()は現存値を示す。

埋土欄：複数の土層がある場合は、以下のように記載している。

例)「褐色灰色土他」

出土遺物欄：遺物名称を略記した。

例) 弥生→弥生土器、土師→土師器、須恵→須恵器、石→石器

(2) 遺物観察表

法量欄 ()：復元推定値

調整欄 土器の各部位名を略記した。

例) 天→天井部、口→口縁部、た→たちあがり、つ→つまみ、頭→頭部、

体→体部、胴→胴部、胴上→胴部上半部、胴下→胴部下半部、底→底部

胎土欄 胎土欄は混和剤を略記した。

例) 石→石英、長→長石、金→金ウニモ、赤→赤色酸化土粒、黒→黒色酸化土粒

()の中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。

例) 石・長(1~4)→「1~4mmの大の石英・長石を含む」である。

焼成欄 焼成欄の略記について

◎→ 良好

表5 穴穴建物一覧

整穴 (SB)	区	地 区	平面形	規 模 長さ×幅×壁高 (m)	埋 土	出土遺物	時 期
101	1	E1・2	隅丸方形	(6.08) × (3.24) × 0.24	褐灰色土 他	土師・須恵	古墳中期後葉
201	2	C6	円形	(4.58) × (1.84) × 0.24	黒褐色土	弥生・石	弥生中期後葉
301	3	B9～C10	隅丸方形	6.36 × 6.21 × 0.26	暗褐色土 他	弥生・土師・須恵・石	古墳後期中葉
302	3	C8・9	隅丸方形	(6.11) × (5.61) × 0.22	暗褐色土 他	弥生・土師・須恵・石	古墳後期前葉
401	4	C18	円形	(4.00) × (2.00) × 0.10	黒褐色土 他	弥生・石	弥生末

表6 振立柱建物一覧

振立 区	地 区	方 位	構 造	規 模	床面積 (nf)	出土遺物	時 期
				桁行長 (m) 梁行長 (m)			
301	3	C7～D8	東西	聳柱 4.27 (4間以上)	390 (3間以上)	20.85	弥生・土師・須恵
302	3	C9～10	東西	聳柱 5.89 (5間)	5.22 (4間)	30.74	弥生・土師・須恵

表7 溝一覧

溝 (SD)	区	地 区	断面形	規 模 長さ×幅×深さ (m)	埋 土	出土遺物	時 期
101	1	D-E2	舟底状	(5.71) × 2.00 × 0.26	灰褐色土 (黄褐色土混入)	土師・須恵	古墳後期前葉
201	2	C4～D5	皿状	(7.61) × 6.00 × 0.20	明褐色土		近現代
302	2	C-D6	皿状	(5.91) × 1.56 × 0.11	灰褐色土 (黄褐色土混入)		近現代
303	2	D5	皿状	(2.38) × 0.64 × 0.15	灰褐色土		近現代
301	3	C-D8	皿状	(8.04) × 0.60 × 0.06	オリーブ黒色土	弥生・土師・須恵	古墳後期前葉
302	3	C10	皿状	(1.00) × 0.29 × 0.03	暗褐色土 (明褐色土混入)		古墳後期
401	4	B-C19	レンズ状	(6.00) × 2.40 × 0.30	オリーブ黒色土	土師・須恵・石	古墳後期
402	4	B-C19	レンズ状	(7.60) × 3.80 × 0.35	灰黃褐色土	土師・須恵・石	古墳後期

表8 土坑一覧

土坑 (SK)	区	地 区	平面形	断面形	規 模 長径×短径×深さ (m)	埋 土	出土遺物	時 期
101	1	E2	稍円形	逆台形状	1.49 × (1.01) × 0.06	褐灰色土 (黄褐色土混入)		古墳中期後葉以前
102	1	E1	円形	逆台形状	1.01 × (0.54) × 0.35	褐灰色土 (黄褐色土混入)		古墳中期後葉以前
103	1	E1・2	稍円形	逆台形状	(2.59) × 2.21 × 0.24	褐灰色土 (黄褐色土混入)	土師・須恵	古墳中期後葉
104	1	D3	稍円形	逆台形状	(1.09) × (1.00) × 0.53	明褐色土		近現代
105	1	D3～E3	稍円形	逆台形状	3.81 × (3.31) × 0.14	灰白色粘質土		近現代
106	1	D2	稍円形	逆台形状	2.94 × (1.84) × 0.14	暗褐色土 (黄褐色土混入)		古墳後期
107	1	D2・3	不整稍円形	逆台形状	(2.10) × 1.21 × 0.25	灰白色粘質土		近現代
201	2	D6	稍円形	逆台形状	0.81 × 0.54 × 0.11	暗青灰褐色土 (黄褐色土混入)		近現代
202	2	D5	稍円形	逆台形状	1.34 × 0.91 × 0.13	暗青灰褐色土 (黄褐色土混入)		近現代
203	2	D5・6	不整稍円形	逆台形状	3.50 × (1.06) × 0.20	暗青灰褐色土 (黄褐色土混入)		近現代
204						欠	青	
205	2	D3	稍円形	逆台形状	1.41 × (1.00) × 0.24	暗灰色土		弥生中期後葉
206	2	D3	稍円形	逆台形状	1.74 × (1.04) × 0.24	暗灰色土		弥生中期後葉
207	2	D5	稍円形	逆台形状	0.84 × 0.61 × 0.09	暗青灰褐色土 (黄褐色土混入)		近現代
208	2	C-D5	稍円形	逆台形状	1.71 × 1.61 × 0.04	暗青灰褐色土 (黄褐色土混入)		近現代
209	2	D4・5	円形	逆台形状	1.24 × (0.61) × 0.18	暗青灰褐色土 (黄褐色土混入)		近現代

土坑一覧								(2)
土坑 (SK)	区	地 区	平面形	断面形	規 模 長径×短径×深さ (m)	埋 土	出土遺物	時 期
210	2	D5	楕円形	逆台形状	(2.81) × (1.69) × 0.31	暗青灰色土 (黄褐色土混入)		近現代
211	2	C6	楕円形	逆台形状	3.91 × (0.98) × 0.36	暗青灰色土 (黄褐色土混入)		近現代
212	2	D4	楕円形	逆台形状	3.21 × (1.21) × 0.12	暗青灰色土 (黄褐色土混入)		近現代
213	2	D4	楕円形	逆台形状	2.21 × (1.31) × 0.08	暗青灰色土 (黄褐色土混入)		近現代
301	3	C10	楕円形	逆台形状	(1.69) × (0.49) × 0.24	暗褐色土 (灰・曉土混入)		古墳後期
302	3	C9	楕円形	逆台形状	2.49 × 1.69 × 0.43	黒褐色土	弥生	弥生中期中葉
303	3	C8	不整椭円形	逆台形状	(1.71) × 0.94 × 0.14	暗褐色土 (黄褐色土混入)		古墳後期
304	3	C9·10	楕円形	逆台形状	3.87 × 2.18 × 0.39	黒褐色土	弥生	弥生中期中葉
305	3	C10	楕円形	逆台形状	(1.49) × 1.41 × 0.21	灰褐色土 (にぶい黄褐色土混入)		古墳後期以前
306					矢 香			
307	3	C8	楕円形	逆台形状	(3.31) × (0.71) × 0.08	黒褐色土		弥生中期中葉
308	3	C8	不整椭円形	逆台形状	2.01 × 1.91 × 0.13	黒褐色土	弥生	弥生中期中葉
309	3	C9·10	楕円形	逆台形状	(1.68) × 0.98 × 0.09	褐色土 (明黄褐色土混入)		古墳後期以前
310	3	B-C10	楕円形	逆台形状	(2.49) × (1.04) × 0.24	暗褐色土		古墳後期
311	3	C9·10	楕円形	逆台形状	3.29 × 0.94 × 0.14	にぶい黄褐色土		近現代
312	3	C·D8	楕円形	逆台形状	(2.19) × (1.64) × 0.08	暗褐色土 (灰・曉土混入)		古墳後期
313	3	C8	楕円形	逆台形状	1.84 × 0.84 × 0.29	暗褐色土		古墳後期
401	4	C18	楕円形	逆台形状	1.40 × 0.80 × 0.36	黒褐色土		古墳後期
402	4	C18	不整椭円形	逆台形状	2.08 × 1.00 × 0.38	黒褐色粘質土		古墳後期

表9 桂穴一覧 (1)

桂穴 (SP)	区	地区	平面形	規 模 長径×短径×深さ (m)	埋 土	出土遺物	時 期
101	1	E1	円形	0.40 × 0.34 × 0.29	褐灰色土 (黄褐色土混入)		古墳
102	1	E1	円形	0.45 × 0.38 × 0.34	褐灰色土 (黄褐色土混入)		古墳
103	1	E1	円形	0.42 × 0.41 × 0.48	褐灰色土 (黄褐色土混入)		古墳
201	2	C6	楕円形	0.22 × 0.18 × 0.17	暗灰色土	弥生後期	
202	2	C6	楕円形	0.18 × 0.14 × 0.17	暗灰色土	弥生後期	
203	2	C6	円形	(0.16) × 0.16 × 0.08	暗灰色土	弥生後期	
204	2	C6	円形	0.22 × 0.21 × 0.07	暗灰色土	弥生後期	
205	2	C6	円形	0.21 × 0.20 × 0.08	暗灰色土	弥生後期	
206	2	D6	円形	0.26 × 0.24 × 0.11	暗灰色土	弥生後期	
207	2	D6	円形	0.26 × 0.25 × 0.16	暗灰色土	弥生後期	
208	2	D6	円形	0.21 × 0.20 × 0.08	暗灰色土	弥生後期	
209	2	D6	円形	0.26 × 0.24 × 0.24	暗灰色土	弥生後期	
210	2	D6	円形	0.26 × 0.25 × 0.10	暗灰色土	弥生後期	
211	2	D5	楕円形	0.22 × 0.10 × 0.08	暗褐色土	弥生後期	
212	2	D5	円形	0.21 × 0.20 × 0.04	灰白色土 (黄褐色土混入)		近現代
213	2	D5	円形	(0.24) × 0.20 × 0.04	灰白色土 (黄褐色土混入)		近現代

遺構一覧

(2)

柱穴一覧				規 模 長径×短径×深さ (m)	埋 土	出土遺物	時 期
柱穴 (SP)	区	地 区	平面形				
214	2	D5	楕円形	0.58 × 0.40 × 0.06	暗灰色土		弥生後期
215					欠番		
216	2	D4	円形	0.31 × 0.31 × 0.02	暗灰色土		弥生後期
217	2	D4	円形	0.32 × 0.31 × 0.03	暗灰色土		弥生後期
218	2	D4	円形	0.18 × 0.14 × 0.02	暗灰色土		弥生後期
219	2	D4	円形	0.14 × 0.14 × 0.03	暗灰色土		弥生後期
220	2	D4	楕円形	0.14 × 0.08 × 0.03	暗灰色土		弥生後期
221	2	D3	円形	0.21 × 0.20 × 0.04	暗灰色土		弥生後期
222	2	D3	楕円形	0.31 × 0.24 × 0.06	暗灰色土		弥生後期
223	2	D5	円形	0.34 × 0.30 × 0.05	灰白色土 (黄褐色土混入)		近現代
224	2	C6	円形	0.32 × 0.31 × 0.17	暗灰色土		弥生後期
301	3	C9	円形	(0.58) × 0.54 × 0.47	暗褐色土 (明黄褐色土混入)	頸甌	古墳
302	3	C9	円形	0.68 × (0.44) × 0.43	暗褐色土 (明黄褐色土混入)	頸甌	古墳
303	3	C8	円形	0.58 × (0.22) × 0.24	暗褐色土 (明黄褐色土混入)	石	古墳
304	3	C9	円形	0.54 × (0.22) × 0.08	灰褐色土		古墳
305	3	C8	楕円形	(0.24) × 0.20 × 0.04	暗褐色土 (明黄褐色土混入)		古墳
306	3	C10	楕円形	0.79 × 0.62 × 0.43	灰褐色土	弥生・土師	古墳
307	3	C10	楕円形	0.74 × 0.66 × 0.48	灰褐色土		古墳
308	3	C10	円形	0.51 × 0.48 × 0.39	灰褐色土	弥生	古墳
309	3	C10	円形	0.32 × (0.18) × 0.24	暗褐色土 (明黄褐色土混入)	土師	古墳
310	3	C10	楕円形	0.74 × 0.69 × 0.32	灰褐色土	弥生	古墳
311	3	C10	楕円形	0.66 × 0.60 × 0.26	灰褐色土	弥生・土師	古墳
312	3	C10	楕円形	0.79 × 0.57 × 0.46	灰褐色土		古墳
313	3	C9	円形	0.41 × 0.41 × 0.32	灰褐色土	弥生	古墳
314	3	C9	円形	0.39 × 0.39 × 0.48	灰褐色土	弥生	古墳
315	3	C9	円形	0.44 × 0.44 × 0.32	灰褐色土	弥生	古墳
316	3	C9	円形	0.54 × 0.54 × 0.31	灰褐色土		古墳
317	3	C8	楕円形	0.74 × 0.71 × 0.29	黑色粘質土		古墳
318	3	C8	楕円形	0.58 × 0.49 × 0.40	黑色粘質土		古墳
319	3	D8	楕円形	0.54 × 0.48 × 0.34	黑色粘質土		古墳
320	3	C7·8	楕円形	0.71 × 0.64 × 0.31	黑色粘質土		古墳
321	3	C7	円形	0.64 × 0.61 × 0.14	黑色粘質土		古墳
322	3	C7	円形	0.52 × 0.44 × 0.18	黑色粘質土		古墳
323	3	D7	不整円形	0.61 × 0.46 × 0.21	黑色粘質土		古墳
324	3	C7	楕円形	0.71 × 0.48 × 0.29	黑色粘質土		古墳
325	3	C7	円形	0.54 × 0.48 × 0.24	灰褐色土	弥生	古墳
326	3	C10	円形	0.58 × 0.56 × 0.26	灰褐色土		古墳

恵原新張遺跡 1 次調査

(3)

柱穴一覧

柱穴 (SP)	区	地 区	平面形	規 模 長径×短径×深さ (m)	埋 土	出土遺物	時 期
327	3	C10	円形	0.34 × 0.32 × 0.21	灰褐色土		古墳
328	3	C10	円形	0.18 × 0.18 × 0.18	灰褐色土		古墳
329	3	C9	円形	0.26 × 0.24 × 0.09	暗褐色土 (明黄褐色土混入)		古墳
330	3	C10	円形	0.27 × 0.25 × 0.06	暗褐色土 (明黄褐色土混入)		古墳
331	3	C9-10	椭円形	0.80 × 0.58 × 0.32	灰褐色土		古墳
332	3	C9	椭円形	0.72 × 0.54 × 0.22	灰褐色土		古墳
333	3	C9	椭円形	0.70 × 0.64 × 0.14	灰褐色土		古墳
334	3	C10	円形	0.30 × 0.30 × 0.18	暗褐色土 (明黄褐色土混入)		古墳
335	3	C9-10	椭円形	0.38 × 0.24 × 0.05	灰褐色土		古墳
336	3	C9	椭円形	0.58 × 0.48 × 0.05	灰褐色土		古墳
337	3	C8	円形	0.22 × 0.22 × 0.15	暗褐色土 (明黄褐色土混入)		古墳
338	3	C8	椭円形	0.24 × 0.22 × 0.22	暗褐色土 (明黄褐色土混入)		古墳
339	3	C8	円形	0.29 × 0.29 × 0.18	暗褐色土 (明黄褐色土混入)		古墳
340	3	C8	円形	0.34 × (0.21) × 0.05	暗褐色土 (明黄褐色土混入)		古墳
341	3	C9	椭円形	(0.56) × 0.42 × 0.04	灰褐色土		古墳
342	3	C9	円形	0.32 × 0.32 × 0.06	灰褐色土		古墳
343	3	C9	椭円形	0.51 × 0.39 × 0.08	暗褐色土 (明黄褐色土混入)		古墳
344	3	C9	円形	0.61 × 0.58 × 0.12	灰褐色土		古墳
345	3	D8	円形	0.32 × 0.30 × 0.11	暗褐色土 (明黄褐色土混入)	須恵	古墳
346	3	C8	円形	0.32 × 0.31 × 0.07	暗褐色土 (明黄褐色土混入)	須恵	古墳
347	3	C8	円形	0.32 × 0.30 × 0.11	暗褐色土 (明黄褐色土混入)	須恵	古墳
348	3	D8	椭円形	0.29 × 0.21 × 0.04	暗褐色土 (明黄褐色土混入)	石	古墳
349	3	B9	椭円形	0.29 × 0.21 × 0.04	暗褐色土 (明黄褐色土混入)	石	古墳
350	3	C9	椭円形	0.54 × 0.46 × 0.21	灰褐色土	弦生・土師	古墳
351	3	C9	椭円形	0.63 × 0.48 × 0.11	灰褐色土		古墳
352	3	C9	円形	0.61 × 0.54 × 0.21	灰褐色土	弦生	古墳
353	3	C9	椭円形	0.54 × 0.44 × 0.08	灰褐色土	弦生	古墳
354	3	C8	円形	0.15 × 0.15 × 0.04	暗褐色土 (明黄褐色土混入)	須恵	古墳
355	3	C8	円形	0.14 × 0.14 × 0.03	暗褐色土 (明黄褐色土混入)	須恵	古墳
356	3	C8	円形	0.39 × 0.39 × 0.29	暗褐色土 (明黄褐色土混入)	須恵	古墳
357	3	C10	円形	0.26 × 0.26 × 0.11	暗褐色土 (明黄褐色土混入)	須恵	古墳
358	3	C9	円形	0.51 × 0.51 × 0.38	暗褐色土 (明黄褐色土混入)	須恵	古墳
401	4	B-C18	椭円形	0.82 × 0.52 × 0.37	黑褐色土		古墳
402	4	C18-19	椭円形	0.54 × (0.26) × 0.30	黑褐色土		古墳

遺物観察表

表 10 SB101 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
1	环盖	口径 123 器高 42	断面三角形状の縁をもち、口縁端部は内傾する凹面をなす。天井部は焼成時の歪みあり。2/3の残存。	②回転ヘラケズリ ③回転ナダ	回転ナダ	灰褐色 灰褐色	密○		11
2	环盖	口径 (11.2) 残高 4.1	口縁端部は内傾する凹面をなす。1/2の残存。	②回転ヘラケズリ ③回転ナダ	回転ナダ	青灰色 青灰色	密○		
3	环盖	口径 (11.7) 残高 34	断面三角形状の鋭い縁をもち、口縁端部は内傾する。小片。	回転ナダ	回転ナダ	灰褐色 灰褐色	密○		
4	环身	口径 (9.8) 器高 5.0	たちあがり端部は内傾し、底部は丸味を持つ。底部外面に火だすきの痕跡あり。もの残存。	②回転ナダ ③回転ヘラケズリ	回転ナダ・ナダ	灰褐色 灰褐色	密○		11
5	环身	口径 (10.6) 残高 5.2	たちあがり端部は内傾する。1/3の残存。	②回転ナダ ③回転ヘラケズリ	回転ナダ	青灰色 青灰色	密○		
6	蓋	口径 28 器高 11.8	高环の蓋。断面三角形状の鋭い縁をもち、口縁端部は内傾する。4/5の残存。	②回転ナダ ③回転ヘラケズリ ④回転ナダ	回転ナダ・ナダ	灰褐色 灰褐色	密○		11
7	蓋	口径 28 器高 12.6	高环の蓋。口縁端部は内傾し、外面に崩れあり。天井部外面に重ね焼きの痕跡あり。完形品。	②回転ナダ ③回転ヘラケズリ ④回転ナダ	⑤円弧叩き ⑥回転ナダ	青灰色 青灰色	密○		11
8	蓋	口径 (10.4) 残高 4.4	直口型。2条の凸縁と凸縁間に波状凹文あり。小片。	回転ナダ	回転ナダ	灰褐色 灰褐色	密○	自然触	11
9	蓋	口径 (16.2) 残高 4.5	広口型。口縁部は肥厚し、頸部外面に回転カキメ調整あり。1/5の残存。	回転ナダ	回転ナダ	灰褐色 灰褐色	密○		
10	蓋	残高 17.5	胴～底部片。1/6の残存。	平行叩き →回転カキメ	円弧叩き・ 同心円叩き	灰褐色 灰褐色	密○		
11	甕	口径 (16.4) 残高 7.4	僅かに内溝する口縁部。口縁端部は丸く仕上げる。1/2の残存。	①マメツ ②ハケメ	マメツ	橙色 橙色	石・長 (1~2) ○		11
12	甕	口径 (20.6) 残高 5.0	外反する口縁部。口縁端部は丸く仕上げる。小片。	マメツ	マメツ	橙色 橙色	石・長 (1) ○		

表 11 SD101 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
13	环盖	口径 (11.9) 残高 4.5	断面三角形状の鋭い縁をもち、口縁端部は内傾する凹面をなす。1/2の残存。	②回転ヘラケズリ ③回転ナダ	回転ナダ	暗灰色 暗灰色	密○		11
14	环盖	口径 (11.8) 残高 3.8	口縁端部は内傾する。小片。	②回転ヘラケズリ ③回転ナダ	回転ナダ	青灰色 青灰色	密○		
15	环盖	口径 (11.4) 残高 3.2	口縁端部は内傾する。小片。	②回転ヘラケズリ ③回転ナダ	回転ナダ	青灰色 青灰色	密○		
16	甕	口径 (19.0) 残高 3.4	広口型。口縁部は上方に肥厚し、面部外間に回転カキメ調整あり。小片。	②回転ナダ ③平行叩き	回転ナダ	青灰色 青灰色	密○		

表 12 SK103 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
17	环身	口径 (10.6) 残高 3.2	たちあがり端部は内傾する。小片。	回転ナダ	回転ナダ	青灰色 青灰色	密○		
18	环身	残高 2.8	小片。	回転ナダ	回転ナダ	灰褐色 灰褐色	密○		

表 13 1 区包含層出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
19	甕	口径 (17.9) 残高 4.1	口縁端部に凹縁文 2 条と頭部に凸縁を付し、凸縁上に押圧を加える。小片。	マメツ	マメツ	橙色 橙色	石・長 (1~3) ○	第Ⅳ層	
20	甕	底径 6.3 残高 3.6	僅かに上げ底。底部完形。	ヨコナダ	ナダ	黄橙色 黄橙色	石・長 (1~5) ○	第Ⅳ層	11
21	环盖	口径 12.4 器高 4.8	扁平な天井部。口縁端部は内傾する。4/5の残存。	②回転ヘラケズリ ③回転ナダ	回転ナダ	暗灰色 暗灰色	密○	第Ⅳ層	11

恵原新張遺跡 1次調査

表 14 1区包含層出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法量			備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)		
22	浅鉢斧	1/2	結晶片岩	10.2	5.6	3.1	320.28 福西刀、破損品 第IV層	11

表 15 SB201 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調(外面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
23	壺	口径 (31.0) 残高 24	口縁部は上方に厚壁し、口縁端面に円錐文2条と、底部に崩れ凸帯文を施付ける。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	褐色 褐色	石・長 (1~2) ○		12
24	壺	口径 (14.8) 残高 7.5	外反口縁。口縁端面はナデ凹む。小片。	①ヨコナデ ②ハラミガキ	ナデ	黄褐色 黄褐色	石・長 (1) ○		12
25	壺	口径 (8.8) 残高 6.4	短く外反する口縁部。1/4の残存。	①ナデ ②ハラミガキ	①ナデ ②ナデ上げ	灰褐色 黒色	石・長 (1~2) ○	黒底	12
26	壺	口径 (17.2) 残高 15	広口壺。口縁部は下外方に垂下し、口縁端面に山形文あり。小片。	ヨコナデ	ナデ	茶褐色 褐色	石・長 (1~3) ○	黒底	12
27	壺	残高 4.3	断面三角形状の凸帶を2条貼付けた。1/4の残存。	ハラミガキ	ナデ	黄褐色 褐色	石・長 (1~3) ○		12
28	高环	底径 (15.3) 残高 7.8	ラップ状に巻く脚部。矢羽根状の透かし(質痕)あり。1/4の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ	黄褐色 黄褐色	石・長 (1~4) ○		12
29	壺	底径 6.2 残高 5.1	くびれをもつ上げ底。2/3の残存。	③ハケ→ナデ ④ハケ(8本/cm)	ハケ→ナデ	灰褐色 暗灰色	石・長 (1~2) ○	黒底	12
30	壺	底径 4.3 残高 3.4	上げ底。底部定形。	ハラミガキ	ナデ	褐色 褐色	石・長 (1~3) ○		12
31	壺	底径 (8.0) 残高 4.5	僅かに上げ底。1/3の残存。	ハケ →ハラミガキ	ナデ	茶褐色 黄褐色	石・長 (1) ○		12

表 16 SB201 出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法量			備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)		
32	石棒	ほぼ定形	結晶片岩	18.5	3.5	2.0	158.35	
33	砥石	一部欠損	砂岩	8.0	7.0	4.5	471.04 破損品	12

表 17 2区包含層出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調(外面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
34	壺	口径 11.6 底径 7.0 器高 27	口縁部の1/3を欠損。底部の切り離しは回転糸切り技法による。	マメツ	マメツ	黄灰色 黄灰色	石・長 (1) ○	第V層	12
35	壺	口径 11.4 底径 6.6 器高 28	口縁部の1/4を欠損。底部には歪みによる削れがあり。底部の切り離しは回転糸切り技法による。	マメツ	マメツ	灰白色 灰白色	石・長 (1) 赤 ○	第VI層	12
36	壺	口径 12.6 底径 6.6 器高 31	ほぼ定形品。底部外間に回転糸切り痕と疵とスノコ痕あり。	ナデ	ナデ	黄灰色 黄灰色	石・長 (1) 赤 ○	第VI層	
37	壺	口径 12.7 底径 7.8 器高 33	定形品。底面外間に回転糸切り痕と疵とスノコ痕あり。	ナデ	ナデ	灰白色 灰白色	石・長 (1~3) 赤 ○	第VI層 黒底	
38	壺	口径 13.2 底径 7.2 器高 32	定形品。口縁部には僅かに歪みあり。底部外間に回転糸切り痕と疵とスノコ痕あり。	マメツ	マメツ	灰白色 灰白色	石・長 (1) ○	第VI層	12
39	壺	口径 13.5 底径 8.0 器高 37	口縁部の1/5を欠損。底部外間に回転糸切り痕と疵とスノコ痕あり。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰白色 灰白色	石・長 (1~5) ○	第VI層	
40	壺	口径 12.6 底径 7.6 器高 34	口縁部1/5を欠損。底部外間に回転糸切り痕と疵とスノコ痕あり。	ヨコナデ	ヨコナデ	黄灰色 黄灰色	石・長 (1~5) ○	第VI層	
41	壺	口径 12.3 底径 7.9 器高 33	口縁部2/3を欠損。底部外間に回転糸切り痕と疵とスノコ痕あり。	ヨコナデ	ヨコナデ	黄灰色 黄灰色	石・長 (1~3) ○	第VI層 黒底	
42	壺	口径 12.2 底径 7.9 器高 32	底部 1/4を欠損。	ヨコナデ	ヨコナデ	黄灰色 黄灰色	石・長 (1~3) ○	第VI層	
43	壺	口径 (12.0) 残高 5.0	広口壺。口縁下に凸線1条と頭部に凸線1条あり。小片。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	青 ○	第V層	13

遺物観察表

2区包含層出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面)(内面)	胎土焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
44	高壙	底径 (113) 脚部に凸縦が通り。柱部に長方形の透かし2ヶ所を有す。1/4の残存。	65	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ○	第Ⅳ層	
45	高壙	底径 (232) 脚部は上下方に拡張し、脚部に4条、脚端面に2条の凸縦が巡る。小片。	29	ヨコナデ	ヨコナデ	灰白色 黒褐色	石・長 (1 ~ 3) ○	第Ⅳ層 黒斑	

表18 2区包含層出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
46	石臘	一部欠損	赤色珪質岩	2.0	1.6	0.1	0.97	円基無系縫 碧玉層	13

表19 2区包含層出土遺物観察表 玉類

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	孔径(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
47	臼玉	完形	滑石	0.6	0.2	0.4	0.182	色調:暗灰色	13

表20 SB301 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面)(内面)	胎土焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
48	环蓋	口径 (138) 丸味のある天井部。口縁端部は内傾する。天井部外縁に綵割があり。小片。 残高 4.1	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ○			
49	环身	口縁 (127) たちあがり端部は内傾し、受部端に沈殿状の凹みが巡る。 残高 4.5	⑤回転ナデ ⑥回転ナデ・ハケアリ	回転ナデ・ナデ	暗灰色 暗灰色	密 ○			13
50	甕	口径 (270) 4.9 口縁部は珠玉状に肥厚する。小片。 残高 4.9	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ○			
51	甕	口口直。底縁部に縫目形の網部。頭~胴上半部外縁に回転カキメ調整あり。1/2の残存。 残高 15.2	⑨回転ナデ ⑩回転ナデ ⑪回転ナデ ⑫棒子目印き	⑩回転ナデ ⑪回転ナデ ⑫棒子目印き	灰白色 灰白色	密 ○			13
52	甕	口径 (184) 内口縁。口縁端部は僅かに内傾する。1/5の残存。 残高 5.2	⑬ヨコナデ ⑭ハケ (5本/cm)	ヨコナデ ⑭ハケ (5本/cm)	茶褐色 茶褐色	石・長 (1 ~ 2) ○			13
53	甕	口径 (196) 内口縁。口縁端部は僅かに内傾する。1/6の残存。	⑮マメツ ⑯ハケ (14本/cm)	マメツ	茶褐色 茶褐色	石・長 (1) ○			
54	甕	口径 (192) 残高 13.0 口縁部に内傾する。2/3の残存。	⑰ヨコナデ ⑱ハケ (4 ~ 5本/cm)	ヨコナデ ⑱ハケ (4 ~ 5本/cm)	茶褐色 茶褐色	石・長 (1 ~ 3) 金 ○			13
55	椀	口径 (130) 体部は内溝し、上位に沈縫1条が巡る。小片。 残高 4.9	ヨコナデ	ヨコナデ	橙色 橙色	石・長 (1) ○			13
56	椀	残高 2.6 底部片。	ヨコナデ	ナデ	橙色 橙色	石・長 (1 ~ 2) ○			
57	瓶	口径 (243) 残高 7.0 口縁部。口縁部は「コ」の字状に仕上げる。小片。	マメツ	マメツ	橙色 橙色	石・長 (1 ~ 3) ○			
58	瓶	残高 7.3 把手部。断面円形。	ナデ	ナデ	橙色 橙色	石・長 (1) ○			13
59	甕	口径 (300) 残高 2.2 連「L」字状口縁。肩部に凸帶を貼付し、凸管上に押圧を加える。小片。	マメツ	マメツ	褐色 褐色	石・長 (1 ~ 3) ○			
60	高壙	底径 (100) 脚部と脚端面に凹縫文。脚柱部に矢羽根模様の透かしあり。小片。 残高 3.1	ナデ	ナデ	茶褐色 茶褐色	石・長 (1 ~ 2) ○			

表21 SB301 出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
61	石瓶丁	1/2	結晶片岩	6.0	7.8	1.0	7193	未成品	14
62	石瓶	2/3	サヌカイト	1.3	1.7	2.0	0.44	破損品	14
63	剥片	ほね完形	サヌカイト	3.3	1.0	0.5	188		14
64	剥片	ほね完形	結晶片岩	4.0	2.9	0.6	585		14

恵原新張遺跡 1次調査

表 22 SB302 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面)	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
65	坏蓋	口径 34.0 器高 55	丸味のある天井部。口縁端部は内側する。	⑤回転ヘラケズリ ⑥回転ナデ	③円弧叩き ④回転ナデ	暗灰色 暗灰色	密 ○		14
66	坏身	口径 33.0 器高 55	たちあがり端部は内傾し、受部端に沈線状の凹みが巡る。ほぼ完形。	⑦回転ナデ ⑧回転ヘラケズリ	回転ナデ・ナデ	灰色 灰色	密 ○		14
67	甕	口径 (17.8) 残高 3.2	内湾口縁。口縁端部は丸い。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	橙色 橙色	石・長 (1~3) ○		
68	甕	口径 11.4 底径 5.3 器高 11.2	口縁部は外反し、底部は平底風に仕上げる。ほぼ完形。	ナデ	ナデ	黄橙色 黄橙色	石・長 (1) ○	黒斑	14
69	鉢	口径 (19.0) 底径 4.8 器高 12.8	口縁端部は尖り気味に丸く仕上げ、底部は平底。1/3の残存。	⑨ヨコナデ ⑩ハラミガキ	ヨコナデ	橙色 橙色	石・長 (1) ○	黒斑	14
70	甕	残高 12.7	胴部片。3/4の残存。	ハケ(4~5本/cm)	ハケ・ナデ	橙色 橙色	石・長 (1) ○	黒斑	14
71	甕	口径 (32.0) 残高 6.0	外反口縁。口縁端面はナデ凹む。頭部に凸骨を貼付け、凸帶上に押圧を加える。小片。	⑪ヨコナデ ⑫ハラミガキ	⑬ヨコナデ ⑭ハラミガキ	茶褐色 茶褐色	石・長 (1~4) ○		14

表 23 SB302 出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残 存	材 質	法 量				備 考	図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
72	石器素材	ほぼ完形	結晶片岩	10.4	33	1.1	72.99		
73	剥片	ほぼ完形	結晶片岩	3.2	52	0.8	17.47		14

表 24 SD301 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面)	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
74	甕	口径 (19.2) 残高 2.9	口縁部中位に棱をもち、口縁端部は僅かに内側する。小片。	マメツ	マメツ	橙色 茶褐色	石・長 (1) ○		
75	坏身	口径 (11.8) 残高 2.7	たちあがりは低く内傾し、端部は尖り氣味に仕上げる。小片。	⑤回転ナデ ⑥回転ヘラケズリ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ○		
76	甕	口径 (31.6) 残高 2.5	外反口縁。口縁端面はナデ凹む。頭部に凸骨を貼付け、凸帶上に布目模あり。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	黄褐色 黄褐色	石・長 (1~4) ○		

表 25 SK302 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面)	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
77	甕	口径 (33.1) 残高 2.2	逆L字状口縁。頭部に凸骨を貼付け、凸帶上に押圧を加える。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	橙色 暗褐色	石・長 (1~2) ○		
78	甕	口径 (33.1) 残高 1.7	貼付口縁。口縁端部に割目、頭部にへら書き沈線文4条あり。小片。	⑪ヨコナデ ⑫ハケ (10本/cm)	ヨコナデ	茶褐色 黄褐色	石・長 (1~3) ○		

表 26 SK304 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面)	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
79	甕	口径 (20.8) 残高 2.2	広口型。口縁部は上下方に抵張し、口縁端面は凹む。小片。	⑩ヨコナデ ⑪ハケ (10本/cm)	ヨコナデ	橙色 橙色	石・長 (1~2) ○		
80	甕	底径 (4.6) 残高 2.4	僅かに上げ底。小片。	ナデ	ナデ	茶褐色 暗褐色	石・長 (1~3) ○	黒斑	

表 27 SK308 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面)	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
81	甕	口径 (23.2) 残高 6.0	広口型。口縁端面はナデ凹む。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	茶褐色 茶褐色	石・長 (1~4) ○		

表 28 3 区柱穴出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面)	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
82	甕	口径 (22.0) 残高 1.6	口縁部は上方に抵張し、口縁端面はナデ凹む。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	橙色 橙色	石・長 (1) ○	SP310	

遺物観察表

3区柱穴出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面)(内面)	胎土焼成	備考	図版
				外面	内面				
83	壺	口径(8.8) 残高30	短く外反する口縁部。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	茶褐色 黄褐色	石・長(1~2) ○	SP314	
84	壺	残高47	頭部片。小片。	ナデ	ナデ	灰黄色 灰褐色	石・長(1~3) ○	SP325	
85	甕	底径(5.4) 残高27	くびれをもつ上げ底。1/3の残存。	ハケ→ナデ	ナデ	褐色 褐色	石・長(1~2) ○	SP32	
86	壺蓋	口径(14.2) 残高3.3	断面三角形状の丸足をもつ横あり。 口縁端部は尖り気味。小片。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 灰色	密 ○	SP301	

表29 3区包含層出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面)(内面)	胎土焼成	備考	図版
				外面	内面				
87	壺	口径(8.4) 底径35 高さ73	短頭壺。口縁部は切く内傾し、縦部は尖り気味で仕上げる。胴上部外側に回転カキメ調整あり。1/2の残存。	⑤回転ナデ ⑥回転ヘラケズリ	回転ナデ	青灰色 灰色	密 ○	第IV層	
88	壺	口径(8.2) 残高27	短頭壺。口縁端部は尖り気味に丸く仕上げる。小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰色	密 ○	第IV層	
89	壺	口径(19.4) 残高5.2	広口壺。口縁下に凸縁1条あり。	③回転ナデ ④叩き→ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ○	第IV層	15
90	甕	口径(27.4) 残高5.7	口縁部は上方に拡張し、縦部は丸い。	③回転ナデ ④叩き→ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ○	第IV層	15
91	甕	底径40 残高64	平底。小片。	③回転ナデ ④叩き→ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ○	第IV層	
92	提瓶	口径5.0 残高5.0	カギ状の把手あり。小片。回転カキメ調整が全面にみられる。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密 ○	第IV層	15
93	埴輪	残高37	朝顔形埴輪。小片。	マメツ	マメツ	橙色 灰白色	石・長(1) ○	第V層	15
94	甕	口径(30.5) 残高121	口縁部。口縁端部は「コ」字状に仕上げる。1/4の残存。	ハケ(10本/cm)	ハケ→ナデ	茶褐色 茶褐色	石・長(1~3) ○	第V層	
95	甕	口径(22.6) 残高22	折曲口壺。口縁端部は丸い。小片。	マメツ	マメツ	茶褐色 橙色	石・長(1~2) ○	第V層 底面	
96	甕	口径(13.4) 残高14.4	短く外反する口縁部。口縁端部は尖り気味に仕上げる。1/3の残存。	③マメツ ④タキ→ハケ	③ナデ ④板ナデ	橙色 黄褐色	石・長(1~3) ○	第V層	
97	壺	残高49	断面三角形状の凸縁1条あり。小片。	ヨコナデ	マメツ	灰黄色 黒褐色	石・長(1~4) ○	第V層	
98	壺	残高43	ヘラ引き沈模文6条と、沈模文の上に刻文2列あり。小片。	ヘラミガキ	ヘラミガキ	橙色 橙色	石・長(1~2) ○	第V層	
99	高杯	口径(23.0) 残高3.4	口縁部は下外方に開き、口縁端部は内方に肥厚する。小片。	⑤ヨコナデ ⑥ハケ →ヘラミガキ	ハケ →ヘラミガキ	茶褐色 茶褐色	石・長(1~5) ○	第V層	15
100	ショッキ	残高4.5	指手部。断面円形。	ナデ	—	橙色	石・長(1) ○	第V層	15

表30 3区包含層出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
101	石鏡	ほぼ完形	サスカイト	2.2	1.5	0.3	1.16	破損品、第V層	

表31 1号墳出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面)(内面)	胎土焼成	備考	図版
				外面	内面				
102	壺蓋	残高22	扁平な天井部。1/4の残存。	回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密 ○		
103	壺身	口径(11.0) 残高3.0	たちがりは内傾し、端部は尖り気味に丸い。小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ○		
104	壺	残高5.5	頭部片。外面に回転カキメ調整あり。小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密 ○		

1号墳出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調(外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
105	縦	残高 5.5	肩部に沈線1条と刺突列点文あり。脚付きで回転カキメ調整あり。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰白色	密 ○	自然釉	15

表32 SD401出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調(外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
106	环身	残高 1.4	底部部。底部外面に縦割あり(ヘラ記号)。	回転ヘラケズリ	円弧叩き	灰白色 灰色	密 ○		

表33 SD402出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調(外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
107	提瓶	口径 7.8 残高 6.2	口縁部分。口縁端部は長方形状に肥厚する。口縁部完形。	マメフ	マメフ	灰白色 灰色	密 ○	自然釉	15

表34 4区包含層出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調(外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
108	土釜	口径 (27.2) 残高 3.5	断面方形状の腰があり。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰褐色 灰褐色	石・長(1~3) ○	第Ⅳ層	15
109	坏	底径 (16.2) 残高 2.7	円盤高台状の底部。底部外面は回転カキメであり。1/4の残存。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密 ○	第Ⅴ層	15
110	坏	底径 (16.4) 残高 1.5	円盤高台状の底部。底部外面は回転カキメであり。1/4の残存。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密 ○	第Ⅴ層	
111	高坏	口径 11.4 残高 8.4	無蓋高坏。环部外面に凸唇1条が並り。柱部中心に沈線があり。長方形状の透かしを2か所看取。1/2の残存。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密 ○	第Ⅳ層	16
112	縫	口径 (11.9) 残高 4.2	口縁部は内締する面をもち、頭部外面に波状文があり。1/6の残存。	回転ナデ	回転ナデ	青灰褐色 青灰褐色	密 ○	第Ⅴ層 自然釉	16
113	壺	残高 8.5	短頸壺。肩部に沈線と刺突列点文あり。体部外面に回転カキメ調整がみられる。2/3の残存。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密 ○	第Ⅴ層	16
118	甕	口径 (16.2) 残高 4.6	外反口縁。口縁端部は「コ」の字状に仕上げる。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	橙色 橙色	石・長(1~2) ○	第Ⅴ層	
119	壺	残高 5.8	断面三角形状の凸唇1条を貼付け。1/5の残存。	ヘラミガキ	ヨコナデ	褐色 灰褐色	石・長(1~2) ○	第Ⅴ層	
120	坏	底径 (7.2) 残高 1.9	円盤高台状の底部。1/5の残存。	マメフ	ヨコナデ	橙色 橙色	石・長(1) ○	第Ⅴ層	

表35 4区包含層出土遺物観察表 石製品

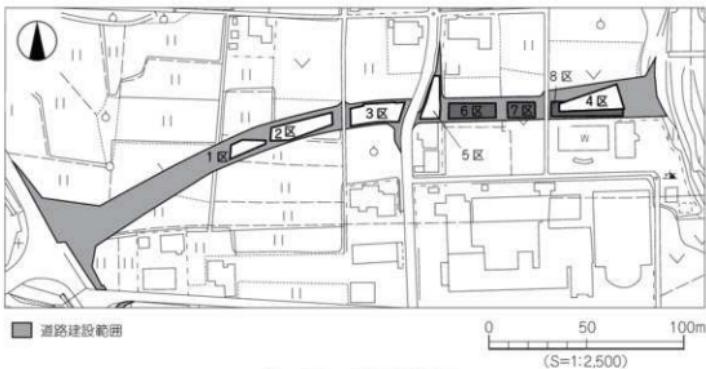
番号	器種	残存	材質	法 量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
114	石盾丁	1/2	結晶片岩	5.4	8.1	0.9	55.91	破損品、第Ⅳ層	16
115	伐採斧	1/2	結晶片岩	7.1	4.3	2.8	132.09	破損品、第Ⅳ層	16
116	石顎	完形	赤色珪質岩	2.8	2.1	0.4	1.78	凹基無茎顎、第Ⅳ層	16
117	石顎	一部欠損	サスカイト	2.0	2.3	0.4	1.67	凹基無茎顎、第Ⅳ層	16

第4章 恵原新張遺跡2次調査

第1節 調査の経緯

恵原新張遺跡2次調査は、2015（平成27）年8月10日より開始し、同年10月9日に終了した。調査対象区は、調査地東側6区から8区の3地区であり、調査面積は826m²である（第48図・表36）。

8月10日より調査地東端、8区の調査を開始する。重機（バックホー0.1m³・3t不整地運搬車）を使用して表土の掘削・運搬を行い、その後、壁面精査と遺構検出作業を実施する。9月7日、遺構検出作業を終了し、竪穴建物や溝、柱穴を検出す。なお、本日より8区の調査と併行して6区の調査を開始する。6区も8区と同様、重機を使用して表土の掘削・運搬を行う。9月9日より、7区の調査に着手する。7区も重機（バックホー0.25m³・3t不整地運搬車）を使用して、表土の掘削と運搬作業を行う。9月9日、8区の遺構掘削作業を終了する。9月10日、ドローンを使用して上空より8区の遺構完掘状況写真を撮影する。その後、8区は遺構の測量や写真撮影等を行う。9月15日、6区の遺構検出作業が終了し、竪穴建物や掘立柱建物のはか溝や土坑、柱穴を検出す。9月18日、本日にて8区の調査を終了する。9月19日より、6区検出の遺構掘削作業を始め、9月28日、6区の調査を終了する。9月29日、7区の遺構検出作業を終え、古墳1基を検出す。10月6日、ドローンを使用して6区と7区の遺構完掘状況写真を撮影する。10月9日、6区と7区の調査を終了し、本日にて、屋外調査を終了する。



第48図 調査区位置図

表36 恵原新張遺跡2次調査一覧

地 区	調査面積 (m ²)	調査期間
6区	368	2015（平成27）年9月7日～同年10月9日
7区	248	2015（平成27）年9月9日～同年10月9日
8区	210	2015（平成27）年8月10日～同年9月18日

第2節 層位

調査地は、調査以前には水田や畠として利用されていた。現況の標高は、70.50～70.80mである。調査地の基本層位は、以下の7層である。なお、2次調査では基本層位の第II層は検出されなかった(第49～51図)。また、8区の土層図については「第3章 恵原新張遺跡1次調査」で掲載しているため、ここでは省略している。

第I層：近現代の農耕に伴う客土〔灰色土(5Y 6/1)〕で、地表下25～30cmまで開発が行われている。

第III層：褐灰色土(10YR 5/1)で8区にみられ、層厚は3～10cmである。本層中からは、平安時代後期に時期比定される土師器片や須恵器片が出土した。

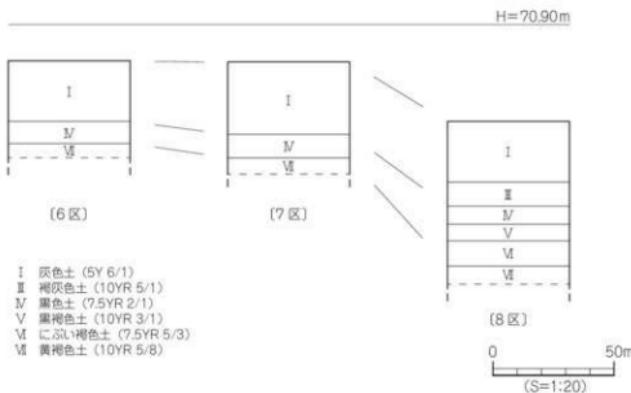
第IV層：黒色土(7.5YR 2/1)で、すべての調査区にみられ、層厚は5～10cmである。本層中からは、弥生土器や土師器、須恵器が出土した。

第V層：黒褐色土(10YR 3/1)で8区にみられ、層厚は5～12cmである。本層中からは、弥生土器や石器が出土した。

第VI層：にぶい褐色土(7.5YR 5/3)で粘性が強く、8区で部分的にみられ、層厚は6～10cmである。本層中から、遺物の出土はない。

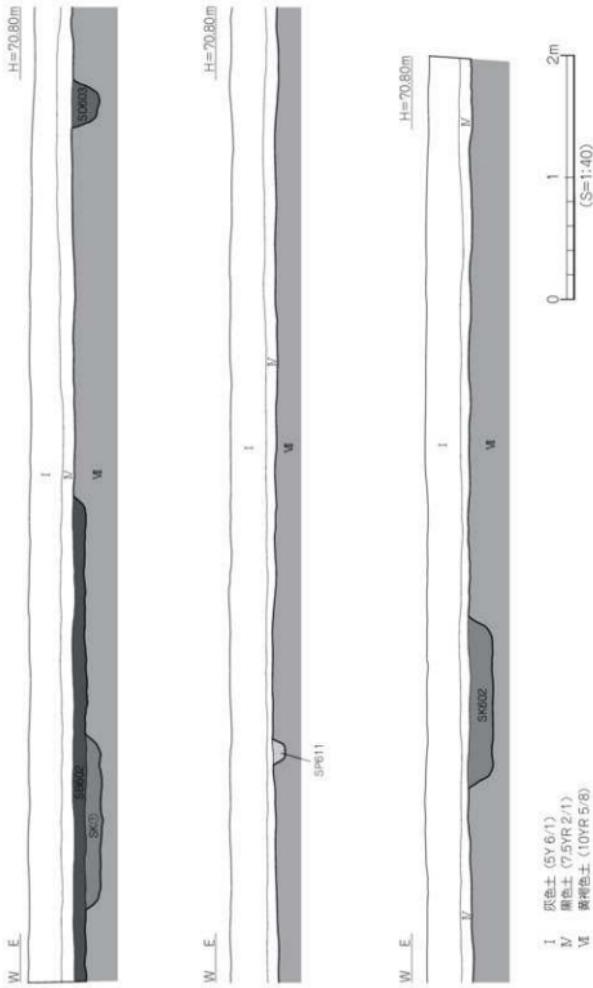
第VII層：黄褐色土(10YR 5/8)で、すべての調査区にみられる。本層上面は、調査における最終遺構検出面である。

検出遺構や出土遺物より、第V層は弥生時代、第IV層は古墳時代、第III層は古代までに堆積した土層と考えられる。

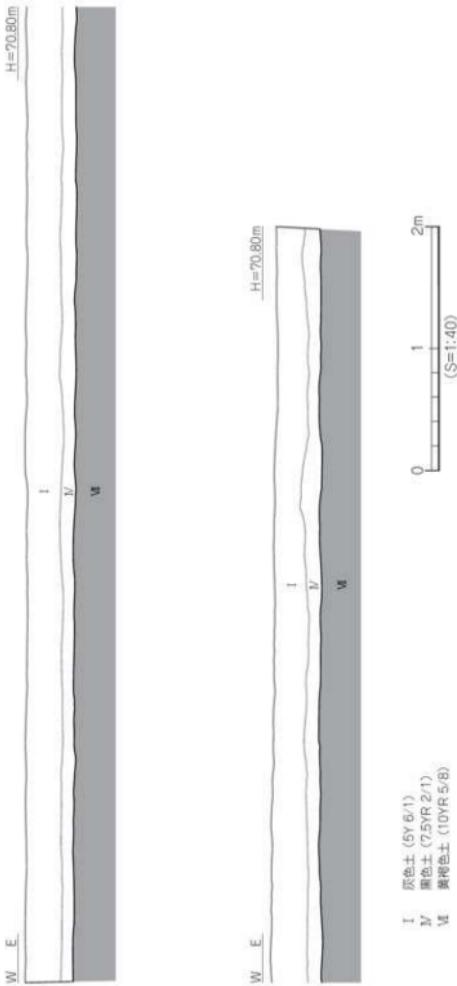


第49図 土層柱状図

層位



第 50 図 6 区北壁土層図



第 51 図 7 区北壁土層図

第3節 遺構と遺物

恵原新張遺跡2次調査では、堅穴建物5棟、掘立柱建物1棟、溝4条、土坑2基、柱穴23基、倒木址2基を検出した。遺物は繩文土器、弥生土器、土師器、須恵器のほか石器（石庖丁・石斧・台石）が出土した。遺物の出土量は、遺物収納箱（22×60×44cm）約3箱分である。ここでは、調査区毎に検出した遺構や遺物を説明する。

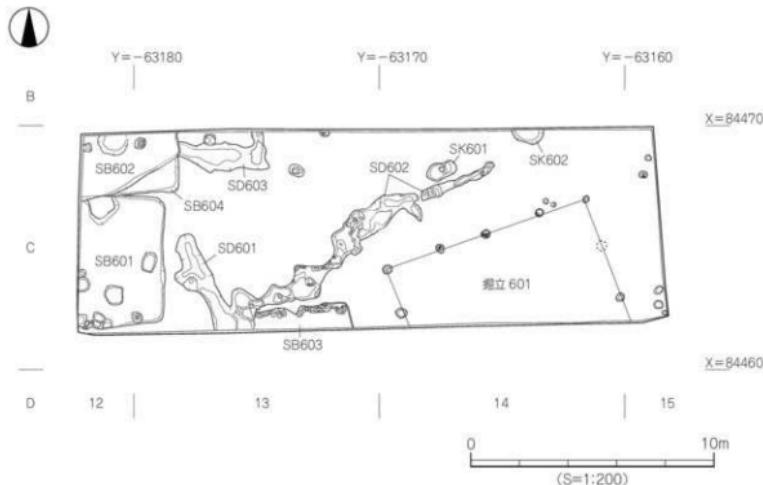
1. 6区の調査

6区では堅穴建物4棟、掘立柱建物1棟、溝3条、土坑2基、柱穴18基を検出した（第52図、図版6）。

(1) 堅穴建物

SB601（第53図、図版6）

6区南東隅C12・13区に位置する堅穴建物址で、北壁中央部はSB602に一部削平されており、建物西側は調査区外に続く。平面形態は隅丸方形をなすものと思われ、規模は南北長5.36m、東西検出長3.50m、壁高は10cmである。建物埋土は暗褐色土（10YR 3/4）を基調とし、部分的に淡黄色土（5Y 8/4）や明黄褐色土（10YR 7/6）がブロック状に混入するものである。建物北壁中央部にて、焼土塊を検出した。建物に付随するカマドと考えられたが現状を留めておらず、形状は不明である。なお、焼土塊の東側には炭化物の広がり（30×80cm）を確認した。建物床面にて大小8基の柱穴を検出したが、主柱穴を特定するには至らなかった。遺物は建物埋土中より弥生土器や土師器、須恵器の破片が散在



第52図 6区遺構配置図

して出土したほか、石器剝片が数点出土した。遺物の出土状況や堆積状況から、SB601は人為的に埋め戻された建物と推測される。

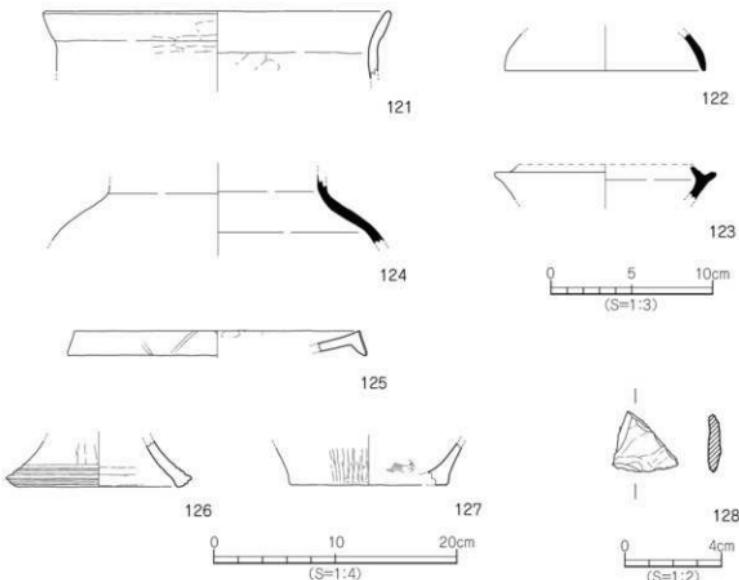
出土遺物（第54図）

121は土師器の鉢。口縁部は僅かに外反し、口縁端部は丸く仕上げる。122～124は須恵器。122は壺蓋で、口縁端部は丸い。123は壺身で、たちあがりは短く内傾する。124は短頸壺の肩部片である。125～127は弥生土器。125は広口壺で、口縁部は下外方に垂下し、口縁端面に山形文を施す。126は高環形土器で、脚裾部と脚端面に凹線文を施す。127は斐形土器の底部。平底で、外面にはタテ方向のヘラミガキを施す。128は剝片で、石材は赤色珪質岩である。

時期：出土した土師器、須恵器の特徴より、SB601の廃棄・埋没時期は古墳時代後期、7世紀初頭から前葉とする。



第53図 SB601測量図



第 54 図 SB601 出土遺物実測図

SB602（第 55 図、図版 6）

6 区西北隅 C12・13 区に位置する堅穴建物で、建物南東部は SB604 と重複し、SB602 が後出す。壁面の土層観察により、SB602 上面は第Ⅳ層が覆う。平面形態は隅丸方形ないし長方形をなすものと思われ、規模は東西検出長 5.00m、南北検出長 2.72m、壁高は 16cm である。建物埋土は黒褐色土（7.5YR 3/2）に黄橙色土（7.5YR 7/8）がブロック状に混入するものである。遺物は建物埋土中より弥生土器や土師器、須恵器の破片が出土したほか、台石が 1 点出土している。

出土遺物（第 56 図、図版 16）

129～137 は須恵器。129～131 は壺身で、たちあがりは短く内傾し、端部は尖る。132・133 は壺で、132 の外面には回転カキメ調整がみられる。134 は甌で、沈線と波状文を施す。135 は高杯の脚部、136・137 は甌である。137 の外面には平行叩き後にハケメ、内面は同心円叩きや円弧叩きを施す。138 は土師器の瓶。把手部で、断面形態は楕円形をなす。139～141 は弥生土器。139・140 は壺形土器で、139 は頸部に凸帯を貼り付け、140 は肩部に列点文を施す。141 は甌形土器の底部で、上げ底をなす。142 は台石で、重量 3.3kg である。結晶片岩製。

時期：出土遺物の特徴より、SB602 の廃棄・埋没時期は古墳時代後期、7 世紀前葉とする。

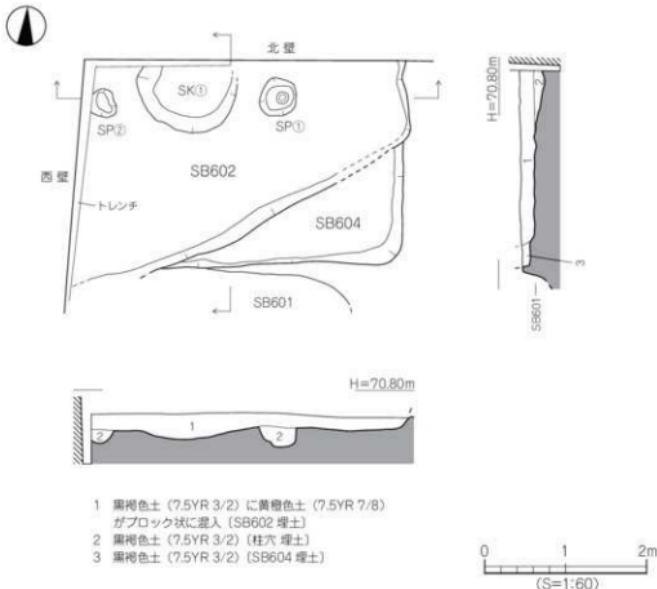
SB604（第55図、図版6）

6区北西部C12・13区に位置する堅穴建物で、SB602と重複し、SB604が先行する。平面形態は隅丸方形または長方形をなすものと思われ、規模は東西検出長2.90m、南北検出長1.50m、壁高は7cmである。建物埋土は、黒褐色土（7.5YR 3/2）単層である。建物床面にて土坑1基と柱穴2基を検出した。SK①は楕円形をなす土坑で、規模は径1.22m、深さ15cmである。断面形態はレンズ状をなし、埋土は黒褐色土（7.5YR 3/2）単層である。土坑内からは遺物の出土はないが、埋土が建物埋土と酷似することからSB604に付随する遺構と考えられる。また、SP①・②は円形柱穴で、規模は径30～40cm、深さ18～21cmであり、柱穴掘り方埋土は黒褐色土（7.5YR 3/2）単層である。柱穴の配置により、2基の柱穴はSB604の主柱穴と考えられる。遺物は埋土中より土師器片や須恵器片が数点出土した。

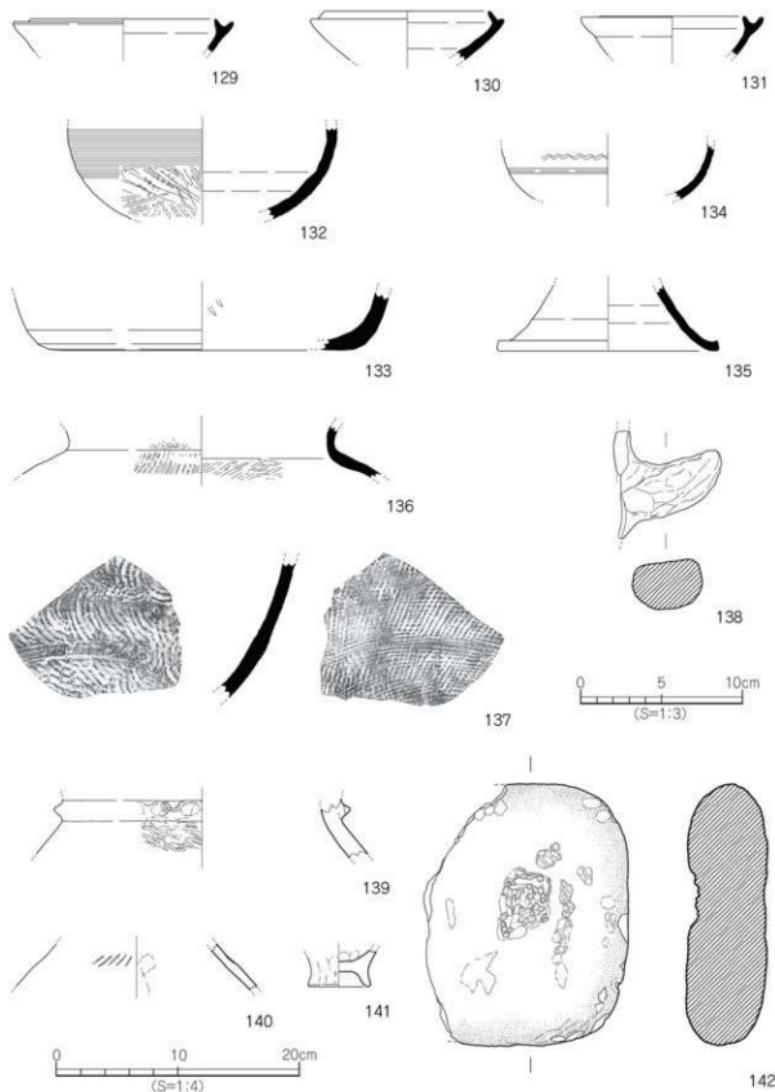
出土遺物（第57図）

143は坏蓋で、口縁端部は内傾する。144は坏身で、たちあがりは内傾し、たちあがり端部は丸い。

時期：出土遺物の特徴より、SB604の廃棄・埋没時期は6世紀後葉とする。



第55図 SB602・604測量図



第 56 図 SB602 出土遺物実測図



第57図 SB604出土遺物実測図

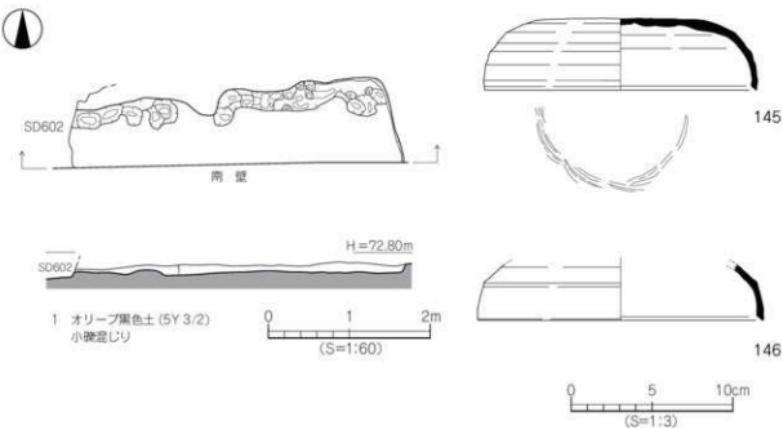
SB603 (第58図、図版7)

6区南壁中央部西寄り C13区に位置する竪穴建物で、建物南側は調査区外へ続く。平面形態は隅丸方形をなすものと思われ、規模は東西長4.05m、南北検出長0.96m、壁高は11cmである。建物埋土は、オリーブ黒色土(5Y 3/2)単層であるが、少量の小礫を含む。内部施設は、周壁溝を検出した。建物北壁に沿って、径3~10cm、深さ2~4cmの大いな小ピットが点在しており、これらは壁体に沿って打ち込まれた杭痕と考えられる。遺物は埋土中より土師器や須恵器の破片が数点出土した。

出土遺物 (図版17)

145・146は須恵器壺蓋。145の天井部は扁平で、口縁端部は内傾斜する。天井部内面には、数多くの円弧叩きが残る。146は小片で、口縁端部は内傾する。

時期：出土遺物の特徴より、SB603の廃棄・埋没時期は古墳時代後期、6世紀中葉とする。



第58図 SB603測量図・出土遺物実測図

(2) 挖立柱建物

掘立 601 (第 59 図)

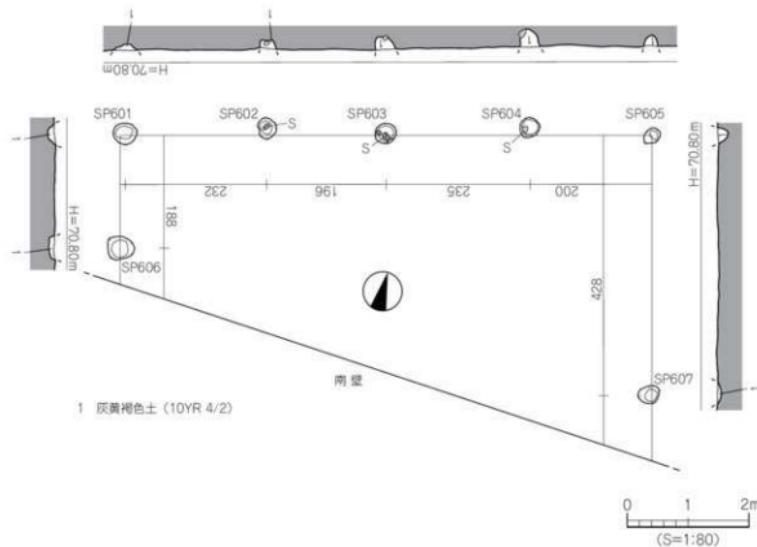
6 区南東部 C14・15 区に位置する建物址で、東西 4 間、南北 2 間以上を検出した。側柱構造の建物址で、建物方位は真北である。建物規模は桁行長 8.63m、梁行検出長 5.32m である。建物を構成する柱穴の平面形態は円形または梢円形をなし、規模は径 20 ~ 40cm、深さは 6 ~ 20cm である。柱穴掘り方埋土は、灰黄褐色土 (10YR 4/2) 単層である。柱痕は検出されなかったが、3 基の柱穴基底面付近には径 5 ~ 10cm 大の扁平な石が敷かれていた。各柱穴からは、土器の出土は見られなかった。

時期：時期特定しうる遺物の出土はないが、柱穴掘り方埋土が 3 区検出の掘立 302 と酷似することから、概ね 6 世紀中葉以降の建物と考えられる。

(3) 溝

SD603 (第 60 図)

6 区西北部 C13 区で検出した東西方向の溝で、溝西側は SB602 に削平されている。壁面の土層観察により、溝上面は第Ⅳ 層が覆う。規模は検出長 3.75m、最大幅 1.03m、深さ 28cm である。断面形態はレンズ状をなし、埋土は黒褐色土 (7.5YR 3/2) に黄橙色土 (7.5YR 7/8) がブロック状に混入するものである。溝基底面には凹凸があり、僅かに北側から南側に向けて傾斜をなす (比高差 3cm)。溝内からは、弥生土器片が数点出土した。



第 59 図 挖立 601 測量図

出土遺物

147～150は弥生土器。147は壺形土器の肩部片で、列点文を施す。148は高壺形土器。壺部に凹線文3条を施す。外面はハケメ調整後にヘラミガキ、内面はヨコ方向のヘラミガキを施す。149・150は甌形土器。149は胴部片で、外面はハケメ調整後にヘラミガキ、内面はナナメ方向のヘラミガキを施す。150は底部片で平底をなし、外面にはタテ方向の丁寧なヘラミガキを施す。

時期：出土遺物の特徴より、弥生時代中期後葉とする。

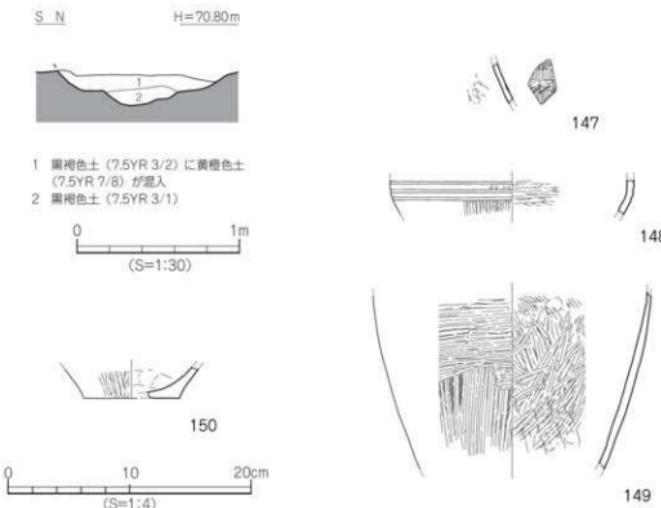
SD601（第61図）

6区南西隅C13区で検出した南北方向の溝で、溝南側はSD602と合流し、南端は調査区外に続く。壁面の土層観察により、溝上面は第IV層が覆う。規模は検出長4.37m、最大幅1.30m、深さ18cmである。断面形態はレンズ状をなし、埋土は黒褐色土（7.5YR 3/2）に黄褐色土（7.5YR 7/8）がブロック状に混入するものである。溝基底面には凹凸があり、僅かに北側から南側に向けて傾斜をなす（比高差3cm）。溝内からは弥生土器片が数点出土したほか、石庵丁の未成品1点が出土した。

出土遺物（図版17）

151は結晶片岩製の石庵丁で、穿孔段階の未成品である。重量96.19g。

時期：時期特定しうる遺物の出土はないが、検出層位とSD603の埋土が酷似することから、概ね弥生時代中期後葉頃と考えられる。



SD602 (第61図)

6区中央部C13・14区で検出した北東-南西方向の溝で、溝南側はSD601と合流する。規模は検出長1235m、最大幅12.5m、深さ12cmである。断面形態はレンズ状をなし、埋土はSD601と同様の黒褐色土(7.5YR 3/2)に黄橙色土(7.5YR 7/8)がブロック状に混入するものである。溝基底面には凹凸があり、北東から南西に向けて傾斜をなす(比高差5cm)。溝内からは、遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが、埋土がSD601と酷似することから、概ね弥生時代中期後葉頃の溝と考えられる。

(4) 土坑

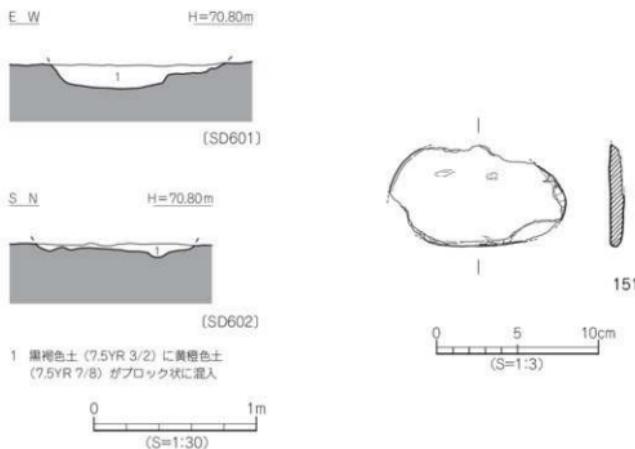
SK601 (第62図)

6区中央部北寄りC14区で検出した土坑で、平面形態は不整の楕円形をなし、規模は長径12.4m、短径0.72m、深さ14cmである。断面形態は逆台形状をなし、埋土は灰黄褐色土(10YR 4/2)単層である。土坑基底面にて、柱穴1基(SP①)を検出した。平面形態は円形をなし、規模は径20cm、深さ14cmである。柱穴掘り方埋土は、暗褐色土(10YR 3/4)単層であり、SK601に先行する時期の遺構と推測される。遺物は土坑内から、弥生土器片が数点出土した。そのうち、実測しうる遺物を1点掲載した。

出土遺物

152は弥生土器の甕形土器。底部片で、上げ底をなす。

時期：出土遺物の特徴より、弥生時代中期中葉とする。



第61図 SD601・602断面図・出土遺物実測図

SK602 (第 63 図)

6 区北東部 C14 区で検出した土坑で、土坑北半部は調査区外に続く。壁面の土層観察により、土坑上面は第IV層が覆う。平面形態は楕円形をなすものと思われ、規模は東西検出長 1.36 m、南北検出長 0.66 m、深さは 24cm である。断面形態は逆台形状をなし、埋土はオリーブ黒色土 (5Y 3/2) に暗褐色土 (10YR 3/4) がブロック状に混入するものである。土坑内からは、遺物の出土はない。

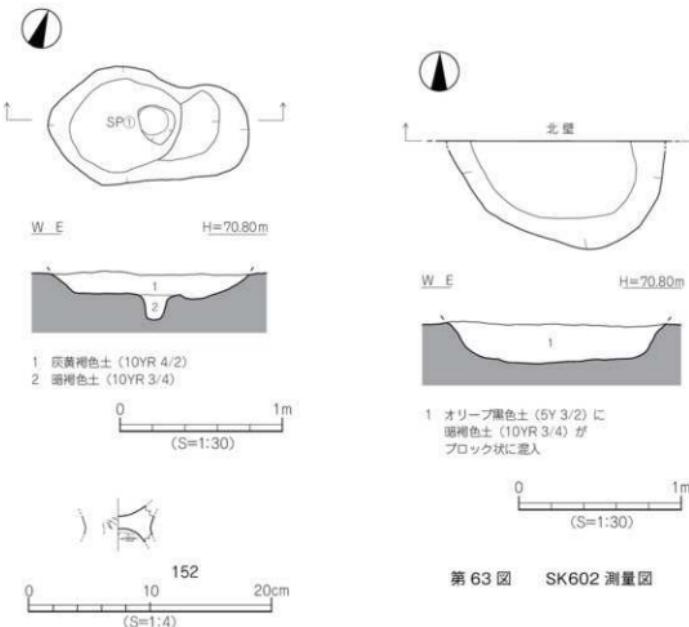
時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが、検出層位と埋土が SB601 と類似することから、概ね古墳時代後期の土坑と考えられる。

(5) その他の遺構と遺物

6 区では、18 基の柱穴（掘立柱建物柱穴 7 基を含む）を検出した。また、第IV層中からは弥生土器や須恵器、土師器が出土した。

1) 柱 穴

検出した 18 基の柱穴のうち、掘立柱建物を除く柱穴の掘り方埋土は、以下の 4 種類に分類される。なお、各柱穴からは、遺物の出土はない。



第 62 図 SK601 測量図・出土遺物実測図

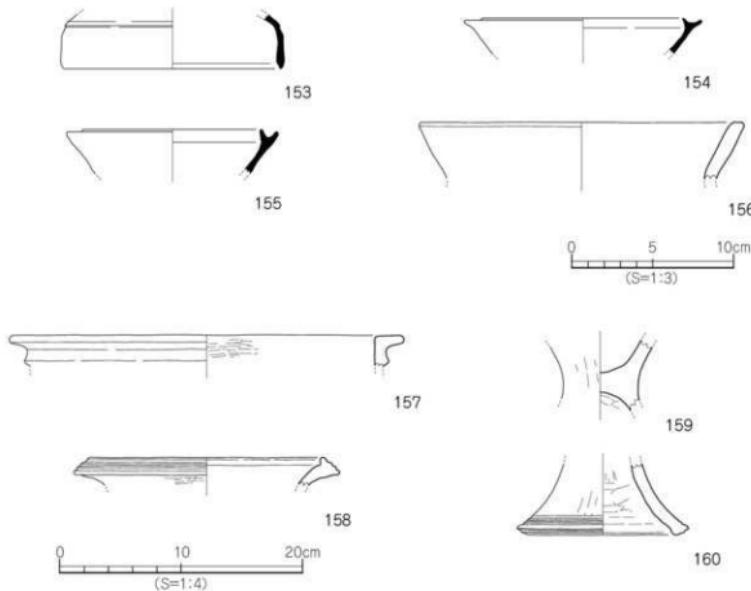
- ① 暗褐色土 (10YR 3/4) : 3基
- ② 黒褐色土 (7.5YR 3/2) に黄橙色土 (7.5YR 7/8) がブロック状に混入: 5基
- ③ オリーブ黒色土 (5Y 3/2) : 1基
- ④ 灰黄褐色土 (10YR 4/2) : 2基

2) 第IV層出土遺物 (第64図、図版17)

153～155は須頭器。153は壺蓋で、断面三角形状の棱をもち、口縁端部は内傾する。5世紀後葉。154・155は壺身で、たちあがりは短く内傾し、端部は尖る。7世紀前葉。156は土師器の甕。口縁部は内湾し、口縁端部は内傾する。6世紀。157～160は弥生土器。157は甕形土器で、胸部に凸帯を貼り付ける。弥生時代中期中葉。158は広口壺で、口縁端面に凹線文3条を施す。弥生時代中期後葉。159は甕形土器の底部で、上げ底をなす。弥生時代中期後葉。160は高壺形土器。脚部片で、脚裾部と脚端面に凹線文を施す。弥生時代中期後葉。

(6)まとめ

6区では、弥生時代から古墳時代までの遺構や遺物を確認した。検出した遺構は竪穴建物4棟、掘



第64図 6区 第IV層出土遺物実測図

立柱建物1棟、溝3条、土坑2基である。弥生時代は溝3条と土坑1基、古墳時代は堅穴建物4棟と掘立柱建物1棟、及び土坑1基を検出している。このうち、4棟の堅穴建物は6世紀中葉から7世紀前葉に廃棄・埋没されている。なお、掘立柱建物は、建物を構成する柱穴掘り方埋土が3区検出の掘立302と酷似することから、6世紀中葉以降に構築された建物と思われる。遺物は第IV層中より、弥生時代中期中葉から後期、古墳時代中期後葉から後期に時期比定される土器が出土している。

【検出遺構】

- 弥生時代中期中葉：土坑 1基 (SK601)
- 中期後葉：溝 3条 (SD601～603)
- 古墳時代後期中葉：堅穴 1棟 (SB603)
- 掘立 1棟 (掘立601)
- 後期後葉：堅穴 1棟 (SB604)
- 後期末：堅穴 2棟 (SB601・602)
- (後期)：土坑 1基 (SK602)

2. 7区の調査

7区では、古墳1基を検出した。なお、1次調査4区からは古墳1基(1号墳と呼称)を検出しており、本調査検出の古墳は2号墳として取り扱う(第65図、図版7)。

(1) 古 墳

2号墳(第66図、図版7)

7区北東部C16・17区に位置する古墳であるが、墳丘は遺存しておらず、石室の一部を検出した。ここでは、調査工程をふまえて説明する。まず、重機の使用による表土掘削時、7区北東部にて径10～30cm大の礫がまとまって出土したことから掘削を中断し、作業員による手作業にて調査を進めた。東西2.5m、南北4mの範囲に褐色土の広がりが認められ、その後、その内部にて径3～5cm大の石組を検出した。そこで、検出状況の図面を作成後、上部の石を除去しながら作業を進めた。その結果、東西及び南北方向に並ぶ石列を検出したことから、石室と判断した。

石室の規模は南北検出長2.90m、東西検出長1.15mである。石室中央部から南側にかけては近現代の造成等により床面と側壁の一部は遺存していないかった。また、南東部には石室に使用された石の抜き取り痕を確認した。形状より、南側に開口する横穴式石室と考えられ、北側床面には径3～5cm大の小礫が敷き詰められている。なお、石室内からは、遺物の出土は見られなかった。墓坑は長方形状に掘削されており、規模は東西長2.55m、南北長4.0m、深さ25cmである。埋土は、褐色土(7.5YR 4/3)に橙色土(7.5YR 6/6)や暗褐色土(10YR 3/4)がブロック状に混入するものである。墓坑からは、遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが、石室の形状や1号墳の検出等より、概ね古墳時代末、7世紀中葉頃の造営と考えられる。

(2) その他の遺構と遺物

7区では、第IV層中より弥生土器や土師器、須恵器のほか石器が数点出土した。

第IV層出土遺物（第67図、図版17）

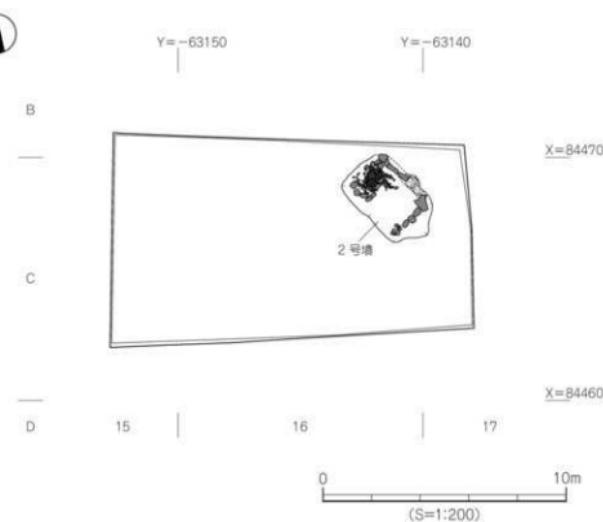
161・162は弥生土器の甕形土器。161は上げ底、162は僅かに上げ底の底部である。弥生時代中期後葉。163・164は須恵器。163は蓋で、焼成時における重ね焼きの一部が付着する。164は短頸壺。6世紀後葉。165は土師器の甕で、内面には板状工具による強いナデを施す。6世紀。166は柱状片刃石斧で、刃部と基部を欠損する。結晶片岩製。

(3)まとめ

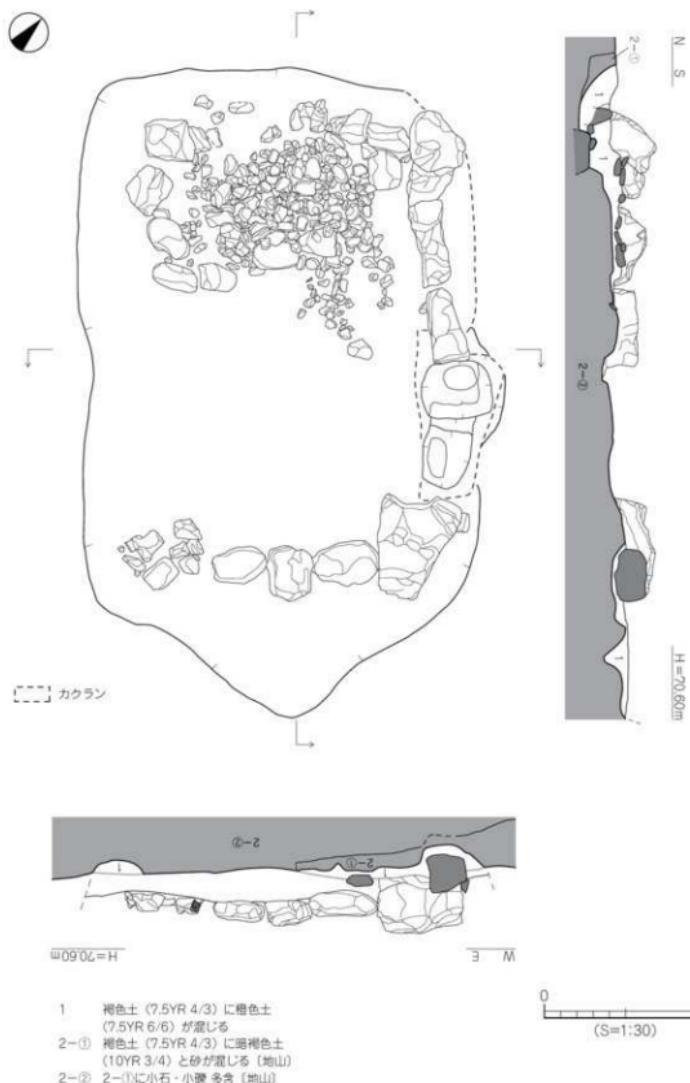
7区では、弥生時代から古墳時代の遺構、遺物を検出した。弥生時代の遺構は未検出であるが、第IV層中からは弥生時代中期後葉から後期の土器片が少量出土したほか、石斧をはじめ石器が数点出土した。古墳時代では、石室1基を検出した。2号墳は横穴式石室を埋葬施設にもつ古墳であるが、盛土は遺存しておらず、墳形や規模等は不明である。石室床面には小礫が敷き詰められていたが、石室内から遺物の出土はなかった。時期特定は困難であるが、1号墳と同様、古墳時代後期末、7世紀中葉頃の造営と推測される。

【検出遺構】

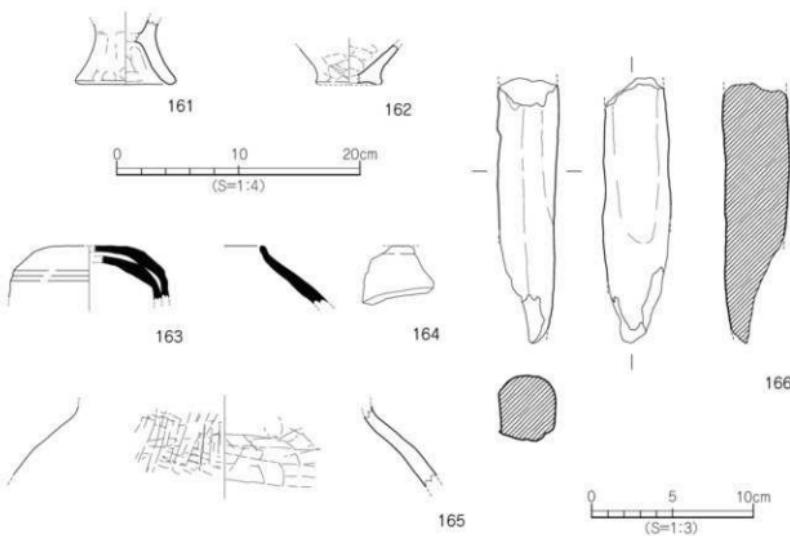
古墳時代後期末：古墳 1基（2号墳）



第65図 7区遺構配置図



第 66 図 2 号填測量図



第67図 7区 第IV層出土遺物実測図

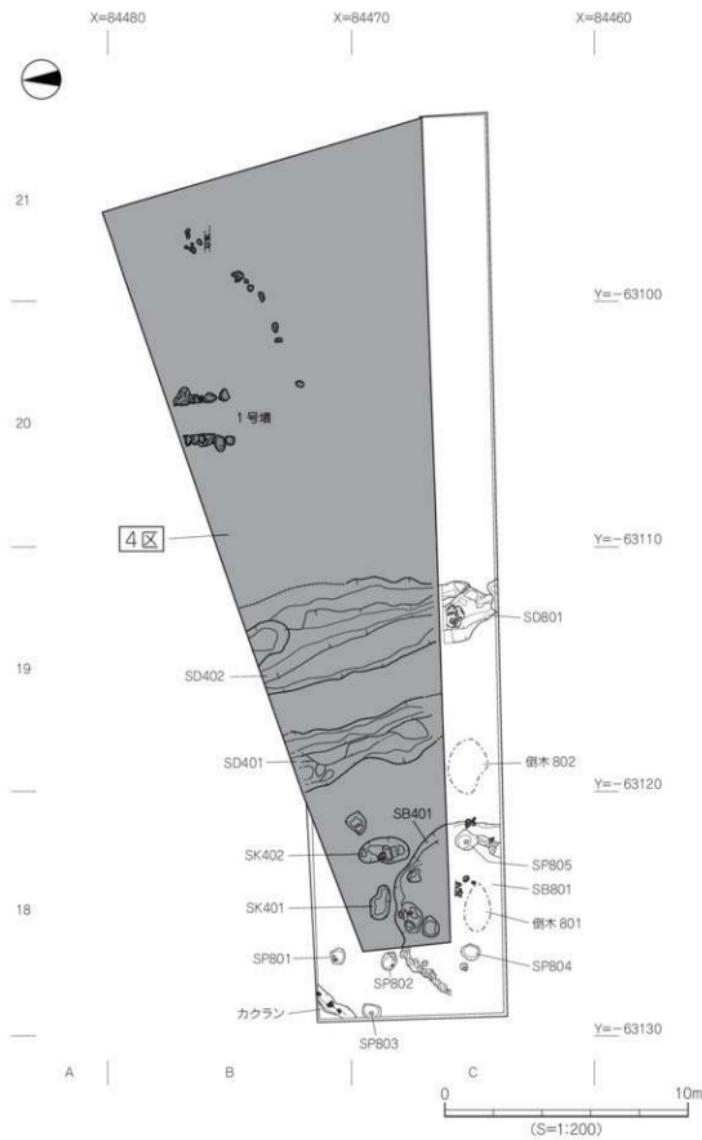
3. 8区の調査

8区では竪穴建物1棟、溝1条、柱穴5基と倒木址2基を検出した（第68図、図版8）。

(1) 竪穴建物

SB801（第69図、図版8）

8区西端C18区に位置する竪穴建物で、4区で検出したSB401と同一の建物である。建物西側と東側は、2基の柱穴（SP804・805）により一部削平されており、建物南側は調査区外へ続く。壁面の土層観察により、建物上面は第V層が覆う。平面形態は円形をなすものと思われ、規模は径7.3m以上、壁高は18cmである。建物埋土は褐色土（7.5YR 4/4）単層である。内部施設は、柱穴と周壁溝を検出した。検出した4基の柱穴（SP①～④）の平面形態は円形または梢円形をなし、規模は径25～40cm、深さ20～25cmである。柱穴掘り方埋土は、すべて褐色土（7.5YR 4/4）単層であるが、主柱穴を特定するには至らなかった。このほか、建物北西部と南東部には壁体に沿って周壁溝を検出した。径5～10cm、深さ3～10cmの大いな小ビットが点在しており、壁体沿いに打ち込まれた杭の痕跡と考えられる。なお、建物南東部には壁体より内側に周壁溝の一部を検出しており、建て替えの施された建物と推測される。建物床面中央部には、倒木址（倒木址801）と思われる円形状の凹みが認められた。凹みには、褐色土（7.5YR 4/4）と黄褐色土（10YR 5/8）が互層堆積をなす。遺物は建物埋土中より弥生土器の小片が数点と径3～10cmの大いな河原石が散在して出土したが、固化しうる土器はない。ただし、SB401



第68図 8区遺構配置図

と同様、外面に叩き痕の残る破片が数点みられた。

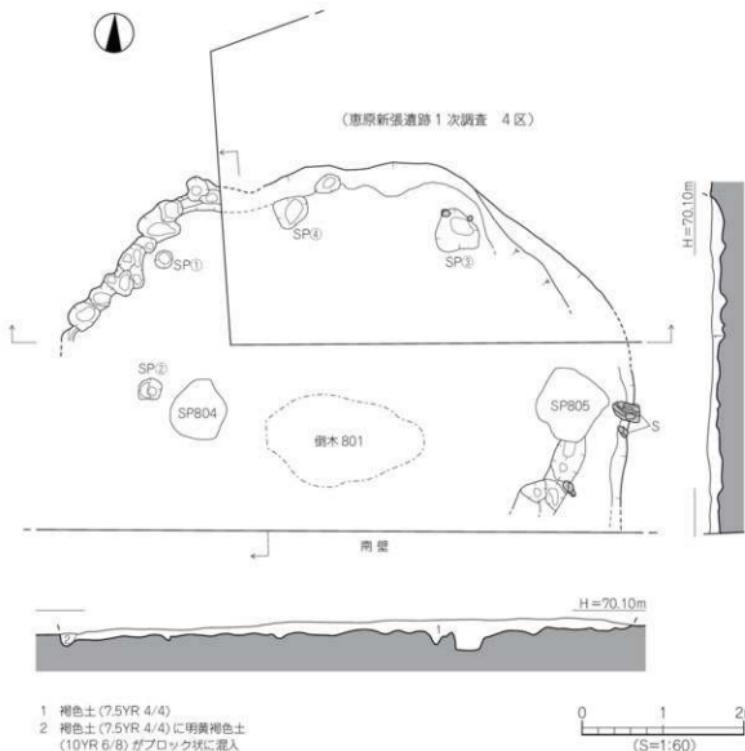
時期：遺物が僅少で時期特定は困難であるが、叩きの残る破片が出土したこと、建物の平面形状などから、SB801 の廃棄・埋没時期は弥生時代末と考えられる。

(2) 溝

SD801 (第68図)

8区中央部C19区で検出した南北方向の溝で、4区検出のSD402と同一の溝である。規模は検出長2.30m、最大幅2.40m、深さは28cmである。断面形態は「U」字状をなし、埋土は、にぶい褐色土(7.5YR 5/4) 単層である。溝からは土器類や須恵器の小片が少量出土したが、図化しうるものはない。

時期：出土遺物が僅少であるが、1次調査の結果より、古墳時代後期、6世紀後葉とする。



第69図 SB801測量図

(3) その他の遺構と遺物

8区では、柱穴5基と倒木址2基を検出した。このほか、第Ⅲ層からは古代、第V層中からは縄文時代や弥生時代の遺物が出土した。

1) 柱 穴

8区からは、5基の柱穴を検出した。柱穴掘り方埋土で分類すると、以下の3種類となる。

- ①類－褐灰色土（10YR 5/1）：3基
- ②類－にぶい褐色土（7.5YR 5/4）：1基
- ③類－灰褐色土（7.5YR 4/2）：1基

2) 倒木址

8区では、2基の倒木址を検出した。倒木址801はSB801床面にて検出され、倒木址802は調査区南西部にて検出された。褐色土（7.5YR 4/4）を基調とし、明黄褐色土（10YR 7/6）や黄褐色土（10YR 5/8）が混在している。なお、倒壊方向は両者共に東から西である。

3) 8区包含層出土遺物

① 第Ⅲ層出土遺物（第70図、図版17）

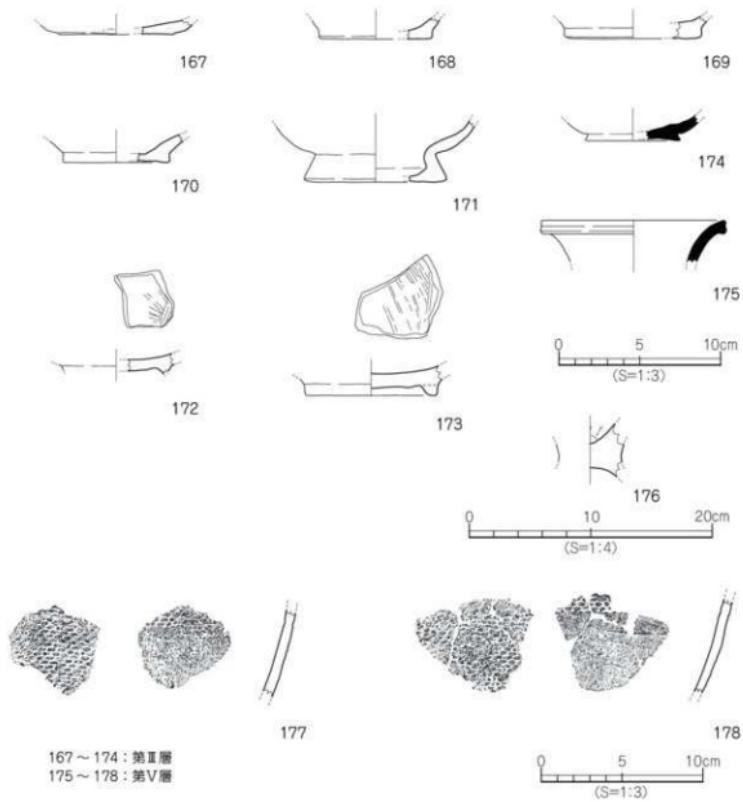
167～173は土師器。167～171は壺で、167は平底、168～171は円盤高台状の底部をもつ。167の底部外面には回転糸切り痕、169の外面には回転ヘラ切り痕が残る。なお、168・169の胎土中には赤色酸化土粒が少量含まれる。172・173は内黒釉で、底部内面には暗文を施す。平安時代後期。174は須恵器の壺で、円盤高台状の底部をもつ。底部外面には、回転糸切り痕が残る。平安時代後期。

② 第V層出土遺物（第70図、図版18）

175は須恵器の広口壺で、口縁端部には凹線が巡る。古墳時代後期。176は弥生土器。壺形土器の底部で、上げ底をなす。弥生時代中期中葉。177・178は縄文土器。早期の深鉢で、内外面に押型文を施す。

(4) まとめ

8区では、縄文時代から古代までの遺構や遺物を確認した。検出した遺構は、弥生時代の竪穴建物1棟と古墳時代の溝1条である。SB801は推定直径7.3m以上の円形竪穴建物で、1次調査検出のSB401と同一建物である。出土遺物より、SB801は弥生時代末に埋没した建物と考えられる。また、SD801は1次調査検出のSD402（7世紀前葉）と同一の溝である。縄文時代では、第V層中より早期の土器片2点が出土した。5×5cm大の破片で、内外面には押型文が施されている。また、第Ⅲ層中からは古代、平安時代後期に時期比定される土師器や須恵器などの供膳具が、破片ではあるが比較的多く出土している。



第 70 図 8 区 第 III・V 層出土遺物実測図

【検出遺構】

弥生時代末 : 堪穴 1 棟 (SB801) ……SB401 と同一建物

古墳時代後期末 : 溝 1 条 (SD801) ……SD402 と同一溝

第 4 節 小 結

恵原新張遺跡 2 次調査では、縄文時代から古代までの遺構や遺物を確認した。ここでは、時代別のまとめを行う。

(1) 繩文時代

縩文時代の遺構は未検出であるが、8区検出の第V層中より早期に時期比定される土器片が2点出土している（第70図177・178）。調査地周辺では、谷田II遺跡から該期の土器が出土しており、縩文時代早期の集落が存在したことを示す重要な資料といえよう。

(2) 弥生時代

弥生時代の遺構は竪穴建物1棟と溝3条、土坑1基を確認した。SB801は円形竪穴建物で、1次調査4区で検出したSB401と同一の建物である。一部のみの検出であるが、推定直径7.3m以上の比較的大型の竪穴建物である。建物内からは弥生土器の小破片が少量出土したが、時期特定しうる遺物はない。ただし、数点ではあるが、外面に粗目の「叩き」を施す破片が含まれており、その特徴からSB801の廃棄・埋没時期は弥生時代末頃と考えられる。また、6区からは3条の溝が検出されている。これらの溝は形状が不規則であり、用途は不明であるが、水流は認められない。出土遺物より、弥生時代中期後葉の溝と考えられる。さらに、6区からは土坑1基を検出した。土坑内からは、弥生時代中期中葉に時期比定される土器片が数点出土している。このほかには、8区検出の第V層中より弥生時代中期中葉、6区と7区検出の第IV層中からは弥生時代中期中葉から後葉の土器片が少量出土した。1次調査の1区から3区において、弥生時代中期中葉から後葉の遺構が数多く検出されており、2次調査の結果をふまえると、調査地内全域には弥生時代中・後期集落の存在が明らかとなった。

(3) 古墳時代

古墳時代の遺構は竪穴建物4棟、掘立柱建物1棟、溝1条、土坑1基のほか古墳1基を検出した。4棟の竪穴建物は、すべて6区で検出された。建物の推移をみると古墳時代後期中葉、6世紀中頃にはSB603、後期後葉、6世紀後葉にはSB604、さらに7世紀初頭にはSB601、7世紀前葉にはSB602が廃棄・埋没している。いずれの建物も平面形態は隅丸方形または長方形をなすものと思われ、SB601には造り付けのカマドが付設されていた。掘立柱建物（掘立601）は4間×2間以上の建物で、1次調査検出の掘立301・302と建物方位を等しくする。時期特定しうる遺物の出土はないが、柱穴掘り方埋土が掘立302と酷似することなどから、概ね6世紀中葉以降に構築された建物と推測される。このほか、6区からは古墳時代後期の土坑SK602のほか、8区では溝SD801などが検出されている。出土品の中には、7区検出の第IV層中より重ね焼きを行ったことを示す須恵器片が出土している。

(4) 古代

古代の遺構は未検出であるが、8区検出の第III層中からは比較的多くの土師器や須恵器の破片が出土した。円盤高台状の底部をもつ土師器壺をはじめ、内黒釉や須恵器壺など、平安時代後期に時期比定されるものである。1次調査4区からも同時期の遺物が出土しており、4区・8区を中心とする周辺地域には古代集落の存在を示す資料といえよう。

表37 恵原新張遺跡2次調査 検出遺構一覧

時 代		6 区	7 区	8 区
縄文時代	早 期			(第V層)
弥生時代	中期中葉	土坑：1基		(第V層)
	中期後葉	溝：3条	(第IV層)	(第V層)
	後 期	(第IV層)	(第IV層)	(第V層)
	末			豎穴：1棟 (SB401と同一)
古墳時代	中期後葉	(第IV層)		
	後期前葉	(第IV層)		
	後期中葉	豎穴：1棟 掘立：1棟		
	後期後葉	豎穴：1棟	(第IV層)	(第IV層)
	後期末	豎穴：2棟	古墳：1基	溝：1条 (SD402と同一)
	〔後期〕	土坑：1基		
古 代				(第III層)

遺構一覧・遺物観察表 - 凡例 -

以下の表は、本調査地検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。

(1) 遺構一覧表

地 区 棚：グリッド名を記載。

規 模 棚：() は現存値を示す。

埋 土 棚：複数の土層がある場合は、以下のように記載している。

例) 「暗褐色土 他」

出土遺物棚：遺物名称を略記した。

例) 弥生→弥生土器、土師→土師器、須恵→須恵器、石→石器

(2) 遺物観察表

法 量 棚 ()：復元推定値

調 整 棚 土器の各部位名称を略記した。

例) 天→天井部、口→口縁部、胴上→胴部上半部、胴下→胴部下半部

胎 土 棚 胎土棚は混和剤を略記した。

例) 石→石英、長→長石、金→金ウンモ、赤→赤色酸化土粒

() の中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。

例) 石・長(1~2)→「1~2mm大の石英・長石を含む」である。

焼 成 棚 焼成棚の略記について

◎→ 良好

表38 穴穴建物一覧

穴穴 (SB)	区	地 区	平面形	規 模 長さ×幅×壁高 (m)	埋 土	出土遺物	時 期
601	6	C12-13	隅丸方形	5.36 × (3.50) × 0.10	暗褐色土 土師	弥生・土師・須恵・石	古墳後期末
602	6	C12-13	隅丸方形	(5.00) × (2.72) × 0.16	黒褐色土 (黄褐色土混入)	弥生・土師・須恵・石	古墳後期末
603	6	C13	隅丸方形	4.05 × (0.96) × 0.11	オリーブ黒色土	土師・須恵	古墳後期中葉
604	6	C12-13	隅丸方形	(2.90) × (1.50) × 0.07	黒褐色土	土師・須恵	古墳後期後葉
801	8	C18	円形	7.30 × (4.50) × 0.18	褐色土	弥生・石	弥生末

表39 据立柱建物一覧

据立	区	地 区	方 位	構 造	規 模		出土遺物	時 期
					朽行長 (m)	梁行長 (m)		
601	6	C14・15	東西	側柱	8.63 (4間)	5.32 (2間以上)	45.91	古墳後期中葉以降

表40 溝一覧

溝 (SD)	区	地 区	断面形	規 模 長さ×幅×深さ (m)	埋 土	出土遺物	時 期
601	6	C13	レンズ状	(4.37) × 1.30 × 0.18	黒褐色土 (黄褐色土混入)	弥生・石	弥生中期後葉
602	6	C13・14	レンズ状	(12.35) × 1.25 × 0.12	黒褐色土 (黄褐色土混入)		弥生中期後葉
603	6	C13	レンズ状	(3.75) × 1.03 × 0.28	黒褐色土 (黄褐色土混入)	弥生	弥生中期後葉
801	8	C19	U字状	(2.30) × 2.40 × 0.28	灰・互い・褐色土	土師・須恵	古墳後期後葉

表41 土坑一覧

土坑 (SK)	区	地 区	平面形	断面形	規 模 長径×短径×深さ (m)	埋 土	出土遺物	時 期
601	6	C14	不整椭円形	逆台形状	1.24 × 0.72 × 0.14	灰褐色土	弥生	弥生中期中葉
602	6	C14	椭円形	逆台形状	(1.36) × (0.66) × 0.24	オリーブ黒色土 (暗褐色土混入)		古墳後期

表42 柱穴一覧

(1)

柱穴 (SP)	区	地 区	平面形	規 模 長径×短径×深さ (m)	埋 土	出土遺物	備 考
601	6	C14	円形	0.38 × 0.34 × 0.20	灰褐色土		掘立 601
602	6	C14	円形	0.33 × 0.32 × 0.14	灰褐色土		掘立 601
603	6	C14	円形	0.34 × 0.32 × 0.20	灰褐色土		掘立 601
604	6	C14	円形	0.32 × 0.31 × 0.29	灰褐色土		掘立 601
605	6	C14	椭円形	0.32 × 0.24 × 0.16	灰褐色土		掘立 601
606	6	C14	円形	0.43 × 0.38 × 0.08	灰褐色土		掘立 601
607	6	C14	円形	0.33 × 0.31 × 0.05	灰褐色土		掘立 601
608	6	C15	椭円形	0.33 × 0.25 × 0.05	暗褐色土		
609	6	C15	円形	0.26 × 0.24 × 0.05	暗褐色土		
610	6	C15	円形	0.22 × (0.20) × 0.30	暗褐色土		
611	6	C15	円形	0.35 × 0.31 × 0.14	黒褐色土 (黄褐色土混入)		
612	6	C15	椭円形	0.40 × 0.28 × 0.12	黒褐色土 (黄褐色土混入)		

遺物観察表

(2)

柱穴 (SP)	区	地 区	平面形	規 横 長径×短径×深さ (m)		埋 土	出土遺物	備 考
				長径	短径			
613	6	C13	(円形)	0.42	×	(0.22) × 0.25	オリーブ褐色土	
614	6	C13	(円形)	(0.42)	×	(0.22) × 0.16	黒褐色土 (黄褐色土混入)	
615	6	C13	(円形)	(0.44)	×	(0.38) × 0.40	黒褐色土 (黄褐色土混入)	
616	6	C13	円形	0.44	×	0.44 × 0.30	黒褐色土 (黄褐色土混入)	
617	6	C14	円形	0.18	×	0.18 × 0.24	灰黃褐色土	
618	6	C14	円形	0.21	×	0.19 × 0.18	灰黃褐色土	
801	8	B18	円形	0.66	×	0.56 × 0.26	褐灰色土	
802	8	C18	楕円形	0.76	×	0.53 × 0.32	褐灰色土	
803	8	C18	(椭円形)	0.74	×	(0.46) × 0.34	にぶい褐色土	柱頭
804	8	C18	円形	0.72	×	0.69 × 0.40	褐灰色土	
805	8	C18	円形	0.80	×	0.75 × 0.38	灰褐色土	柱頭

表 43 SB601 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面) (内面)	胎 土 焼 成	備 考	図版
				外 面	内 面				
121	鉢	口径 (209) 残高 4.2	側面に外反する口縁部。口縁端部は丸く仕上げる。小片。	マツツ	マツツ	褐色 褐色	石・長 (1 ~ 2) 赤○		
122	壺蓋	口径 (122) 残高 2.3	口縁部片。口縁部は尖り気味に丸く仕上げる。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰白色	密○		
123	壺身	残高 2.1	たちあがりは短く内傾する。小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密○		
124	壺	残高 4.3	短頭壺。小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密○		
125	壺	口径 (234) 残高 2.0	広口壺。口縁部は下外方に垂下し、口縁端面に山形文あり。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	黄褐色 黄褐色	石・長 (1 ~ 2) ○		
126	高壺	底径 (130) 残高 3.7	脚端部に四線文 3 条、脚端面に四線文 2 条あり。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰黄色 灰黄色	石・長 (1 ~ 2) ○		
127	壺	底径 (125) 残高 3.4	底平。小片。	ヘラミガキ	ナデ	褐色 褐色	石・長 (1 ~ 2) 金○	黒斑	

表 44 SB601 出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残 存	材 質	法 量			備 考	図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)		
128	剥片	完形	赤色珪質岩	2.5	2.6	0.5	3.67	

表 45 SB602 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面) (内面)	胎 土 焼 成	備 考	図版
				外 面	内 面				
129	壺身	口幅 (11.3) 残高 2.0	たちあがりは低く内傾し、端部は尖り気味に仕上げる。小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密○		16
130	壺身	口幅 (10.0) 残高 3.0	たちあがりは低く内傾し、端部は尖り気味に丸く仕上げる。小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰白色	密○		
131	壺身	口幅 (8.9) 残高 2.4	たちあがりは低く内傾し、端部は尖り気味。小片。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密○		16
132	壺	残高 5.6	直筒形の胴部。胴部中位に回転カキメ調整あり。1/3 の残存。	④回転ナデ ⑤平行印記 →ヘラケツリ	回転ナデ	灰色 灰白色	密○		

表 SB602 出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調(外面)	胎 土 焼 成	備 考	図版
				外 面	内 面				
133	壺	底径 (18.8) 残高 3.2	底部片。小片。	回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ○		
134	壺	残高 3.3	沈縞 1条と波状文あり。小片。	回転ナデ	回転ナデ	褐色 赤褐色	密 ○	16	
135	高杯	底径 (13.6) 残高 4.0	ラッパ状に開く脚部。脚端部は上方に肥厚する。小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ○		
136	甕	残高 3.2	肩部片。	平行叩き	円弧叩き	灰白色 灰白色	密 ○		
137	甕	残高 8.3	胴部片。1/5の残存。	平行叩き→ハケ	同心円叩き・ 円弧叩き	青灰色 灰色	密 ○		
138	瓶	残高 6.7	把手部。断面横円形。	ナデ	ナデ	橙色	石・長 (1) ○	16	
139	壺	残高 4.9	頸部に凸筋を貼付け、凸筋上に押圧を加える。小片。	ヘラミガキ	ナデ	黄褐色 青灰色	石・長 (1~2) ○		
140	壺	残高 3.8	肩部に列点文あり。小片。	マメツ	ナデ	灰白色 灰白色	石・長 (1) ○	16	
141	甕	底径 (5.0) 残高 3.0	上げ底。底部完形。	マメツ	ナデ	橙色 黄橙色	石・長 (1~3) ○		

表 46 SB602 出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残 存	材質	法 量				備 考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
142	白石	一部欠損	結晶片岩	21.3	20.8	6.6	3.300		

表 47 SB604 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調(外面)	胎 土 焼 成	備 考	図版
				外 面	内 面				
143	坏蓋	口径 (16.2) 残高 2.3	天井部と口縁部の境界は凹線状の凹みが巡る。口縁端部は内傾する。小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ○		
144	坏身	外縫合 (12.2) 残高 3.0	たちあがり端部は丸い。小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ○		

表 48 SB603 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調(外面)	胎 土 焼 成	備 考	図版
				外 面	内 面				
145	坏蓋	口径 (16.6) 残高 4.4	扁平な天井部。口縁端部は内傾する。3/4の残存。	⑤回転ヘラケズリ ⑥回転ナデ	⑤円弧叩き ⑥回転ナデ	灰色 灰色	密 ○	17	
146	坏蓋	口径 (17.4) 残高 3.4	天井部と口縁部の境界は不明瞭な核をもち、口縁端部は内傾する。小片。	⑤回転ヘラケズリ ⑥回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ○		

表 49 SD603 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調(外面)	胎 土 焼 成	備 考	図版
				外 面	内 面				
147	壺	残高 3.3	肩部片。列点文あり。小片。	マメツ	マメツ	茶褐色 茶褐色	石・長 (1) ○		
148	高杯	残高 2.9	壺部に凹線文3条あり。小片。	ハケ →ヘラミガキ	ヘラミガキ	黒褐色 にぶい・黄褐色	石・長 (1) ○		
149	甕	残高 14.6	胴部片。1/3の残存。	ハケ →ヘラミガキ	ヘラミガキ	茶褐色 茶褐色	石・長 (1~2) ○		
150	甕	底径 (7.6) 残高 3.6	平底。1/3の残存。	ヘラミガキ	ナデ	明赤褐色 にぶい・褐色	石・長 (1) ○		

遺物観察表

表50 SD601出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
151	石斧丁	一部欠損	結晶片岩	6.2	10.9	0.85	96.19	未成品	17

表51 SK601出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
152	甕	残高 3.0	上げ底。2/3の残存。	ヘラミガキ	ナデ	茶褐色 茶褐色	石・長(1~2) ○	黒斑	

表52 6区第IV層出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
153	环盖	口径(13.2) 残高 3.3	断面三角形状の鋸歯をもつ、口縁端部は内傾する。小片。	③回転ヘラケズリ ②回転ナデ	回転ナデ	青灰色 灰色	密 ○		
154	环身	口径(12.2) 残高 2.2	たちあがりは短く内傾し、端部は尖る。小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密 ○		
155	环身	口径(10.9) 残高 2.7	たちあがりは短く内傾し、端部は尖る。アヒ味に丸い。小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ○	自然輪	
156	甕	口径(19.6) 残高 3.5	口縁。内側口縁。口縁端部は内傾する。小片。	マメツ	マメツ	褐色 褐色	石・長(1~2) 赤 ○		
157	甕	口径(31.8) 残高 2.5	逆S字状口縁。脇部に貼付凸帯1条あり。小片。	ヨコナデ	ヘラミガキ	橙色 灰黄色	石・長(1~3) ○		17
158	甕	口径(19.0) 残高 2.3	広口甕。口縁部は上方に抵抗し、口縁端面に凹線文3条あり。小片。	ヘラミガキ	ヘラミガキ	茶褐色 灰褐色	石・長(1) ○		
159	甕	残高 5.8	上げ底。2/3の残存。	マメツ	ナデ	茶褐色 暗褐色	石・長(1~3) ○	黒斑	
160	高坏	底径(12.0) 残高 5.8	脚部に凹線文3条、脚端面に凹線文2条あり。1/4の残存。	マメツ	ナデ	橙色 褐灰色	石・長(1~2) ○	黒斑	17

表53 7区第IV層出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
161	甕	底径(7.6) 残高 5.3	上げ底。1/3の残存。	ナデ	ナデ	橙色 にぶい橙色	石・長(1~2) ○		17
162	甕	底径(5.1) 残高 3.3	上げ底。1/2の残存。	ナデ	ナデ	茶褐色 茶褐色	石・長(1~2) ○		
163	蓋	残高 3.3	短頭蓋の蓋。重ね焼きの痕跡あり。 1/4の残存。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰褐色	密 ○		17
164	蓋	残高 3.6	短頭蓋。小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰色	密 ○		
165	甕	残高 5.0	脚部片。小片。	ナデ	板ナデ	灰褐色 灰褐色	石・長(1) ○		

表54 7区第IV層出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
166	石斧	一部欠損	結晶片岩	16.2	3.8	4.0	3666		17

表55 8区包含層出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
167	坏	底径(7.0) 残高 0.9	平底。底部の切り離しは回転系切り 技法による。1/4の残存。	ナデ	ナデ	灰黄色 灰黄色	石・長(1) ○	第Ⅲ期	

8区包含層出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調(外面) 色調(内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
168	环	底径 残高 13	円錐高台状の底部。小片。	マメツ	マメツ	褐色 褐色	石・長(1) 赤○	第Ⅳ層	
169	环	底径 残高 13	円錐高台状の底部。底部の切り離し は回転ヘア切り技法による。小片。	マメツ	ヨコナデ	灰黄色 灰黄色	石・長(1) 赤○	第Ⅳ層	
170	环	底径 残高 17	円錐高台状の底部。1/4の残存。	マメツ	マメツ	黄橙色 黄橙色	石・長(1) ○	第Ⅳ層	17
171	环	底径 残高 3.8	円錐高台状の底部。1/2の残存。	マメツ	マメツ	黄橙色 黄橙色	石・長(1) 赤○	第Ⅳ層	17
172	楕	残高 12	内黒楕。底部内面に暗文あり。	ヨコナデ	ヨコナデ	褐色 黑色	石・長(1) ○	第Ⅳ層	
173	楕	底径 残高 18	内黒楕。底部内面に暗文あり。	ナデ	ナデ	浅黄褐色 黑色	石・長(1) ○	第Ⅳ層	17
174	环	底径 残高 16	円錐高台状の底部。底部外面に回転 糸切り痕あり。1/4の残存。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ○	第Ⅳ層	17
175	壺	口径 残高 2.5	口縁部分。口縁端部は四線1条が通 る。1/4の残存。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密 ○	第V層	
176	壺	残高 4.4	上げ底。1/2の残存。	ナデ	ナデ	灰褐色 灰褐色	石・長(1) ○	第V層	
177	深鉢	残高 5.3	胴部片。内外面に押型文あり。	ナデ	ナデ	茶褐色 茶褐色	石・長(1) ○	第V層	18
178	深鉢	残高 5.7	胴部片。内外面に押型文あり。	ナデ	ナデ	灰褐色 褐色	石・長(1~2) ○	第V層	18

第5章 恵原新張遺跡3次調査

第1節 調査の経緯

恵原新張遺跡3次調査は、2016（平成28）年5月9日より開始し、同年6月3日に終了した。調査対象区は、調査地中央部の5区であり、調査面積は207m²である（第71図）。調査は工事の都合上、北側と南側に分割して実施した。まず、北側の調査から開始する。重機（バックホー0.25m³・3t不整地運搬車）を使用して表土の掘削と運搬作業を行う。同日、壁面精査と遺構検出作業を実施する。5月14日、遺構検出作業を終了し、竪穴建物や柱穴を検出す。5月14日より、遺構の掘削作業を開始する。5月24日、高所作業車を使用して遺構完掘写真を撮影する。5月26日より、南側の調査に着手する。北側と同様に重機を使用して表土の掘削と運搬作業を行う。5月27日、遺構検出作業を終了し、竪穴建物や土坑、柱穴を検出す。6月3日、すべての調査が終わり、屋外作業を終了する。

第2節 層位

調査地は、調査以前は雑種地であった。現況の標高は、70.50～70.80mである。5区では基本層位のうち第II層、第III層、第V層、及び第VI層は検出されなかった（第73・74図）。

第I層：近現代の造成や農耕に伴う客土で、土色・土質の違いで3種類に分層される。

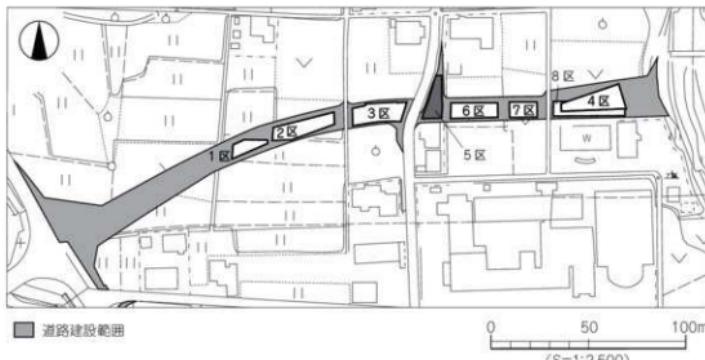
第I①層－近現代の造成に伴う真砂土で、地表下10～55cmまで開発が行われている。

第I②層－近現代の農耕に伴う耕作土〔灰黄色土（2.5Y 6/2）〕で、層厚3～18cmである。

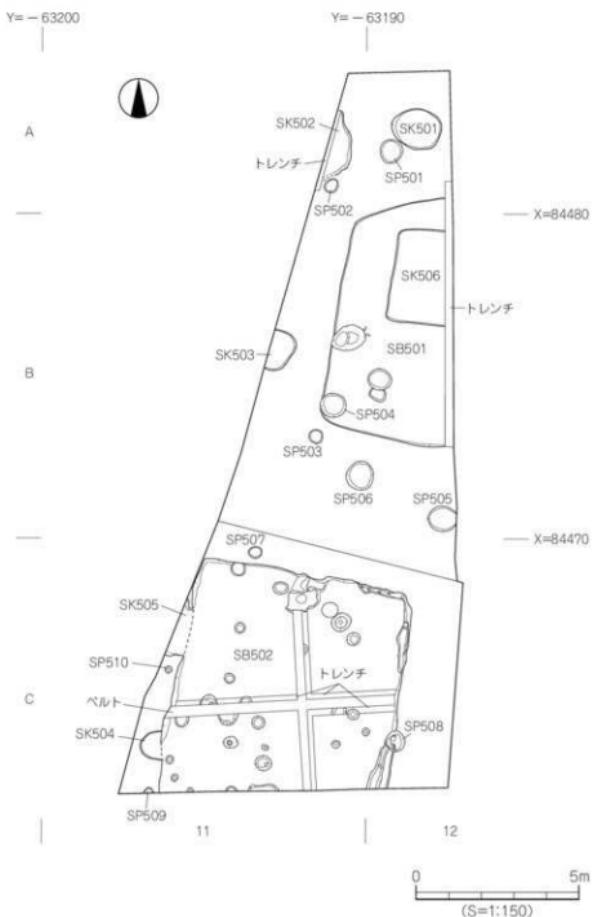
第I③層－近現代の農耕に伴う床土〔淡黄色土（2.5Y 8/3）〕で、層厚3～16cmである。

第IV層：黒色土（7.5YR 2/1）で、層厚は3～20cmである。本層中からは弥生土器や土師器、須恵器のほか石器が出土した。

第V層：黄褐色土（10YR 5/8）で、本層上面が調査における最終遺構検出面である。

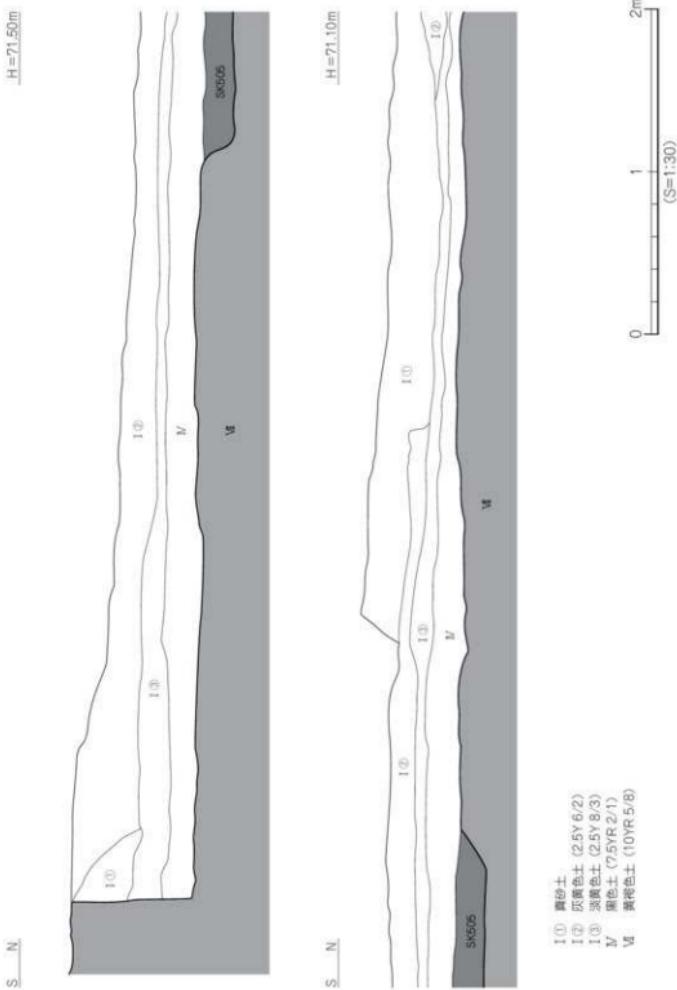


第71図 調査区位置図

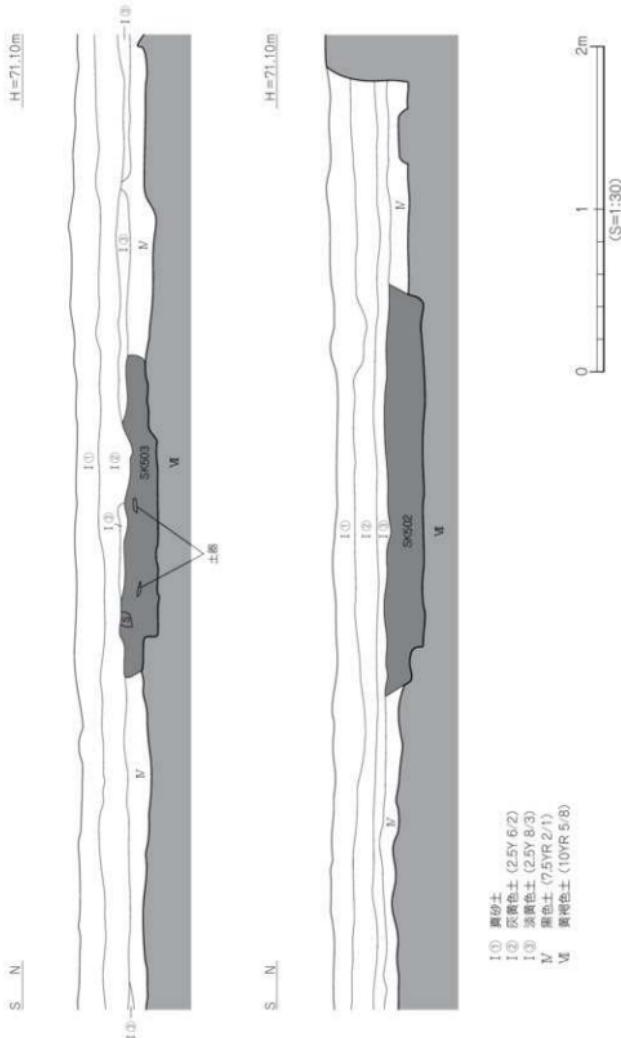


第72図 5区遺構配置図

層位



第73図 5区西壁土層図 (1)



第74図 5区西壁土層図 (2)

第3節 遺構と遺物

恵原新張遺跡3次調査では、竪穴建物2棟、土坑6基、柱穴10基を検出した（第72図、図版9）。遺物は弥生土器、土師器、須恵器のほか石器（石斧）が出土した。遺物の出土量は、遺物収納箱（22×60×44cm）約5箱分である。

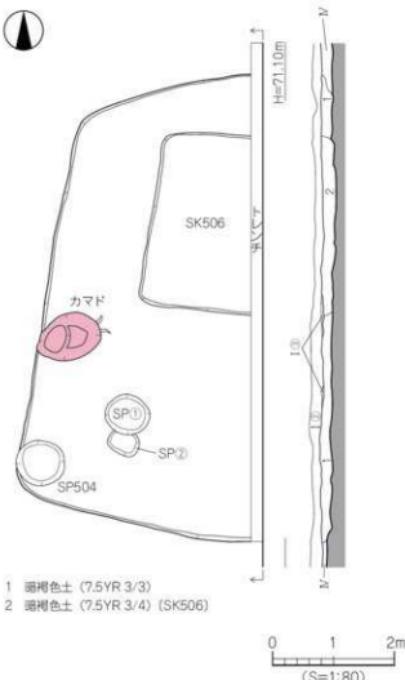
（1）竪穴建物

SB501（第75図、図版9・10）

5区北部A11～B12区に位置する竪穴建物址で、建物東半部は調査区外に続く。第VII層上面での検出であり、第IV層中から掘削された遺構である。建物北側は土坑SK506に削平され、建物南西部は柱穴SP504に削平されている。平面形態は方形をなすものと思われ、規模は南北長7.62m、東西検出長4.00m、壁高は18cmである。建物埋土は、暗褐色土（7.5YR 3/3）単層である。建物西壁中央部には、カマドと思われる焼土のかたまりを検出したが、形状の復元には至らなかった。内部施設は、柱穴2基（SP①・②）を検出した。各柱穴の平面形態は円形で、規模は径35～70cm、深さ10～25cmである。柱穴掘り方埋土はSP①が暗褐色土（7.5YR 3/3）、SP②は暗褐色土（7.5YR 3/3）に黄褐色土（10YR 5/8）がブロック状に混入するものである。遺物は建物埋土中より土師器、須恵器のほかに弥生土器片が数多く出土した。なお、焼土塊内からは甕が押し潰された状態で出土している。遺物の出土状況や堆積状況から、SB501は人為的に埋め戻された建物と推測される。

出土遺物（第76～78図、図版18）

179～187はSB501埋土出土品。179～182は土師器、183～185は須恵器、186～187は弥生土器である。179～181は甕で、179・180の口縁部は内湾し、179の口縁端部は内傾する。179・181の胴部外面には、ヨコないしナナメ方向のハケメ調整がみられる。182は鉢で、体部は内湾し、口縁端部は丸く仕上げる。183は高坏の坏部片で、たちあがりは短く内傾し、端部は尖り気味に仕上げる。



184は鉢で、口縁部は短く外反する。185は広口壺で、口縁部は長方形状に肥厚する。186は広口壺で、口縁端面に凹線文2条を施す。187は甕形土器の底部で、僅かに上げ底をなす。188～190はSB501カマド出土品。188は土師器の甕で、口縁部は内湾し、口縁端部は内方に僅かに肥厚する。胴部内外面には、板状工具による強いナデを施す。189は土師器の壺。1/2の残存で、口縁部は外反する。外面にはナデと指頭痕が顯著に残る。190は土師器の甕。口縁部は直立し、口縁端部は丸く仕上げ、底部は貫通する。

時期：カマド出土品の特徴より、SB501の廃棄・埋没時期は古墳時代後期、6世紀後葉とする。

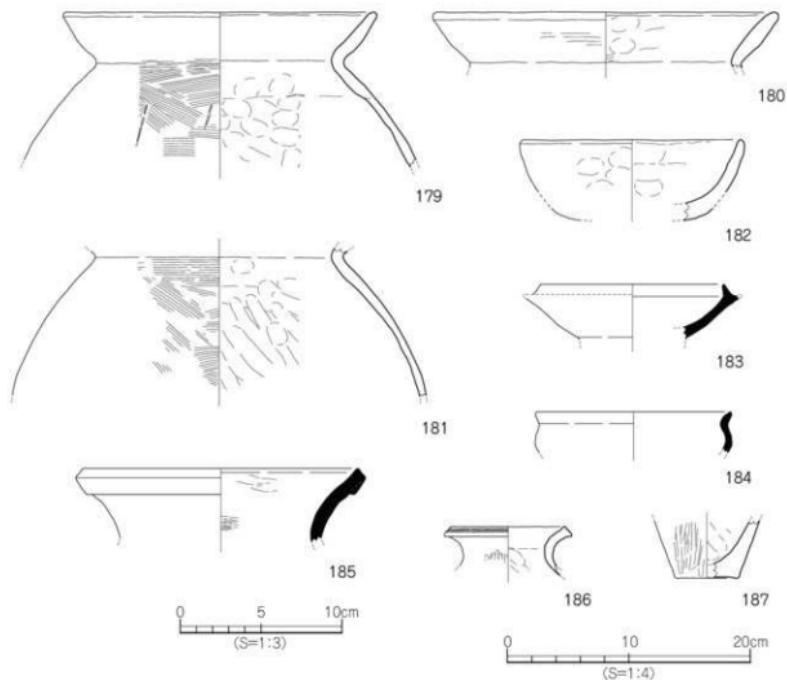
SB502（第79図、図版10）

5区南側C11・12区に位置する堅穴建物で、建物南半部は調査区外へ続く。第VII層上面での検出であり、建物上面は第IV層が覆う。建物南東部は柱穴SP508に一部削平され、建物西側は2基の土坑（SK504・505）と重複し、SB502が後出する。平面形態は隅丸方形ないし長方形をなすものと思われ、規模は南北検出長7.36m、東西長7.12m、壁高は28cmである。建物埋土は褐色土（10YR 4/1）を基調とし、床面付近には褐色土や暗褐色土（7.5YR 3/4）に黄橙色土（10YR 8/6）がブロック状に混入する土層が堆積する。内部施設は、カマドや柱穴及び周壁溝を検出した。カマドは建物北壁中央部に付設されているが倒壊が著しく、平面形態は馬蹄形状をなすものと思われるが、形状の復元には至らなかった。建物床面には7基の柱穴を検出した。このうち、4基の柱穴（SP①～④）は配置からSB502の主柱穴と考えられる。柱穴の平面形態は円形または梢円形をなし、規模は径20～50cm、深さは20～28cmである。柱穴掘り方埋土は、褐色土（10YR 4/1）單層である。このほか、建物東壁沿いにて、幅10～28cm、深さ6～10cmの周壁溝を検出した。埋土は、褐色土（10YR 4/1）である。遺物は建物埋土中より完形品を含む土師器や須恵器のほか、弥生土器片が数多く出土した。また、石器剝片なども数点出土している。

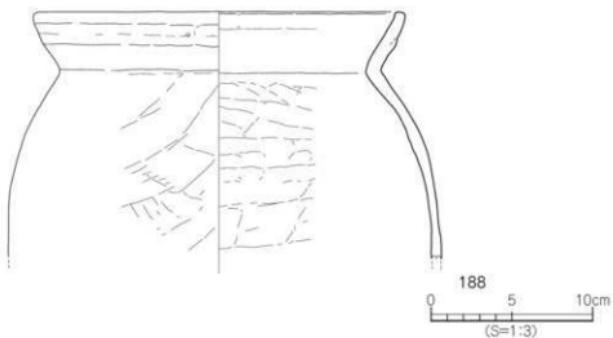
出土遺物（第80・81図、図版19）

195・196はSB502カマド出土品、その他はSB502埋土出土品。191～197は土師器。191～196は甕。191～193の口縁部は内湾し、191の口縁端部は内方に僅かに肥厚する。193・194の口縁部は外反し、口縁端部は丸く仕上げる。195・196の外面には細かなハケメ調整がみられ、196の底部内面には指頭痕が顯著に残る。197は甕の底部で、外面はハケメ調整、内面にはヨコ方向のヘラミガキを施す。198～208は須恵器。198は坏蓋で、天井部は丸味をもち、口縁端部は内傾する。199～202は坏身。199のたちあがりは内傾し、端部は内傾する。なお、200～202のたちあがり端部は丸く仕上げる。203は高坏で、脚部に円孔を看守する。204は鉢で、口縁部は短く外反する。205は鉢の蓋で、かえりは内方に垂下し、天井部は平坦である。206・207は壺。206は広口壺で、口縁部は丸く拡張する。208は甕の肩部片で、外面には平行叩き、内面は円弧叩きを施す。209～213は弥生土器。209～211は甕形土器。209・210は折曲により口縁部を成形し、210の口縁端面には凹線文3条を施す。211は口縁部下に凸帯を貼り付け、凸帯上に刻目を施す。212・213は壺形土器。212は広口壺で、口縁部内面に円形浮文2個を貼り付ける。213は肩部片で、内面に押圧痕が残る。214・215はスクレイバーで、石材はサスカイトである。

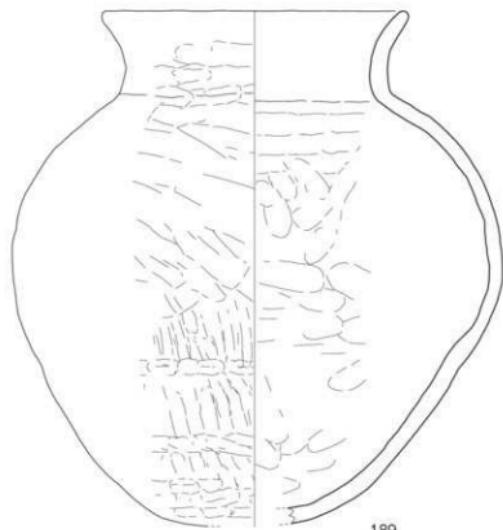
時期：出土遺物の特徴より、SB502の廃棄・埋没時期は古墳時代後期、6世紀中葉とする。



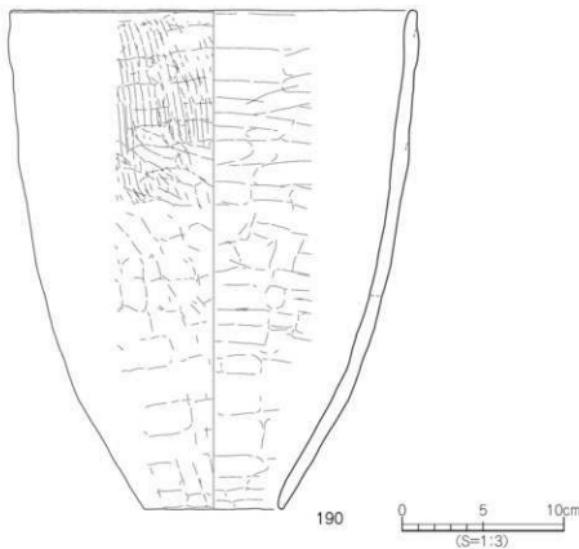
第 76 図 SB501 出土遺物実測図



第 77 図 SB501 カマド出土遺物実測図 (1)



189



第78図 SB501 カマド出土遺物実測図 (2)

(2) 土坑

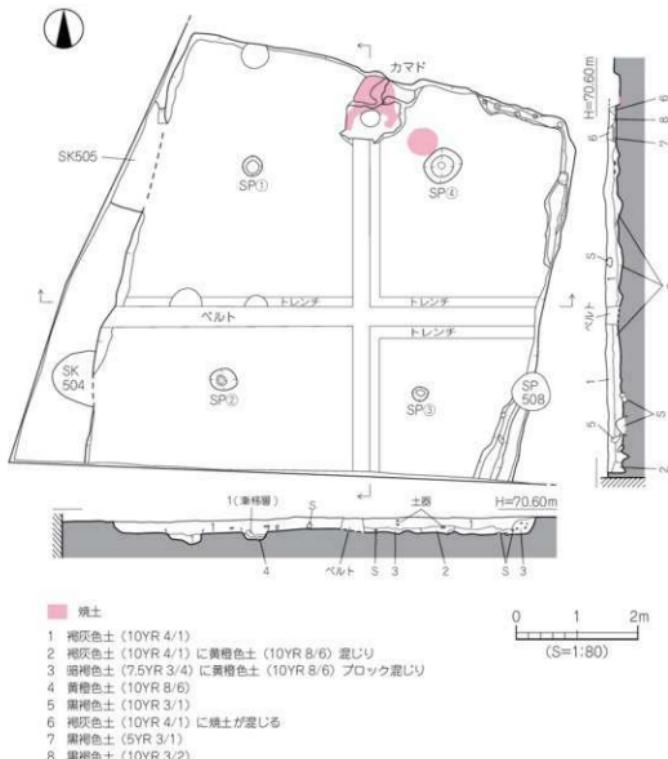
SK502 (第82図)

5区北部A11区で検出した土坑で、土坑西半部は調査区外に続く。壁面の土層観察により、遺構上面は第I③層が覆う。平面形態は不整の梢円形をなし、規模は南北検出長2.50m、東西検出長0.85m、深さ26cmである。断面形態は逆台形状をなし、埋土は暗褐色土(7.5YR 3/3)単層である。遺物は土坑内から、弥生土器片が数点出土した。そのうち、実測し得る遺物3点を掲載した。

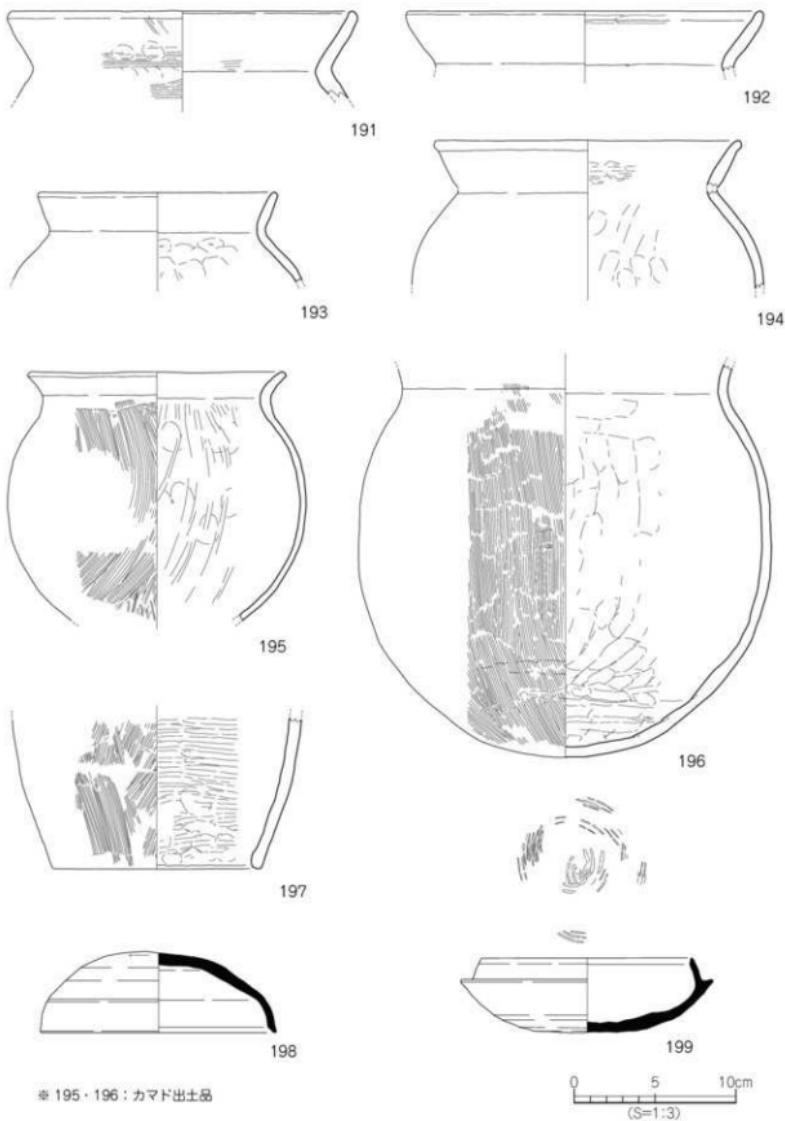
出土遺物 (図版19)

216～218は弥生土器。216は折曲により口縁部を成形し、胴部内面にはヨコ方向のヘラミガキが残る。217は広口壺で、口縁部は大きく外反し、頸部に断面三角形状の凸帯1条を貼り付ける。218は壺形土器の底部で、外面にはタテ方向のヘラミガキを施す。

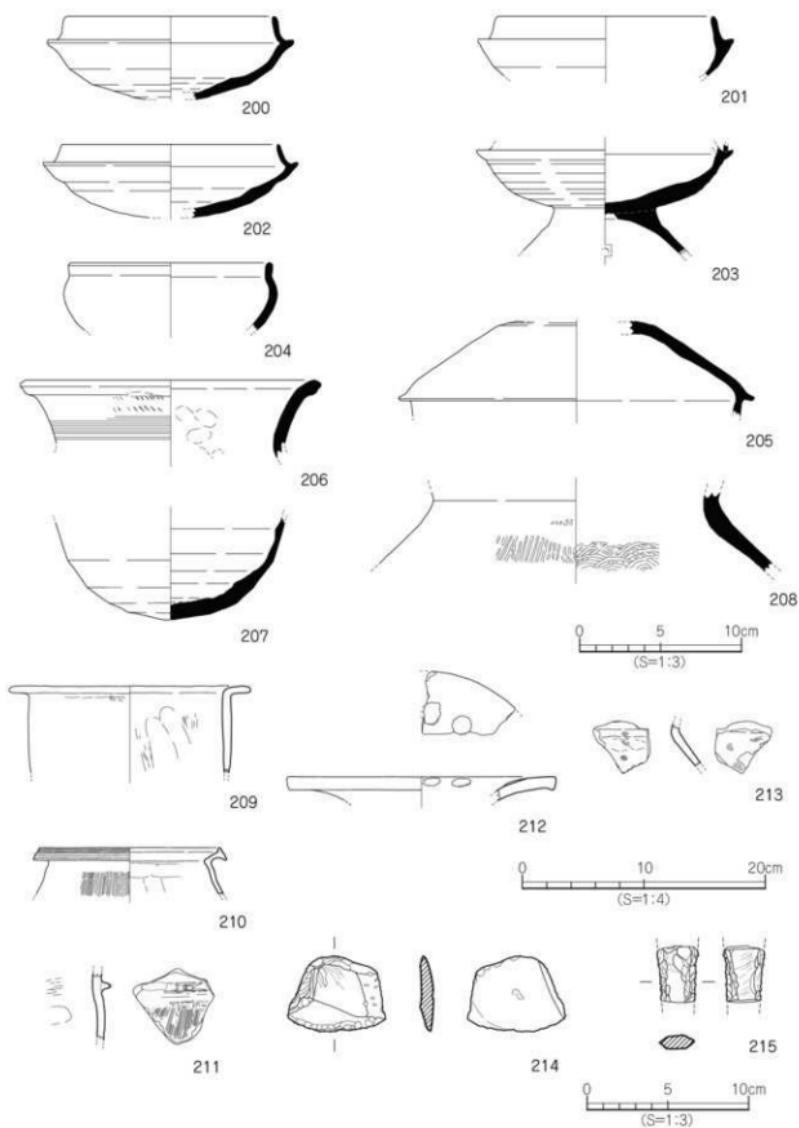
時期：出土遺物の特徴より、弥生時代中期中葉とする。



第79図 SB502測量図



第 80 図 SB502 出土遺物実測図 (1)



第 81 図 SB502 出土遺物実測図 (2)

SK503（第83図）

5区中央部北西寄りB11区で検出した土坑で、土坑西半部は調査区外に続く。壁面の土層観察により、土坑上面は第I③層が覆う。平面形態は楕円形をなすものと思われ、規模は南北長1.26m、東西検出長0.86m、深さは28cmである。断面形態は筒状をなし、埋土は暗褐色土（75YR 3/3）単層である。遺物は埋土中位付近より壺形土器の破片が数多く出土した。SK503は壁体の特徴より、貯藏穴として利用された土坑と考えられる。

出土遺物（図版20）

219は弥生土器の壺形土器。折曲により口縁部を成形し、頸部内面には明瞭な稜をもつ。胴上半部外面は細かなハケメ調整、胴中位外面と胴部内面には細かなヘラミガキを施す。

時期：出土遺物の特徴より、弥生時代中期中葉とする。

SK505（第84図）

5区南西部C11区で検出した土坑で、土坑東側はSB502に削平され、西半部は調査区外に続く。壁面の土層観察により、土坑上面は第IV層が覆う。平面形態は不整の楕円形をなすものと思われ、規模は南北検出長1.83m、東西検出長0.46m、深さは18cmである。断面形態は逆台形状をなし、埋土は褐灰色土（10YR 4/1）単層である。遺物は埋土中位付近より壺形土器の口縁部（完形）が出土したほか、破片が数点出土している。

出土遺物（図版20）

220は弥生土器の壺形土器。広口壺で、口縁部は大きく外反し、頸部に凸帯を貼り付け、凸帯上に刻目を施す。頸部内面には、ヨコ方向のヘラミガキを施す。

時期：出土遺物の特徴より、弥生時代中期中葉とする。

SK504

5区南西部C11区で検出した土坑で、土坑東側はSB502に削平されている。平面形態は円形をなすものと思われ、規模は南北長0.88m、東西検出長0.64m、深さは14cmである。断面形態は筒状をなし、埋土は褐灰色土（10YR 4/1）単層である。遺物は弥生土器片が数点出土したが、図化しうるものはない。

時期：時期特定しうる遺物の出土はないが、埋土がSK505と酷似することから、概ね弥生時代中期中葉から後葉の土坑と考えられる。

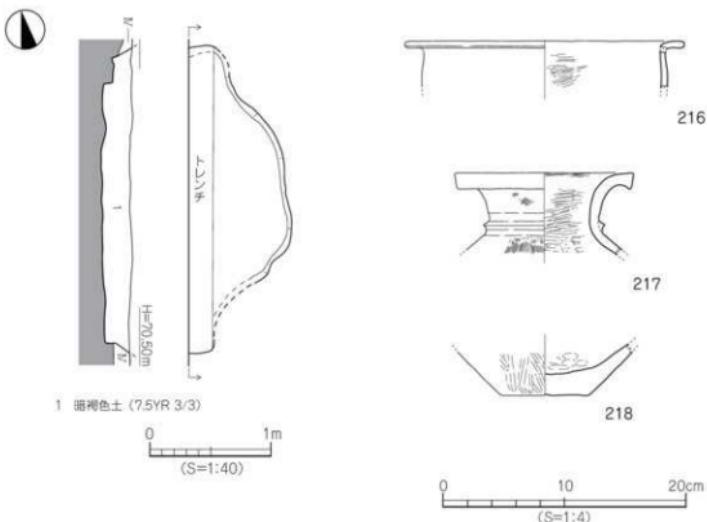
SK501

5区北部A12区で検出した土坑で、平面形態は楕円形をなし、規模は長径1.58m、短径1.25m、深さ12cmである。断面形態は逆台形状をなし、埋土はにぶい黄褐色土（10YR 4/3）に明黄褐色土（10YR 6/6）がブロック状に混入する。遺物は弥生土器片が数点出土したが、図化しうるものはない。

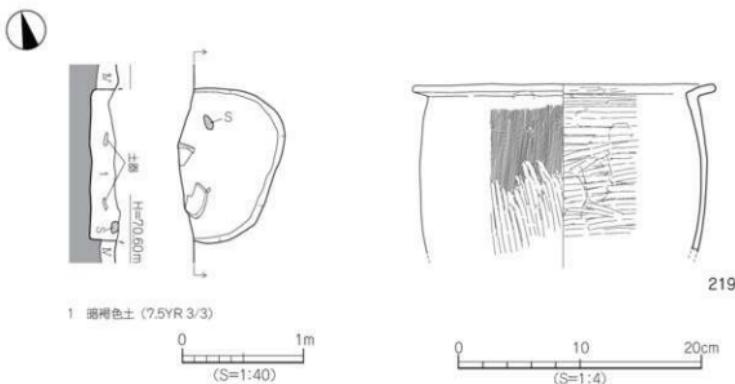
時期：時期特定しうる遺物の出土はないが、概ね弥生時代中期中葉から後葉の土坑と考えられる。

SK506

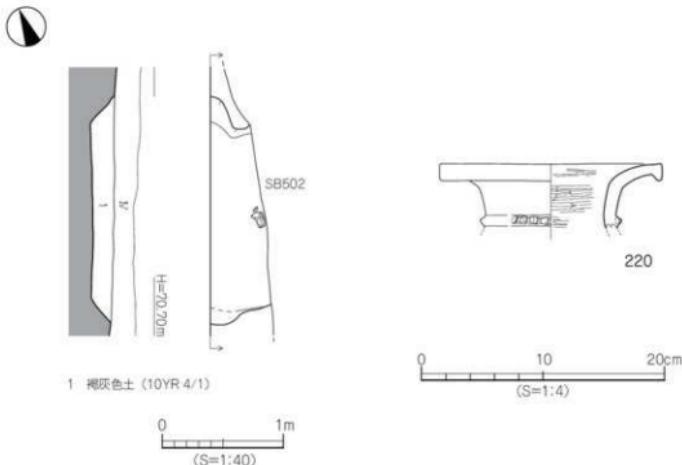
5区北東部B12区で検出した土坑で、土坑東半部は調査区外に続く。SB501上面にて検出した土坑で、平面形態は方形をなすものと思われ、規模は南北長2.88m、東西検出長1.80m、深さ10cmである。



第 82 図 SK502 測量図・出土遺物実測図



第 83 図 SK503 測量図・出土遺物実測図



第 84 図 SK505 測量図・出土遺物実測図

断面形態は浅い逆台形状をなし、埋土は暗褐色土（7.5YR 3/4）単層である。土坑内からは土師器や須恵器の小片が数点出土したが、固化しうるものはない。

時期：時期特定しうる遺物の出土はないが、SB501より後出することから、概ね古墳時代後期、6世紀後葉以降の土坑と考えられる。

（3）その他の遺構と遺物

5 区では、10 基の柱穴を検出した。また、第IV層中からは弥生土器や須恵器、土師器のほか石器が出土した。

1) 柱 穴

検出した 10 基の柱穴は、掘り方埋土で分類すると以下の 2 種類となる。このうち、①の柱穴からは弥生土器片が数点出土した。

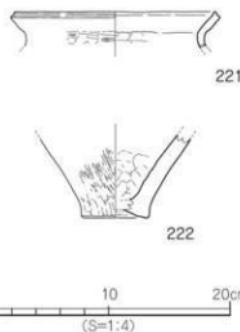
- ① 褐灰色土（10YR 4/1）：7 基
- ② 暗褐色土（7.5YR 3/4）：3 基

出土遺物（第 85 図）

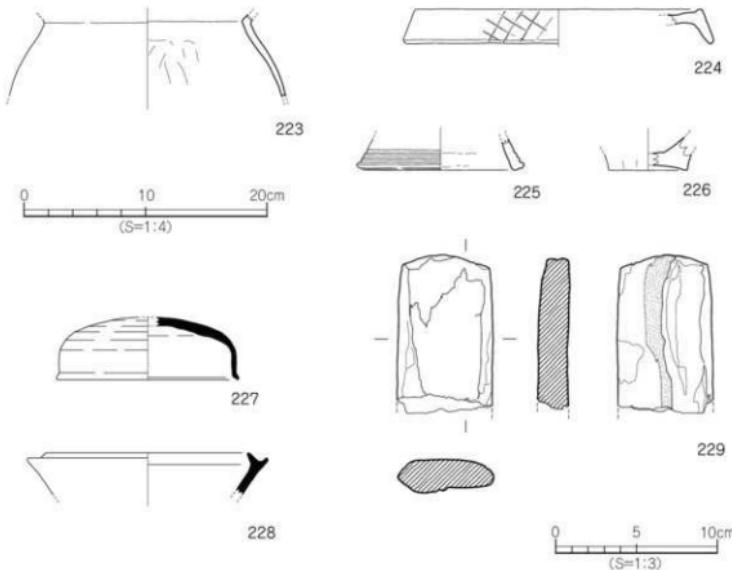
221-222 は SP505 出土品。221 は甕形土器の口縁部片で、口縁端面はナデにより凹む。222 は甕形土器で、上げ底をなす。弥生時代後期前葉。

2) 第IV層出土遺物（第86図、図版20）

223～226は弥生土器。223は壺形土器の胴部片で、頭部内面に明晰な稜をもつ。224は壺形土器。広口壺で、口縁部は下外方に垂下し、口縁端面に斜格子目文を施す。弥生時代中期中葉。225は高壺形土器。脚部片で、脚裾部に凹線文3条、脚端面に凹線文1条を施す。弥生時代中期後葉。226は壺形土器の底部片で、上げ底をなす。弥生時代中期後葉。227・228は須恵器。227は短頭壺の蓋で、口縁端部は内傾する面をもつ。6世紀。228は壺身片で、たちあがりは短く内傾し、端部は尖る。7世紀前葉。229は伐採斧で、研磨段階の未成品である。結晶片岩製。



第85図 SP505出土遺物実測図



第86図 5区第IV層出土遺物実測図

第4節 小 結

恵原新張遺跡3次調査では、弥生時代から古墳時代までの遺構・遺物を確認した。ここでは、時代別にまとめを行う。

(1) 弥生時代

弥生時代では、土坑5基を検出した。このうち、3基の土坑（SK502・503・505）は弥生時代中期中葉の遺構で、特にSK503では大型の土器片が埋土中より出土している。なお、土坑壁体は筒状に立ち上がっており、断面形態の特徴からSK503は貯蔵用の穴として利用された可能性がある。残り2基の土坑（SK501・504）については時期特定しうる遺物の出土はないが、他の遺構との重複関係や埋土などから、概ね弥生時代中期中葉から後葉頃の遺構と考えられる。なお、柱穴SP505からは弥生時代後期前葉に時期比定される土器片が数点出土している。

遺物は、古墳時代の竪穴建物であるSB502より弥生時代前期末に時期比定される土器片が出土したほか、中期中葉から後葉に時期比定される土器片も数多く出土している。また、古墳時代の竪穴建物SB501からも弥生時代中期中葉から後期の土器片が数多く出土した。なお、第IV層中からも弥生時代中期中葉から後葉に時期比定される土器片や石器の出土がみられた。

(2) 古墳時代

古墳時代は、竪穴建物2棟と土坑1基を検出した。SB502は幅7.12m、長さ7.36m以上の隅丸方形建物で、4本の主柱穴と周壁溝及びカマドを検出した。カマドは建物北壁中央部に付設され、カマド内には土師器の甕が押し潰された状態で埋まっていた。出土遺物より、SB502の廃棄・埋没時期は古墳時代後期、6世紀中葉と考えられる。一方、SB501は建物全体の約1/2を検出し、長さ7.62mを測る方形建物と思われる。建物西壁中央部付近には、カマドが付設されている。遺物は弥生土器や土師器、須恵器の破片が建物内に散在して出土した。出土遺物より、SB501はSB502より後出する6世紀後葉に廃棄された建物と考えられる。なお、SB501・502は遺物の出土状況や埋没状況などから、人為的に埋め戻された建物と推測される。また、SK506はSB501より後出する土坑であり、6世紀後葉以降に掘削されたものである。

3次調査の対象となる5区は、今回報告する調査地の中央に位置する。調査面積は207m²であり、狭小範囲の調査ではあったが、当地における弥生時代や古墳時代の集落様相が知れる貴重な資料を得ることができた。

【検出遺構】

弥生時代中期中葉：土坑 3基（SK502・503・505）

（中葉から後葉）：土坑 2基（SK501・504）

古墳時代後期中葉：竪穴 1棟（SB502）

後期後葉：竪穴 1棟（SB501）、土坑 1基（SK506）

遺構一覧・遺物観察表 - 凡例 -

以下の表は、本調査地検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。

(1) 遺構一覧表

地 区 棚：グリッド名を記載。

規 模 棚：()は現存値を示す。

埋 土 棚：複数の土層がある場合は、以下のように記載している。

例)「褐色土 他」

出土遺物棚：遺物名称を略記した。

例) 弥生→弥生土器、土師→土師器、須恵→須恵器、石→石器

(2) 遺物観察表

法 量 棚 ()：復元推定値

調 整 棚 土器の各部位名称を略記した。

例) 天→天井部、口→口縁部、た→たちあがり、坏→坏部、頭→頭部、胴→胴部、脚→脚部、底→底部

胎 土 棚 胎土欄は混和剤を略記した。

例) 石→石英、長→長石、金→金ウニモ、赤→赤色酸化土粒
()の中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。

例) 石・長(1~4) → 「1~4mm大の石英・長石を含む」である。

焼 成 棚 焼成欄の略記について

◎→ 良好

表 56 穴穴建物一覧

穴穴 (SB)	地 区	平面形	規 模 長さ×幅×壁高(m)	埋 土	出土遺物	時 期
501	A11 ~ B12	方形	7.62 × (4.00) × 0.18	暗褐色土	弥生・土師・須恵	古墳後期後葉
502	C11・12	隅丸方形	(7.36) × 7.12 × 0.28	褐色土 他	弥生・土師・須恵・石・ 鐵土	古墳後期中期

表 57 土坑一覧

土坑 (SK)	地 区	平面形	断面形	規 模 長径×短径×深さ(m)	埋 土	出土遺物	時 期
501	A12	椭円形	逆台形状	1.58 × 1.25 × 0.12	にねい・黃褐色土 (明黄褐色土混入)	弥生	弥生中期中~後葉
502	A11	不整椭円形	逆台形状	(2.50) × (0.85) × 0.26	暗褐色土	弥生	弥生中期中期
503	B11	(椭円形)	筒状	1.26 × (0.86) × 0.28	暗褐色土	弥生	弥生中期中期
504	C11	(円形)	筒状	0.88 × (0.64) × 0.14	褐色土	弥生	弥生中期中~後葉
505	C11	(不整椭円形)	逆台形状	(1.83) × (0.46) × 0.18	褐色土	弥生	弥生中期中期
506	B12	方形	逆台形状	2.88 × (1.80) × 0.10	暗褐色土	土師・須恵	古墳後期後葉以降

表 58 柱穴一覧

(1)

柱穴 (SP)	地 区	平面形	規 模 長径×短径×深さ(m)	埋 土	出土遺物	備 考
501	A12	円形	0.74 × 0.68 × 0.27	褐色土		
502	A11	椭円形	0.47 × 0.41 × 0.10	褐色土		
503	B11	円形	0.42 × 0.42 × 0.22	褐色土		
504	B11	円形	0.74 × 0.74 × 0.38	暗褐色土	弥生	
505	B12	(椭円形)	(0.88) × 0.78 × 0.37	褐色土	弥生・土師・須恵	

(2)

柱穴一覧							(2)	
柱穴 (SP)	地区	平面形	規 模 長径×短径×深さ(m)		埋 土	出土遺物	備 考	
			長径	短径				
506	B11・12	楕円形	0.79	0.74	0.31	暗褐色土	弥生	柱痕
507	C11	楕円形	0.42	0.37	0.08	褐色土		
508	C12	楕円形	0.66	0.63	0.32	暗褐色土		
509	C11	(円形)	0.33	0.18	0.07	褐色土		
510	C11	円形	0.22	0.21	0.27	褐色土		

表 59 SB501 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調(外面)	胎 土 焼 成	備 考	図版
				外 面	内 面				
179	甕	口径 (19.0) 残高 9.5	内湾口縁。口縁端部は僅かに内傾す。 1/3 の残存。	◎ヨコナデ ◎ハケ (6~7本/cm)	◎ヨコナデ ◎ナデ	褐色 橙色	石・長 (1~3) 赤		18
180	甕	口径 (20.8) 残高 3.4	内湾口縁。小片。	ハケ→ナデ	ナデ	褐色 黄褐色	石・長 (1~2) 赤	黒斑	
181	甕	残高 9.0	胴部片。1/4 の残存。	ハケ (6~7本/cm)	ナデ	茶褐色 茶褐色	石・長 (1~3) 赤		
182	鉢	口径 (13.3) 残高 4.9	内湾口縁。口縁端部は丸く仕上げる。 内外面には指痕痕が顕著に残る。小片。	ナデ	ナデ	褐色 橙色	石・長 (1) ○		
183	高杯	口径 (11.2) 残高 3.4	たちあがりには軽く内傾し、環部は突り気味に仕上げる。小片。	回転ナデ	回転ナデ	暗灰色 青灰色	青		
184	鉢	口径 (11.8) 残高 2.6	軽く外反する口縁部。口縁端部は突り気味。小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	青		
185	甕	口径 (16.8) 残高 4.5	口縁部は長方形状に肥厚する。1/5 の残存。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	青		18
186	甕	口径 (8.0) 残高 3.8	広口甕。口縁部は上方に拡張し、口縁端面に四瓣文 2 条あり。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	茶褐色 暗褐色	石・長 (1~2) ○		
187	甕	底径 (5.1) 残高 4.7	僅かに上げ底。1/4 の残存。	ヘラミガキ	ナデ	褐色 褐色	石・長 (1) 赤	黒斑	
188	甕	口径 (21.0) 残高 15.1	内湾口縁。口縁端部は内方へ僅かに肥厚する。小片。	◎ヨコナデ ◎板ナデ (6~7本/cm)	◎ヨコナデ ◎板ナデ (6本/cm)	茶褐色 黄褐色	石・長 (1~2) 金	カマド 黒斑	
189	甕	口径 (18.4) 残高 31.6	外反口縁。口縁端部は丸い。1/2 の残存。	◎ヨコナデ ◎ナデ	◎ヨコナデ ◎ナデ	褐色 橙色	石・長 (1) ○	カマド 黒斑	18
190	甕	口径 (24.8) 残高 30.7	1/5 の残存。口縁部は直立し、口縁端部は丸く仕上げる。	◎ヨコナデ ◎ナデ	ヨコナデ	褐色 橙色	石・長 (1) 赤	カマド	18

表 60 SB502 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調(外面)	胎 土 焼 成	備 考	図版
				外 面	内 面				
191	甕	口径 (21.0) 残高 5.3	内湾口縁。口縁部は内方へ肥厚する。小片。	◎ヨコナデ ◎ナデ (6~7本/cm)	◎ヨコナデ ◎ハケ (6本/cm)	灰褐色 褐色	石・長 (1~3) ○	保存着	
192	甕	口径 (21.7) 残高 3.7	内湾口縁。口縁端部は丸い。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	黄褐色 黄褐色	石・長 (1~2) ○		
193	甕	口径 (14.4) 残高 5.4	内湾口縁。口縁端部は丸い。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	褐色 橙色	石・長 (1) ○		
194	甕	口径 (18.4) 残高 9.1	外反口縁。口縁端部は丸い。小片。	マメフ	◎ハケ ◎ナデ	赤褐色 赤褐色	石・長 (1) ○		
195	甕	口径 (15.4) 残高 15.3	外反口縁。口縁端部は丸い。球形の胴部。1/3 の残存。	◎ヨコナデ ◎ナデ (9本/cm)	◎ヨコナデ ◎ナデ	褐色 褐色	石・長 (1) ○	カマド 黒斑	19
196	甕	残高 24.1	球形の胴部。1/5 の残存。	ハケ (5本/cm)	ヨコナデ 指頭瓶	褐色 褐色	石・長 (1~3) ○	カマド 黒斑	
197	甕	底径 (12.4) 残高 9.3	底部片。1/4 の残存。	ハケ (10本/cm)	ヘラミガキ	褐色 褐色	石・長 (1) ○	黒斑	

遺物観察表

SB502 出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
198	坏身	口径 (145) 丸味のある天井部。口縁端部は内傾する。3/4の残存。 残高 50	②回転ヘラケズリ ③回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ○			19
199	坏身	口径 (128) たちあがり端部は内傾し、受部端に沈線状の凹みあり。 器高 46	②回転ナデ ③回転ヘラケズリ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色 青灰色	密 ○			
200	坏身	口径 (126) たちあがり端部は丸い。受部端に沈線状の凹みあり。1/3の残存。 器高 51	②回転ナデ ③回転ヘラケズリ	回転ナデ・ナデ	灰色 棕色	密 ○			19
201	坏身	口径 (132) たちあがり端部は丸い。1/4の残存。 残高 37	②回転ナデ ③回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ○			
202	坏身	口径 (132) たちあがり端部は丸い。1/4の残存。 残高 45	②回転ナデ ③回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ○			
203	高坏	残高 67 脚部に円孔を看取。1/4の残存。	②回転ヘラケズリ ④回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密 ○	自然釉	19	
204	鉢	口径 (120) 短く外反する口縁部。1/5の残存。	回転ナデ	回転ナデ	黑色 灰白色	密 ○			19
205	蓋	残高 59 鉢の蓋。小片。	②回転ヘラケズリ ④回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ○			19
206	蓋	口径 (177) 外反口縁。口縁部は肥厚し、頭部に回転カキメ調整がみられる。小片。 残高 47	回転ナデ	回転ナデ	灰色 青灰色	密 ○			
207	蓋	残高 64 丸底。2/3の残存。	回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密 ○			
208	甕	残高 49 肩部片。小片。	平行叩き	円弧叩き	青灰色 青灰色	密 ○			
209	甕	口径 (198) 残高 72 逆L字状口縁。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰褐色 灰褐色	石・長 (1~4) ○			
210	甕	口径 (146) 残高 38 口縁部は上下方に抵抗し、口縁端面に四輪文3条あり。	①ヨコナデ ②ハケ	ヨコナデ	茶褐色 茶褐色	石・長 (1) ○			
211	甕	残高 55 口縁部下に凸面を貼付け、凸面上に割目あり。小片。	ハケ (12~13本/cm)	ヨコナデ	褐色 褐色	石・長 (1~2) ○			19
212	甕	口径 (218) 残高 19 広口甕。口縁部内面に円形浮文2ヶ	マメツ	マメツ	褐色 褐色	石・長 (1~2) ○			
213	甕	残高 35 肩部片。内面に崩壊痕あり。小片。	ハケ	ハケ	褐色 褐色	石・長 (1~3) ○			

表 61 SB502 出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法 量			備 考	図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)		
214	スクレイバー	完形	サヌカイト	4.6	6.0	0.8	2540	
215	スクレイバー	一部欠損	サヌカイト	3.5	2.5	0.8	1113	

表 62 SK502 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
216	甕	口径 (223) 残高 38	逆L字状口縁。小片。	ヨコナデ	①ヨコナデ ②ヘラミガキ	褐色 褐色	石・長 (1~2) 赤 ○	黒斑	
217	甕	口径 (144) 残高 67	広口甕。頭部に凸帶1条を貼付ける。 1/5の残存。	①ヨコナデ ②ハケ (8~10本/cm)	ヨコナデ ヘラミガキ	褐色 褐色	石・長 (1~2) ○		19
218	甕	底径 (74) 残高 42	平底。1/4の残存。	ヘラミガキ	ナデ	褐色 褐色	石・長 (1~4) ○	黒斑	19

表 63 SK503 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
219	甕	口径 245 残高 117	逆L字状口縁。1/2の残存。	ヨコナデ ハケ→ ヘラミガキ	ヨコナデ ヘラミガキ	茶褐色 茶褐色	石・長 (1~2) ○	保有者	20

表 64 SK505 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調(外面)	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
220	壺	口径 (18.0) 残高 5.2	広口壺。口縁部は下方に垂下し、頭部に凸帶を貼付け。凸带上に網目を施す。1/3の残存。	◎ヨコナデ ◎マメツ	ヘラミガキ	褐色 褐色	石・長 (1~2) ○		20

表 65 5区柱穴出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調(外面)	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
221	甕	口径 (16.4) 残高 2.9	外反口縁。口縁端部はナデ凹む。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰褐色 灰褐色	石・長 (1~3) ○	SP505	
222	甕	底径 (5.0) 残高 6.8	上げ底。1/4の残存。	ヘラミガキ	ナデ	褐色 褐色	石・長 (1~3) ○	SP505	

表 66 5区第IV層出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調(外面)	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
223	甕	残高 6.7	胴部片。小片。	マメツ	マメツ	黄褐色 黄褐色	石・長 (1) ○		
224	壺	口径 (23.3) 残高 2.8	広口壺。口縁部は下外方に垂下し、口縁端面に斜格子目文あり。小片。	マメツ	ナデ	黄褐色 褐色	石・長 (1~2) ○		20
225	高坏	底径 (12.2) 残高 2.5	脚部部に凹縞文3条、脚端面に凹縞文1条あり。小片。	マメツ	ナデ	灰褐色 灰褐色	石・長 (1~2) ○		
226	甕	底径 (6.2) 残高 2.7	上げ底。1/3の残存。	ナデ	ヨコナデ	褐色 褐色	石・長 (1~4) ○		
227	壺	口径 (11.0) 残高 3.8	短縦縫の蓋。口縁端部は内傾する。 1/5の残存。	◎回転ヘラケツリ ◎回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ○		20
228	环身	外周径 (12.2) 残高 2.6	たちあがりは短く内傾、端部は尖る。小片。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ○		

表 67 5区第IV層出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法 量			備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)		
229	石斧	刃部欠損	結晶片岩	9.5	5.9	2.0	231.59 未成品	20

第6章 調査の成果と課題

恵原新張遺跡1・2・3次調査では、縄文時代から近現代までの遺構や遺物を確認した。ここでは、遺跡の様相や変遷について、まとめを行う。

1. 遺跡の様相

(1) 縄文時代

縄文時代の遺構は未検出であるが、8区で検出した第V層中より縄文土器が出土した。6×7cm大的胴部片2点(177・178)は、内外面に楕円形状の押型文が施される縄文時代早期の深鉢である。色調は褐色であり、胎土は精良である。松山市内における縄文土器の出土例は少なく、とりわけ早期の遺物は極めて少ない。調査地周辺では谷田II遺跡より早期の土器が出土しており、今回出土した縄文土器は、調査地や周辺地域における縄文集落の存在を示唆する重要な資料といえよう。

(2) 弥生時代

前期：前期前葉の資料はなく、すべて後葉から末のものである。明確な遺構は検出されていないが、時期の異なる遺構や第V層中から該期の遺物が出土している。3区検出の土坑SK302(弥生時代中期中葉)からは前期後葉の土器片(78)、同3区検出の第V層中からは前期末の土器片(98)、5区検出のSB502(古墳時代後期)からは前期後葉の土器片(211)などが出土している。

中期：中期になると、資料数が増加する。中期前葉の資料はなく、中葉から後葉の資料に限る。中期中葉では8基の土坑が検出されている。3区からは4基の土坑(SK302・304・307・308)、5区では3基の土坑(SK502・503・505)、6区からは土坑1基(SK601)が検出されているが、このうち、5区検出の土坑SK503は径1.26m、深さ28cmの楕円形土坑で、壁体は筒状をなす。断面形態の特徴より、SK503は貯蔵穴として利用された可能性を持つ土坑と考えられる。このほか、時期の異なる堅穴建物や第V層中より該期の遺物が出土している。なお、3区検出の第V層中からはジョッキ形土器の把手部(100)が出土している。

中期後葉では堅穴建物や溝、土坑が検出されている。2区検出のSB201は推定直径6m以上の円形堅穴建物で、該期の土器片のほか砥石などが出土している。さらに、2区では土坑2基(SK205・206)、6区からは3条の溝(SD601～SD603)が検出されている。このほか、古墳時代の堅穴建物6棟(SB301・302・501・502・601・602)からは該期の弥生土器片が数多く出土し、3区や5区検出の柱穴からも同時期の土器片が少量出土している。

後期：後期は中期にくらべ資料が少なく、前葉では5区検出の柱穴(SP505)や4区から該期の土器片が少量出土しているのみである。後葉の資料はなく、末葉では4区と8区で検出した堅穴建物が挙げられる。SB401・SB801は同一の堅穴建物で、推定径7.3m以上を測る円形建物である。建物壁体に沿って周壁溝を検出したが、一部に重複する箇所がみられたことから改築の施された建物と考えられる。建物内からは土器片が少量出土したが、の中には叩きを施したものがあり、建物の廃棄・埋没時期は弥生時代末と考えられる。

これらのことから、調査地内における集落の出現は弥生時代中期中葉頃であり、中期後葉には確實に居住域として土地利用されたことがわかる。

(3) 古墳時代

古墳時代になると、遺構・遺物共に資料数が飛躍的に増加する。前期の資料はなく、中期や後期、5世紀後葉から7世紀中葉の資料である。

中期：前葉の資料はなく、後葉に限る。1区からは堅穴建物1棟と土坑3基を検出した。このうち、SB101は検出長6mの隅丸方形建物で、建物北壁中央部には造り付けのカマドが付設されている。建物埋土中からは完形の須恵器が出土したほか、カマド内からは土師器の甕が押し潰された状態で出土しており、建物廃絶に伴う祭祀行為が執り行われたものと推測される。出土遺物より、SB101の廃棄・埋没時期は古墳時代中期、5世紀後葉と考えられる。

後期：後期の資料は多く、とりわけ堅穴建物は8棟が確認されている。後期前葉では3区検出の堅穴建物SB302が挙げられる。検出長6.11m×5.61mの方形建物で、建物西壁にカマドの痕跡を検出した。壁体に沿って周壁溝の一部がみられ、溝基底面には杭痕と思われる小ビットが点在する。遺物は完形の土師器甕のほか、大型の土器片が散在して出土した。

後期中葉では、調査地中央部、3区・5区・6区にて3棟の堅穴建物を検出した。3区検出のSB301は長さ6.36m、幅6.21mの隅丸方形建物で、西壁中央部にカマドが付設されている。主柱穴は3本（配置から本来は4本と想定）を検出し、床面には幅広の溝が壁体に沿って巡らされている。また、5区検出のSB502は幅7.12m、長さ7.36m以上の長方形建物で、北壁中央部にカマドの痕跡を検出したほか、4基の主柱穴を確認した。SB301とSB502の埋土中からは完形品を含む数多くの土師器や須恵器が出土したが、弥生土器片や石器なども数多く出土している。なお、SB301のカマド内からはSB101と同様、土師器甕が押し潰された状態で出土している。このほか、6区検出のSB603は建物の一部を検出した。平面形態は方形をなすものと思われるが、正確な形態や規模は不明である。出土品や重複関係より、該期の建物と判断した。また、時期特定は難しいが、別の遺構との重複関係や埋土等から、3区で検出した2棟の掘立柱建物（掘立301・302）と6区検出の掘立601は後期中葉以降に構築された遺構と推測される。掘立301は建物方位を真北方向より東へ約30°振る東西棟で、総柱構造の建物址である。建物を構成する柱穴の平面形態は円形もしくは橢円形で、柱穴内には柱材の一部が残存しており、柱径は約10cmである。一方、掘立302は掘立301と建物方位をほぼ等しくする東西棟で、SB301より後出する。桁行長5.89m（5間）、梁行長5.22m（4間）の側柱構造をなす建物址で、柱痕は灰褐色粘土で埋没している。検出状況からは、建物廃絶時に柱が抜き取られたものと推測される。

後期後葉では、調査地中央部5区と6区にて堅穴建物が検出されている。5区検出のSB501は検出長7.62m、検出幅4.00mの方形または長方形建物で、西壁中央部にカマドの痕跡を検出した。埋土中からは土師器や須恵器のほか、弥生土器片が少量出土した。なお、カマドからは土師器壺や甕の破片が散在して出土している。6区からはSB604の一部を検出したが、規模は不明である。

後期末、7世紀代には2棟の堅穴建物が調査地中央部6区にて検出されている。SB601は長さ5.36m、検出幅3.50mの方形または長方形建物で、北壁中央部にカマドの痕跡を検出した。建物内からは土師器や須恵器の小片のほかに、弥生時代中期中葉や後葉に時期比定される弥生土器片や石器剥片が混在して出土した。また、SB601と重複する状況で、SB602が検出されている。SB602は建物の大半が

調査区外に統いており、規模や形状は定かではない。しかしながら、埋土中からは土師器や須恵器の破片が数多く出土した。なお、SB602からもSB601と同様、弥生土器片が数多く出土している。

検出した堅穴建物からは、廃棄・埋没時期を示す遺物以外にも弥生時代中期の土器片のほかに石器や石器剝片が多数出土している。埋没状況や遺物の出土状況より、これらの建物は人為的に埋め戻されたものと判断される。

このほか、7世紀の遺構は2基の古墳を検出している。4区検出の1号墳は遺存状態が良好でなく、古墳の形状や規模は不明であるが、横穴式石室を主体部にもち、石室規模は現存長2.0m、幅1.2mである。調査では玄室の一部を検出したが、後世の削平が著しく、石室内からは遺物の出土はみられなかった。ただし、石室周辺に残存する盛土と思われる土壤からは7世紀前葉から中葉に時期比定される須恵器片が出土しており、本古墳の造営時期は7世紀中葉頃と考えられる。また、7区で検出した2号墳は1号墳と同様、埴丘や外郭施設は検出されず、石室の一部と墓坑を検出した。横穴式石室を主体部にもち、石室規模は長さ2.90m、幅1.15mで、石室床面には径3~5cm大小の小砾が敷き詰められている。墓坑は長方形をなし、深さは検出面下25cmである。石室や墓坑からは遺物の出土がなく、築造時期の特定は難しいが、石室周辺からは7世紀前葉に時期比定される土器片が数点出土していることから、概ね1号墳と同様、7世紀中葉の造営と考えられる。

以上のことから、古墳時代中期後葉から終末期、およそ5世紀後葉から7世紀前葉までの約150年間にわたり、調査地内において集落が継続して営まれたことがわかる。この間、調査地は居住域として土地利用されていたが、7世紀中葉には古墳の造営に伴い墓域として利用されたものと考えられる。

(4) 古代

古代の遺構は未検出であるが、第Ⅲ層中からは平安時代に時期比定される土器片や須恵器片が数多く出土している。調査地東側、4区・8区では平安時代後期、10世紀後半から12世紀前半に時期比定される土器や須恵器が破片であるが比較的多く出土した。これらの遺物には供膳具である壺や皿、内黒碗などのほかに煮沸具の羽釜などがあり、明確な遺構は検出されていないが、調査地東方域に広がる古代集落の存在を示唆する資料といえよう。

(5) 中世

古代と同様、中世の遺構は検出されていないが、2区検出の第Ⅱ層中からは該期の土器がまとまって出土した。2区南西壁付近の第Ⅱ層中からは、土器の壺9点(34~42)が出土した。口縁部や体部の一部を欠損しているが、ほぼ完形に近い土器で、底部の切り離しは回転糸切り技法によるものである。これらは鎌倉時代後半、13世紀代の遺物と考えられるが、本来は何らかの遺構に伴う可能性の高いものである。このことから、調査地や周辺地域には中世集落が存在していたものと推測される。

2. 古墳時代集落の変遷

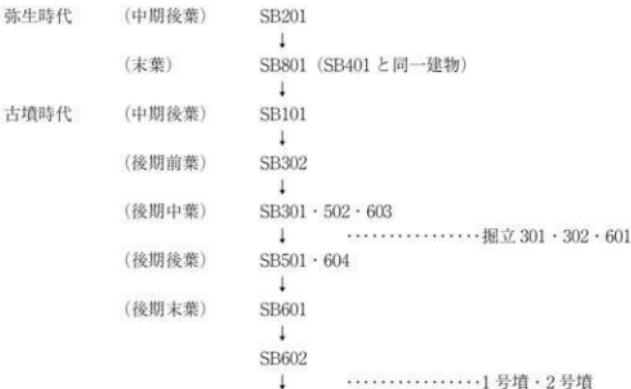
調査では、古墳時代の堅穴建物9棟が検出された。ここでは、建物の変遷についてまとめる。調査地内における建物出現期は古墳時代中期後葉、5世紀後葉である。その後、6世紀を通して数棟の建

物が構築され、7世紀前葉頃に終息を迎える。平面形態をみると、概ね隅丸方形または隅丸長方形である。規模は5世紀後葉から6世紀前葉では一辺6.1m前後であるが、6世紀中葉になると若干の大規模化がみられ、SB301は一辺6.36m、5区検出のSB502は一辺7.36mとなる。さらに、6世紀後葉にはSB501が一辺7.62mであり、検出した竪穴建物の中では最大規模となる。なお、7世紀には規模の縮小化がみられ、6区検出のSB601は一辺5.36mである。

カマドは、6棟の建物で確認した。平面形態は馬蹄形状をなし、規模は長さ1.2~1.5m、幅0.8~1.1mである。建物北壁及び西壁の中央部付近に付設されているが、その方向性には建物の時期や規模などに規則性は認められない。なお、カマド内には土師器の壺が押し潰された状態で出土した事例が3例（SB101・301・501）あり、建物廃絶に伴う何らかの祭祀儀礼が執り行われたものと思われる。すべての建物ではないが、このような事例は松山市恵原地区における古墳時代の竪穴建物廃絶の様相が知れる貴重な資料といえる。

以上、今回報告した恵原新張遺跡1次・2次・3次調査は、農道工事に伴い実施した発掘調査である。調査を実施した総面積は2,394m²、調査幅は10m前後であるが、縄文時代から中世までの遺構や遺物を多数検出した。とりわけ、弥生時代から古墳時代には調査地内において確実に集落の存在が明らかとなり、周辺地域には該期の遺跡が広く展開しているものと推測される。また、古墳時代には中期後葉から後期、5世紀後葉から7世紀前葉にかけては竪穴建物の検出により、集落が継続して営まれていていることが判明した。さらには、古墳の検出により7世紀中葉を前後する時期までは居住空間として利用されたものが、それ以降は墓域に変遷するといった遺跡の変遷を追うこともできた。一方で、古代以降については明確な遺構が検出されず、遺跡の様相を明らかにすることはできなかった。ただし、平安時代や鎌倉時代の遺物が調査では数多く出土しており、近隣地域に該期の遺跡が存在することを示す貴重な資料を得ることができた。今後、調査地一帯における発掘調査等が進行すれば、弥生時代や古墳時代の集落の広がりや様相が一層明らかとなり、さらに古代や中世集落の様相も解明されるものと思われる。

〔遺跡の変遷〕



写真図版

写真図版 1 ~ 5 : 恵原新張遺跡 1次調査

写真図版 6 ~ 8 : 恵原新張遺跡 2次調査

写真図版 9 ~ 10 : 恵原新張遺跡 3次調査

写真図版 11 ~ 16 : 恵原新張遺跡 1次調査出土遺物

写真図版 16 ~ 18 : 恵原新張遺跡 2次調査出土遺物

写真図版 18 ~ 20 : 恵原新張遺跡 3次調査出土遺物



1. 1区発掘状況（南より）



2. SB101 発掘状況（西より）



3. SB101 遺物出土状況（西より）

図
版
2



1. 2区完掘状況（南東より）



2. SB201 完掘状況（北より）



3. 3区完掘状況（南東より）



1. SB301・302 完掘状況
(南東より)



2. 掘立 301 検出状況 (北東より)



3. 掘立 301 (SP319) 検出状況
(南東より)

図版
4



1. 挖立 302 検出状況（北東より）



2. 3 区作業風景（西より）



3. 4 区完掘状況（北より）



1. 1号墳検出状況（南より）



2. SD402 検出状況（南より）



3. 1次調査現地説明会風景
(西より)

図
版
6



1. 6区遺構完掘状況（西より）



2. SB601 完掘状況（北より）



3. SB602・604 完掘状況（西より）



1. SB603 完掘状況（北東より）



2. 7区遺構完掘状況（西より）



3. 2号墳石室完掘状況（南東より）

図版
8



1. 8区遺構検出状況（西より）



2. 8区遺構完掘状況（北より）



3. SB801 完掘状況（西より）



1. 5区遺構完掘状況①（南東より）



2. 5区遺構完掘状況②（北東より）



3. SB501 完掘状況（南東より）

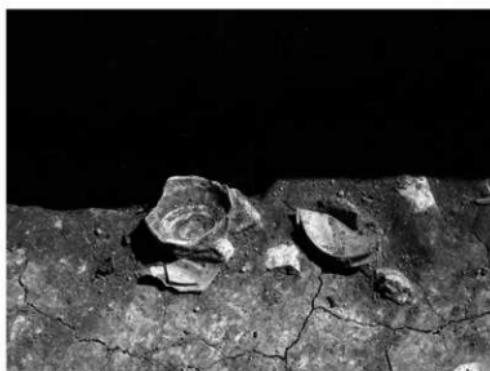
図版
10



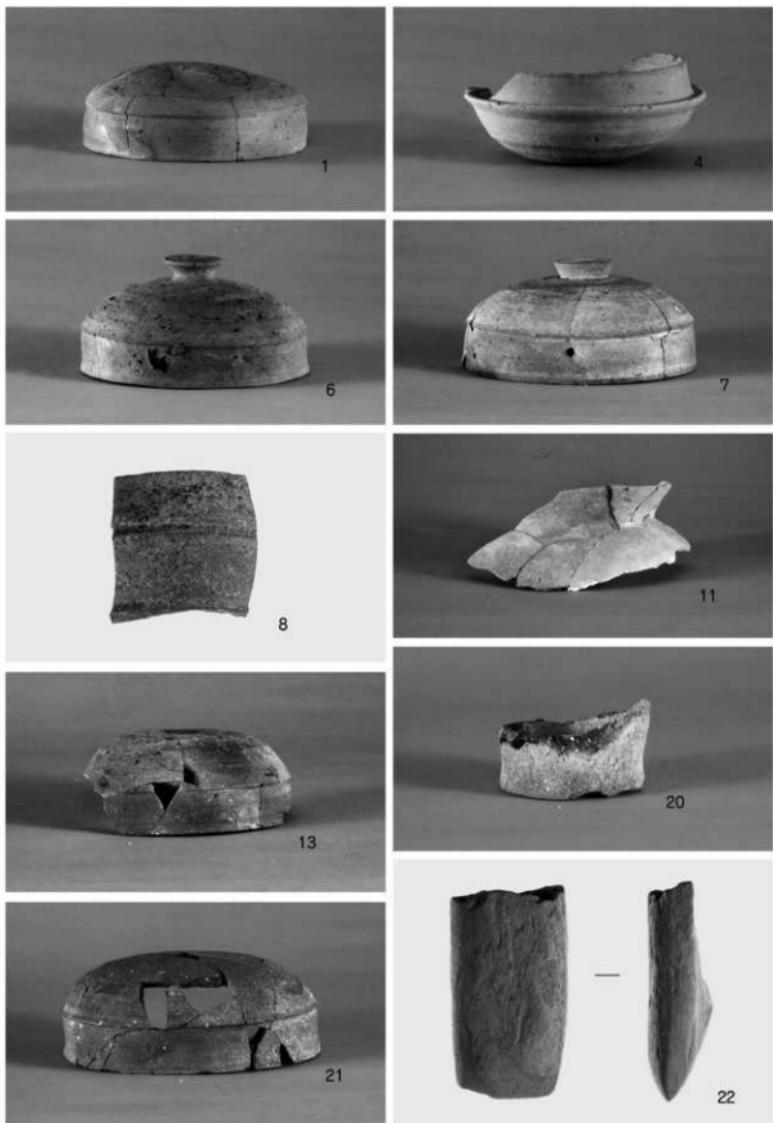
1. SB501 カマド検出状況（東より）



2. SB502 完掘状況（北より）

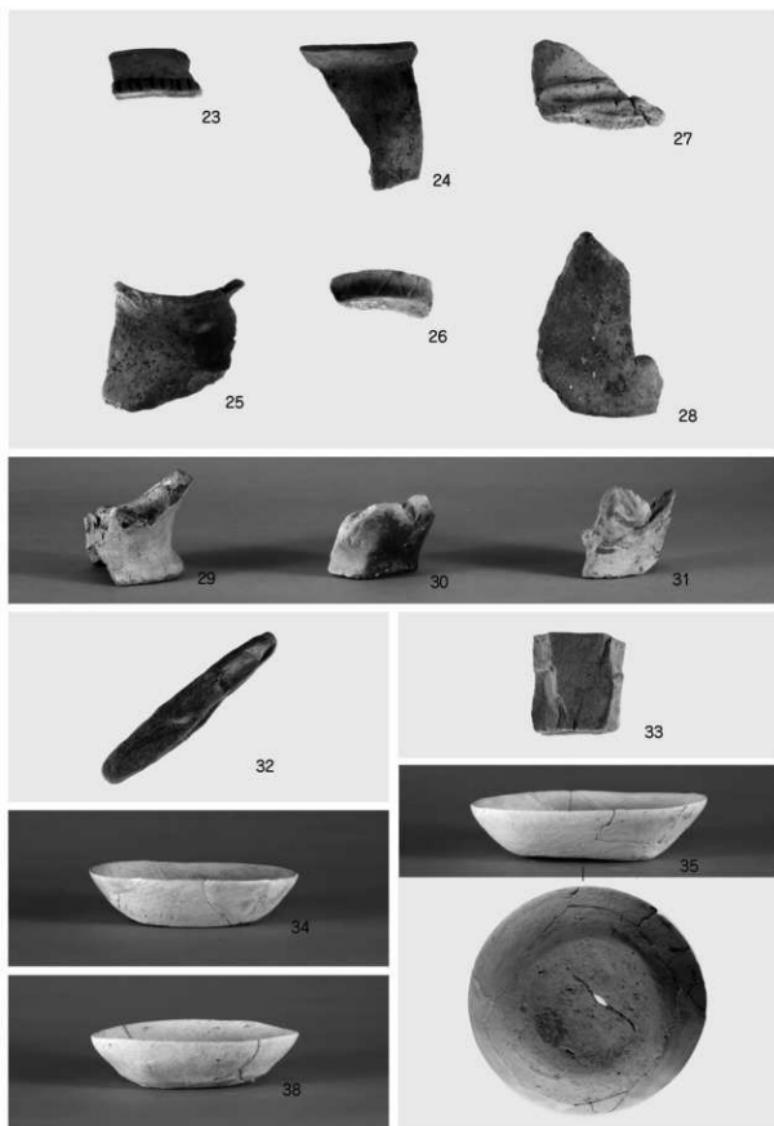


3. SB502 遺物出土状況（北より）



1. 出土遺物 (SB101 : 1・4・6~8・11、SD101 : 13、1区第IV層 : 20~22)

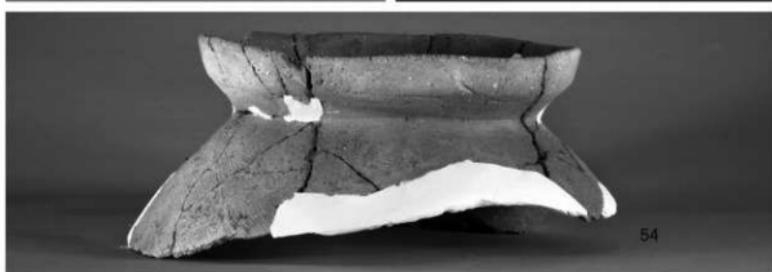
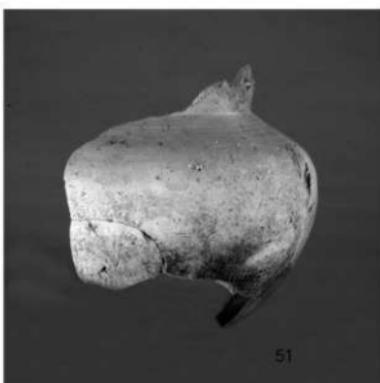
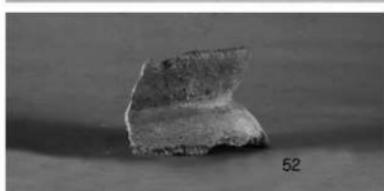
図版
12



1. 出土遺物 (SB201 : 23 ~ 33、2区第Ⅱ層 : 34・35・38)



1. 2 区第IV層出土遺物

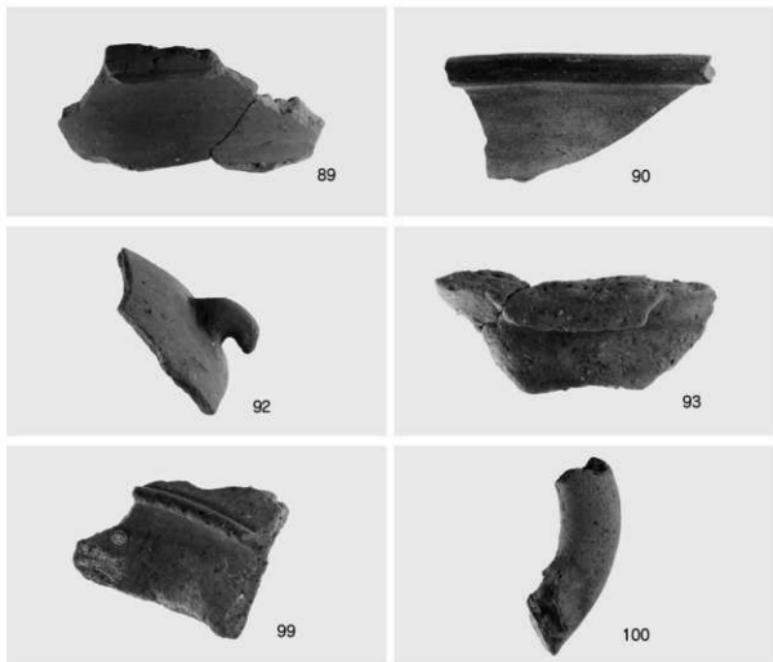


2. SB301 出土遺物①

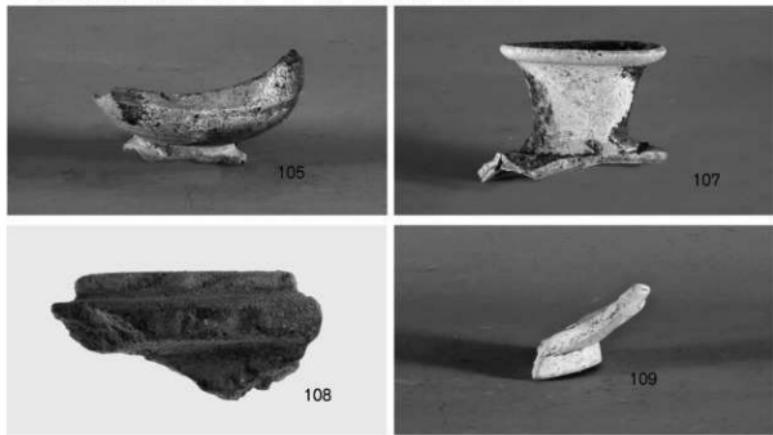
図版
14



1. 出土遺物 (SB301 ② : 61 ~ 64、SB302 : 65・66・68 ~ 71・73)

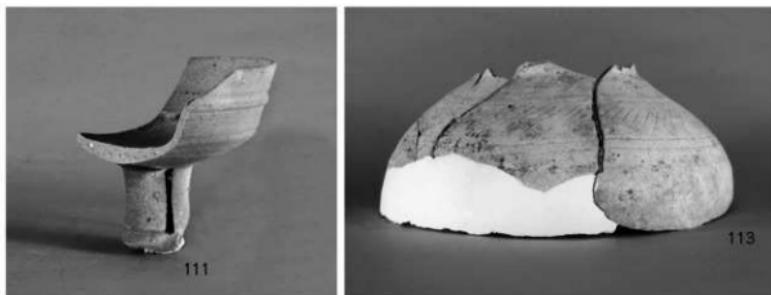


1. 出土遺物 (3 区第Ⅳ層 : 89・90・92・93、3 区第Ⅴ層 : 99・100)



2. 出土遺物 (1 号墳 : 105、SD402 : 107、4 区第Ⅲ層 : 108・109)

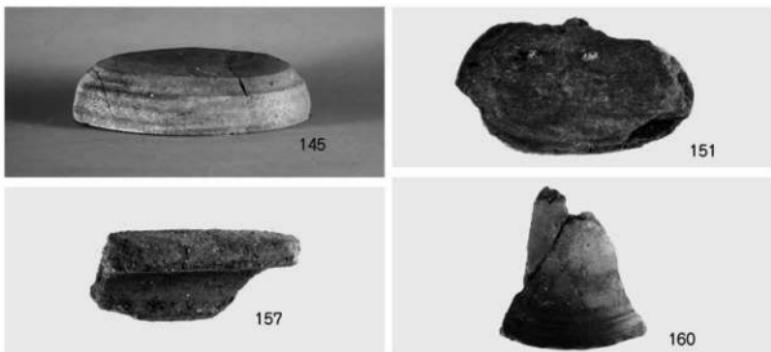
図版
16



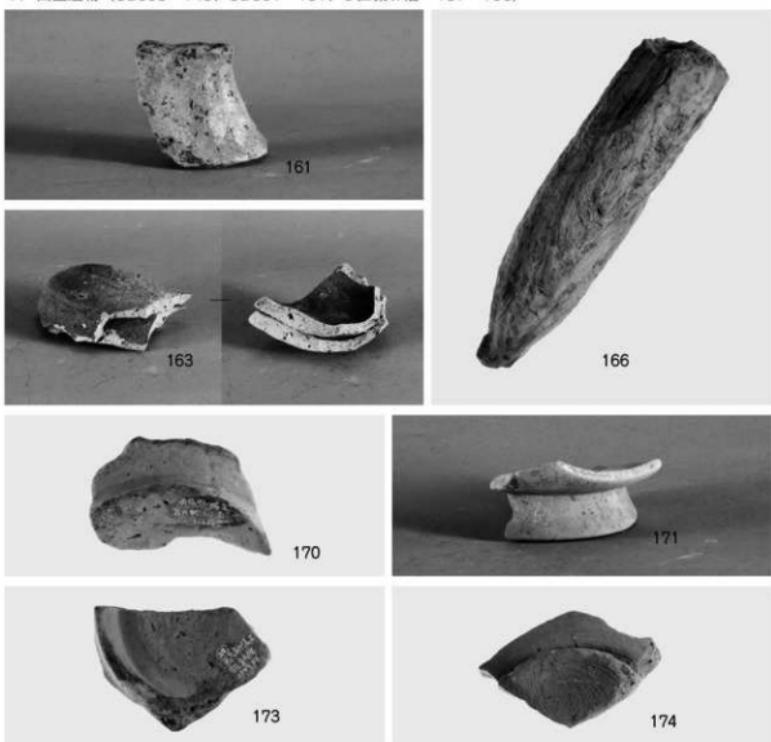
1. 4 区第IV層出土遺物



2. SB602 出土遺物



1. 出土遺物 (SB603 : 145、SD601 : 151、6区第IV層 : 157・160)



2. 出土遺物 (7区第IV層 : 161・163・166、8区第III層 : 170・171・173・174)

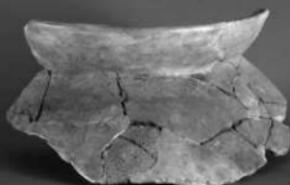


177



178

1. 8区第V層出土遺物



179



185

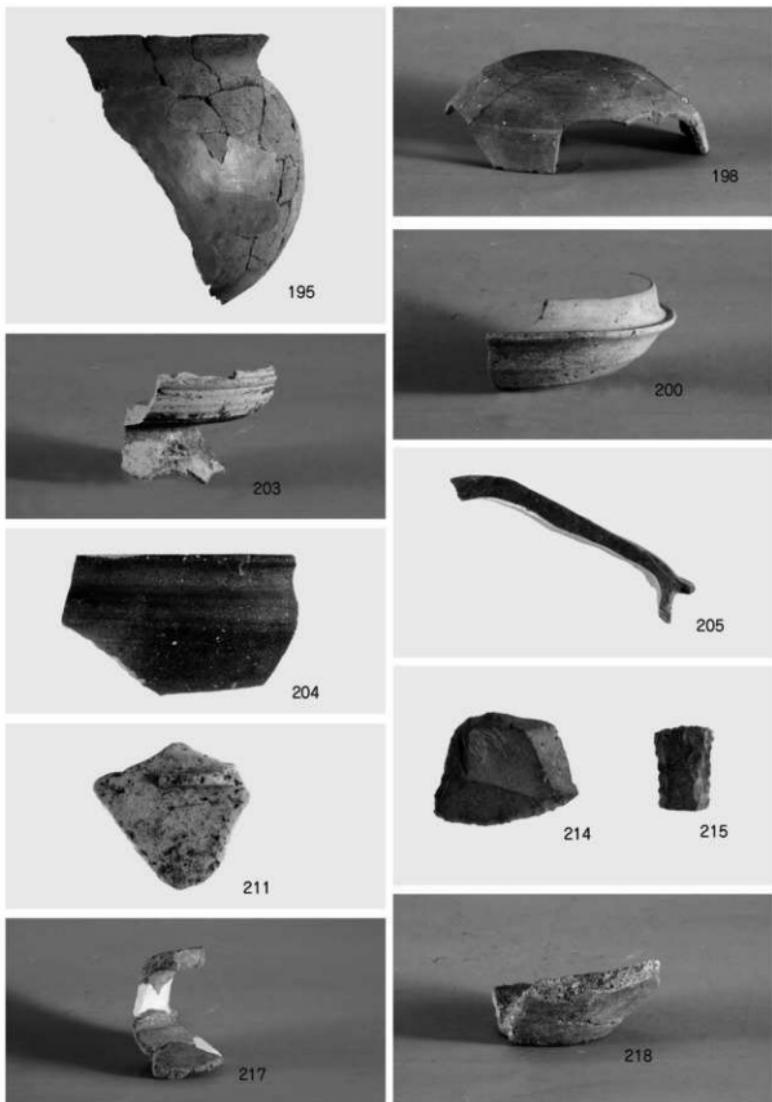


189



190

2. 出土遺物 (SB501 : 179・185、SB501 カマド : 189・190)



1. 出土遺物 (SB502 : 195・198・200・203~205・211・214・215、SK502 : 217・218)



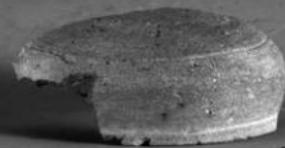
219



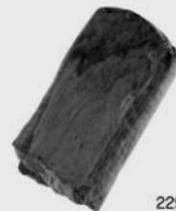
220



224



227



229

1. 出土遺物 (SK503 : 219、SK505 : 220、5区第IV層 : 224・227・229)

報 告 書 抄 錄

ふりがな	えぱらにぱりいせき
書名	恵原新張遺跡 - 1次・2次・3次調査 -
副書名	農地整備事業（通作条件整備）松山南部3期地区農道工事に伴う埋蔵文化財調査報告書
卷次	
シリーズ名	松山市文化財調査報告書
シリーズ番号	第194集
編著者名	水本 完児
編集機関	公益財団法人 松山市文化・スポーツ振興財団 埋蔵文化財センター
所在地	〒791-8032 愛媛県松山市南原院町乙67番地6 TEL 089-923-6363
発行年月日	西暦 2018（平成30）年11月9日

松山市文化財調査報告書 第194集

恵原新張遺跡
- 1次・2次・3次調査 -

平成30年11月9日 発行

編集 公益財團法人松山市文化・スポーツ振興財團
発行 埋蔵文化財センター

〒791-8032 松山市南観院町乙67番地6
TEL (089) 923-6363

印刷 セキ株式会社
〒790-8686 松山市湊町七丁目7番地1
TEL (089) 945-0111
